ISSN 0912-8182

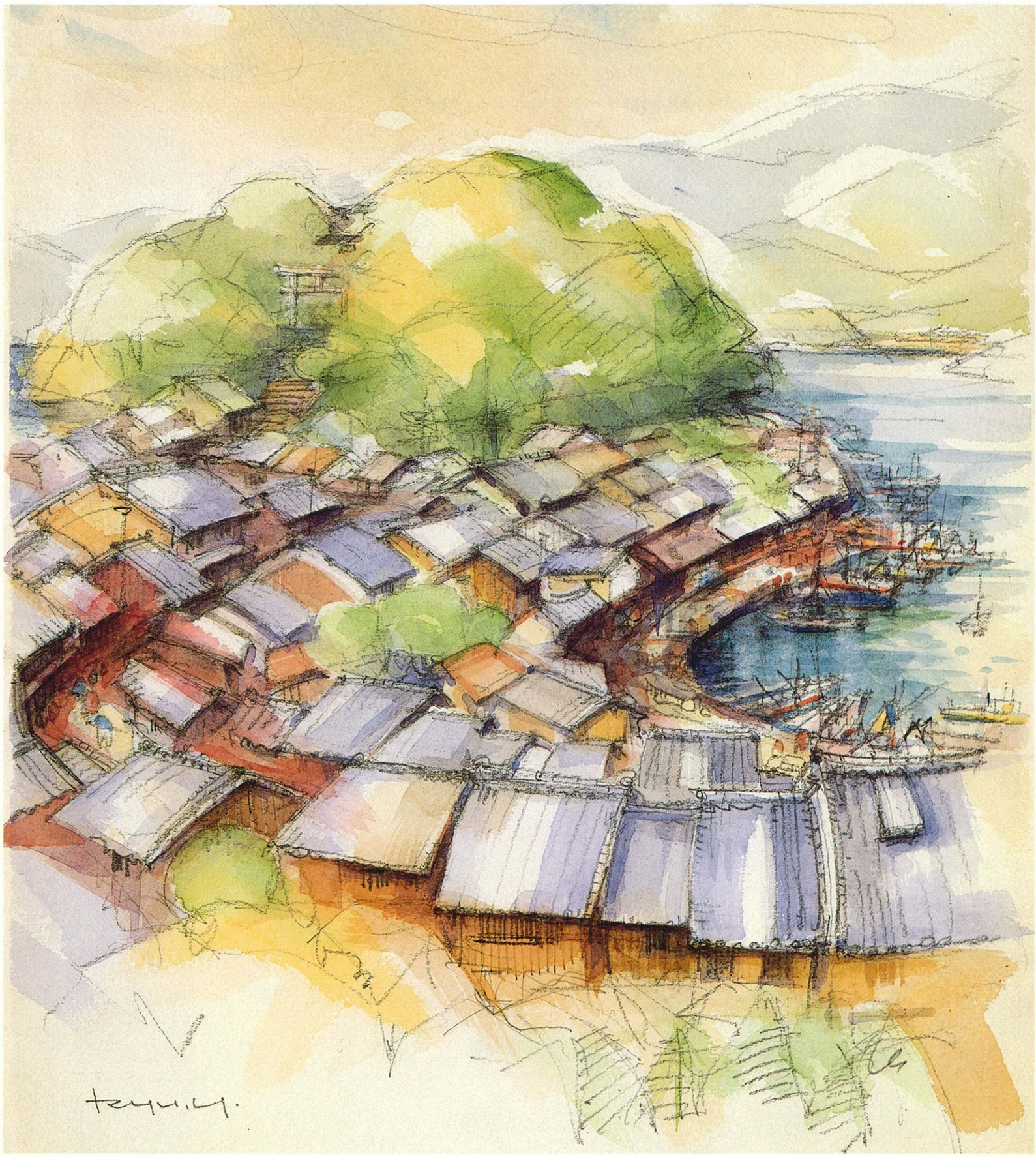
Vol. 68 通巻780号
昭和62年3月25日発行
毎月1回25日発行
昭和24年3月19日第3種郵便物認可

建築と社会

ARCHITECTURE AND SOCIETY

1987 3

創立70周年記念号



日本建築協会

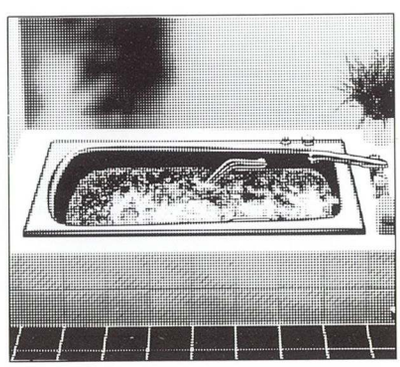


空気を吸わせると、お湯も生き返ってくれました。

お湯に吹き込む気泡が、気持ち良い、〈気泡浴槽〉

TOTO

TOTOの気泡浴槽とはいったいなんだッ。それは空気を含んだお湯が心地よい、泡の出るお風呂のことだッ。この泡の働きはたいしたもので、洗っただけでは流せないような汚れや疲れを落としてしまえる。お湯も汚れてしまうけれど、TOTO独自のろ過機付きタイプなら大丈夫。お湯をきれいに保ちます。また、この泡は、背側と足側に噴出口があって、気泡の量も強さも角度も、簡単な操作で自由にコントロール。だから好き勝手に気泡浴が楽しめます。あまりの気持よさに、みんなの入浴時間が長くなってしまいそうだけれど、そこはTOTOに免じて、大目に見てください。



※カタログご希望の方は、〒530 大阪市北区曽根崎2-3-7 梅新第一生命ビル東館 東陶機器株までご請求ください。

建築協会創立70周年を迎える

社団法人日本建築協会会長　佐野正一

この年、わが日本建築協会は創立70周年という記念すべき年を迎えた。

70年という歴史は各種団体のなかで稀有の長さである。この期間、わが国の社会と経済は有史以来の激しい変動を経験し、建築界はその起伏のなかで成長と苦しい挫折を味わい、いま国際社会とも幅広く接触しつつあたらしい発展期を迎えている。協会の70年は建築界の変動のなかに共に生きて歴史を刻んできた歳月と受けとめたい。

協会は建築にかかる学術、技芸の発展と普及を目的として、教育、設計、建設、電気、管工、建材の各分野が平等な立場で参加して発足した点が当時から特色とされた。さらにこの幅広い組織に據ってなによりも社会への語りかけ、社会への寄与をめざしたところにユニークな発想があり理想があった。これが今日にいたる協会発展の基礎となった。

この創立の趣旨に従って一般社会向けあるいは会員向けに各種の事業を継続的に行ってきた。会誌「建築と社会」の発行は大切な事業の一つ、この3月号は通巻 780号に当たる。息の長さは圧倒的である。内容の高さはかねて定評があるが、今後は一層幅広いテーマを取材して高度な充実をはかりたい。

70周年を機会に、記念式典のほかにいくつかの記念事業がある。関西住宅の歴史を回顧する展覧会や住宅関係の図書出版など意義深いものがとりあげられる。また後世に残す意味をもつ「建築協会賞」表彰制度の創設がある。建築界の発展への貢献あるいは建築を通じて社会への寄与といった業績を選んで表彰しようとするもので、建築界各分野を包含する全国団体であるわが協会にしてなし得る事業といえようか。薬袋公明氏を委員長とする表彰制度委員会でこの制度のありかたを検討し、広く候補を募って選考し賞金を添えて表彰すること、5年程度ごとにこの行事を繰り返すこと、第1回目の表彰を70周年記念式典の際行うことなど具体的な実行方法を定めた。選出するに十分な時日とはいえなかったが、20数点の応募案件があり、これを東畑謙三氏を委員長とする選考委員会で慎重審査の結果、別記の通り、賞5件と特別賞2件を選び表彰することができたのは、何よりのことだと思っている。このあたらしい表彰制度が今後建築協会の事業として定着し、建築界の発展の一助となることをねがうのである。

第1回日本建築協会賞入選発表

日本建築協会の70周年を契機として、建築界における総合団体としての性格にもとづき、建設に関わるあらゆる分野において社会に貢献した団体、または個人に対して、その業績を讃えるとともに、わが国文化の向上、公共の福祉に寄与することを目的として、今回、日本建築協会賞を創設いたしました。（作品は表彰対象から外す）

各界に広く応募を呼びかけましたところ、締切日（昭和62年１月31日）までに、22件の応募がありました。これが選考については、日本建築協会賞選考委員会（委員長：東畑謙三、表彰委員会委員長：薬袋公明、同委員11名）で、すいせん者の説明を聞く会なども含めて、数回に及ぶ選考を重ねました。

その結果、下記のとおり、日本建築協会賞５件、日本建築協会賞特別賞２件を選定しました。日本建築協会賞には賞状並びに賞牌、副賞として50万円を贈呈し、日本建築協会賞特別賞には、賞状並びに賞牌を贈呈することになりました。

表彰式は、昭和62年３月30日、太閤園で開催される日本建築協会創立70周年記念式典において挙行されます。

第１回日本建築協会賞

建築総合試験所の設立と運営

関西建築界の与望に応えて、民間の力によって設立された西日本唯一の公的試験機関であり、永年にわたり、産、官、学各界の協力のもとに運営努力が続けられている。

国等の指定試験、民間企業の委託試験のほか、諸検査、自主研究など広範な分野の活動によって、建築技術および建築物の質の向上発展に貢献している。

財団法人日本建築総合試験所　理事長　前田敏男

技能訓練校の設立と運営

戦後いち早く、電気工事需要の増大に伴う技能工の不足と工事技術の低下に対処して昭和20年10月、工事員養成所を新設し、その後、高等技能訓練校に発展させ、多数の優秀な技能工を養成して世に送り出した。あわせて、東南アジアの研修生を受け入れ、各国より評価されている。

近畿電気工事株式会社　取締役社長　若山　繁

「季刊大林」の刊行と『復元と構想』の出版

「季刊大林」の刊行並びにこれを集大成した『復元と構想』を上梓し、ここで、著名な歴史的建築物の復元と、先端技術を駆使しての未来プロジェクト構想など、独創的な広報活動を展開し、建設の営みの文化性と、その素晴らしさを広く社会にＰＲした。

株式会社大林組　取締役社長　大林芳郎

建設業界へのＴＱＣの導入

建設業界へのＴＱＣの初めての導入によって品質意識の高揚をはかり、これがＴＱＣ普及の導火線ともなり、品質向上、サービス向上による社会への貢献はきわめて大きい。また、中国建設業界とのＴＱＣ技術交流により両国の親善を深めている。

株式会社竹中工務店　取締役社長　竹中統一

Ｈ形鋼の開発

他社に先駆けＨ形鋼の製造に関して独自の生産技術を開発し、鉄骨加工の近代化を促し、超高層ビル建設を可能にするなど、鉄骨建築の普及・促進に貢献した。

新日本製鐵株式会社　取締役社長　武田　豊

第１回日本建築協会賞特別賞

大阪駅前市街地改造事業の完成

昭和36年３月に公布施行された「市街地改造法」による第一号の事業として、住宅、商店密集地区の住民をビルの区分所有者とし、土地の高度利用、および道路幅員の拡張、地区全体の不燃化をはかり、その後の法令改正を活用して４つの高層ビル―大阪駅前第１、２、３、４ビル―建設を完了し、新しい都市機能と都市景観をつくりあげた。

大阪市長　大島　靖

ポートアイランドの建設

ポートアイランドは〝山、海へ行く〟と言われた壮大な計画で、海上都市建設と、土採り跡地のニュータウン開発とを、同時進行した画期的なプロジェクトである。

港湾、住宅、新交通システム、コンベンション、ファッションタウン等の複合機能をもつ海の文化都市をつくりあげた。

神戸市長　宮崎辰雄

1917創刊
1987
第69集
建築と社会 © ARCHITECTURE AND SOCIETY
CONTENTS
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

表紙デザイン●吉田隆一
（東畑建築事務所）

舟泊まり、室津　摂播五泊の一つで、遊女伝説や本陣町家の遺構を今に残す、ロマンと郷愁に満ちた室津の町並みを眺めるには、裏山にのぼるのも良い。
古い写真で見たことのある、石積みの岸壁はコンクリートの作業場に変わり、色鮮やかな建て替え家屋が人目を欺きはするが、狭い地形にうまく軒を接してたっていたであろう町家の光景や、風下の流れに沿って低く構えた煙出しなどは、ここからでないと眺めることはむづかしい。

■特集予告
4月号／東海特集
4月号／保管・貯蔵施設
5月号／室内の仕上床
6月号／駅（予定）

会　長　佐野正一
副会長　足立　孝・市川　宏
松村雄二・薬袋公明
編集委員会（昭和61年度）
編集委員長
◎井上　滉
編集理事
井上　滉　更エ　實男
金井　弘次　水口　譲
金多　潔　山下　仁志
小島　雄　山田　敏捷
城口　庸平　横井　征夫
竹中　錬一　■法令分科会
武田　恭一　★押川　兼宏
長谷部朝郎　松田　洋三
松村　慶三　南出　和延
渡辺　忠　中島富三郎
編集委員　（作品作風小委員会）
（特集小委員会）　荒川　朱美
■計画分科会　浦山　哲
奥村　礼子　小椋　豊久
川前　勉　加藤　力
河端　秀直　黒川　省二
佐野　潤一　小林　正純
清水　肇　高瀬　由康
芝吹　千昭　○寺本　敏則
田附　尚　中山　隆
★田中　直人　林　浩二
高田　佳子　◇松村　孝治
平岡　博　水川　尚彦
藤田　治彦　（投稿欄小委員会）
北條　誠　浅野　貴志
舟橋　國男　赤井　富弘
■構造分科会　伊藤　郁郎
和泉　一義　北村　恭一
★阪本　隆敏　高田　光雄
田中　茂樹　塚口　明洋
高垣　利夫　永原　守
谷　明勲　堀畑　裕一
向井　久夫　○増渕　昌利
安田　光世　吉本　安邦
■設備分科会　（広告企画小委員会）
磯田　憲生　池渕　俊男
★遠藤　進　寛　秀明
柿内　隆雄　北村　潤
河津　隆之　鳴田　聖二
久須美高朗　中井　進
田中　脩　西牧　惠吉
中尾　信之　原田　常介
秦　學　広田　和正
■施工材料分科会　◇藤田　孝吉
★荒木　弘之　山下　修司
◇吉田　健次
○渡辺　忠
◎編集委員長　○副委員長
◇副委員長代行　★幹事

編集人　松井昭光
印刷　昭和62年2月20日
発行　昭和62年2月25日
発行人　吉田悦二
発行所　（社）日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　06—348—0635
振替口座　大阪1-39975
印刷所　日本写植印刷株式会社
電　06—606—1111(代)
大信印刷株式会社
電　06—451—7631
株式会社研文社
電　06—314—0151
定価　950円（送料共）

3
通巻780

創立70周年記念号

COMMEMORATION ISSUE FOR THE 70 TH ANNIVERSARY OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATIC OF JAPAN

巻頭言
建築協会創立70周年を迎える／日本建築協会会長　佐野正一——1
会告
第1回日本建築協会賞入選発表——2
大先輩に聞く
小林清周／赤井富弘——4
東海ルネサンス
ぬくもりのある町づくりを／山田昇平（大須ういろグループ会長）vs 中島　一——6
東海の建築マップ
弥富町立弥富北中学校．美並村基幹集落センター——9
書評
現代ペラペラ住宅への疑問—「笑う住宅」（石山修武）「日本人の『住まい』はどこから来たか」（吉田桂二）、「奥座敷は奥にない」（中岡義介）／橋本敏子
第一人者二人による計画論—「まちづくりの話」（富安秀雄・藤田邦昭）／高田光雄——10
会員グループの頁
大日本土木——12
新建材紹介コーナー
Field-GRC（中山製鋼所）／長橋英彦——13
GBRCニュース
乾式石張り工法非耐力外壁の耐火性能試験結果——14
読者の頁
書評「東京21世紀の構図」（尾島俊雄著）／片方信也ほか．コープフォーラム'87・いま，日本のコープ住宅がおもしろい．博物館明治村特別展示「明治建築をつくった人々—武田五一・人と作品」——15
建築の眼
集合住宅計画をもっとリッチに／巽和夫．ザ・街なかの美観／古林敏郎．ある街並／谷淳之介．臨場感／美濃吉昭——16
特集
創立70周年記念号——
カラーグラビア
大阪モダニズムの精華—大阪の近代建築ディテール——（別冊）—19
記念論文
大阪モダニズム変容の70年——向井　正也—55
対談
大正・昭和初期の世相と建築—建築をめぐる自分史——61
出席者／白石登喜男・東畑謙三　司会者／足立孝
アンケート
最近20年間，そしてこれからの10年—建築，まち，くらし，社会を語る——69
21世紀の建築様式／原桂一郎．『心の豊かさ』／森内盛一郎．成熟社会への道／田中孝男．国際化・高付加価値の時代／藤縄正俊．地方に芽吹いたコンペ・エネルギー／牛山勉．ここらでゆっくり，手間ヒマかけて…／瀧光夫．今を考えつつ未来をさぐる／山本良介．この環境の変化に〝働き〟を出して…／志賀修一．都市の活力としての商業施設／藤田邦昭．群居—ゆたかな質感と表現をとりもどすために—／大野勝彦．人間社会近代化への「苦悩の時代」／広原盛明．暮らしの中の心痛むもの／田中恒子．「アンケート」／田中喬．失われた心象風景と地域性／櫻井敏雄．市民参加でマイナスデザインからの脱却を／恒成一訓．日常生活から文化が生みだされるために／喜多俊之．高齢化社会とストックの充実／右田紀久恵．セカンド東京になった大阪／宮本憲一．なりふり構まう都市づくりを／木津川計．失われた汀線／長尾義三．都市と緑のアメニティ／庄谷邦幸
年表
最近20年間の年表—建築界と建築協会の動き——79
構造の頁145
施工材料の頁147
設備の頁148
月報
X線による非破壊検査の原理と画像処理の実際（その1）／長谷川敦史——92
アブレイシブジェットによる鉄筋コンクリートの切断／石橋穣治——93
ガスによるコージェネの現状と発電機システムのパック化／藤野耕一——94
日本建築協会月間の動き（昭和62年1月分）——96

小林 清周

1．生い立ち——呉服屋の9代目として

建物の維持管理（保全）の研究で著名な、小林清周氏は、1909年（明治42年）新潟県上越市（当時は高田市）の呉服屋の長男として生まれた。実家は1700年より200年以上つづく名家で、清周氏は9代目に当たる。本来なら後継者として家業を継がなければいけない立場であり、悩んだが、父親の理解もあり学問の道に進んだ。子供の頃は、家の障子をはずし、立てかけて竹を筋交いにして、立体形を作るのが好きだった。それが、建築の興味へとつながり、中学校、そして東京の第一高等学校へと進んだ。尚、実家は、現在立派なビルに建て替わり呉服屋もその中で引き継がれている。

2．建築を志して——東京工業大学建築学科

第1高等学校に入学してからは、1年は肋膜炎、2年で肺尖、3年では神経衰弱で、東大第2志望に入ったものの、体の調子が悪く、一年浪人することになる。ちょうどその時期に東京工業大学の建築の小林政一教授の進めもあり、新設3年目の同校に進むことになる。身体の方は、浅草の富士明神のおきゅうの効果で、大学入学後は調子もよくなり、よく親友の三井男爵の家へ行って一緒にダンスホール「フロリダ」で遊んだりして大いに学生時代を楽しんだ。

就職は、氏の言葉をかりると「清水建設を30秒で落ち、海軍省を30秒で合格」して、海軍省に進んだ。この話は、清水建設の面接の途中に社長が入ってきたのだが、誰かわからず、あいさつをしなかったことで、即座に面接の専務から「君は請負に向かない」と断られ、次に海軍省をうけにいったときに、清水建設の時の話しをするとその場で合格になってしまったということだ。

3．建設省の思い出——アメリカの影響

海軍省そして戦後の建設省時代を通して、小林清周氏にとってアメリカの影響は大きかった。海軍省当時は、まず横須賀海軍へ入り、建築学会の鉄骨構造委員会で活躍した。そして、本省建築局の技師、技術少佐となり、南洋諸島の燃料庫や飛行場を作ったが、あとになってアメリカとの桁違いの技術格差をいやというほど味わった。

戦後は、運輸建設本部を経て、建設省に入る。建設省では、関東地建の営繕計画課長、そして本省の営繕局計画課長を務める。計画課長時代は、今の建設省の営繕業務の基礎となる、合同庁舎・実態調査、及び予算要求の根拠となる緊急度・判定基準、そして特別修繕費の考えなどを発案し押し進めていった。また保全の問題として、「官庁建物管理公社法案」構想も作った。これらは、戦中、戦後を通じて学んだアメリカの思想や制度の影響を強く受けていた。

合同庁舎のはしりは、昭和25年ＧＨＱ（総司令部）に出頭したときに、係官から「これからの官庁々舎はなるべく合同して建てれば国民は便利であるし、敷地・予算も経済的である。アメリカでは以前から郵便局のような特別会計や裁判所のような司法関係のものまで行政官庁と合同して建てているので、その方針でやるよう。」との指示をうけたのが一つのきっかけになった。また、「アメリカでは、すべての庁舎のメンテナンスは行き届いているが、日本ではどの役所へ行っても汚らしい。君たちは建てることは一人前かもしれないが、建ててからの管理知識はゼロに等しいじゃないか。」というＧＨＱのマントン担当官からの一言が、小林氏に維持管理を一生のテーマとさせた。マントン氏はその後小林氏のよきアドバイザーとなる。また小林氏は、このことをきっかけに、日本建築学会の建築経済委員会にお願いして委員会を作り、各省からの委員と共に専門委員として「耐火建築物の維持保全に関する研究」を完成させた。そして、この内容は随分各方面に利用された。

1955年、近畿地方建設局営繕部長に着任した。大阪は、終戦直前に勤務していた思い出の地であった。この時期の近畿地建は、第一合同庁舎や神戸港湾合同庁舎の建設で活気にみちあふれていた。またそのころ、創立間もない住宅公団への応援のための委託工事のいろいろなエピソードは、今も思い出深いできごとだったようだ。



こばやし　せいしゅう

1909　新潟県生まれ
1934　東京工業大学建築学科卒業
　　海軍省に入省
1952　建設省営繕局計画課長
1955　建設省近畿地方建設局営繕部長
1960　㈱鴻池組 取締役 研究担当
1963　大阪工業大学教授（1984年まで）、工博
1979　日本建築学会論文賞受賞
　　「建築物の維持管理に関する一連の研究」

4．保全管理・マンション管理の研究――吉田首相の教示

小林清周氏は、昭和35年退官し、㈱鴻池組を経て、大阪工業大学教授として、テーマである建物の維持管理の研究を進めた。この間の氏の業績は数多く、電々公社の委託研究による海砂対策、ＧＳＡ（アメリカ連邦調達庁）の教示の大きかった省エネルギーの研究、建物のライフサイクルの研究、著書出版、ビル管理業の育成など、数知れない。建物のライフサイクルの研究では、大阪ビルディング協会の参与として数多くの会員ビルの維持管理に接することができたことも、得がたい経験であった。特に50年以上前に建った貸ビル38件を、さかのぼって追跡調査し、今なお継続しているのには驚く。

著書については、『分譲マンションのすべて』が名著であるが、新刊としては、『ビル・マンションの経営企画と管理』があり、早くも評判である。ビル管理業の育成については、1982年の世界ビルメンテナンス大会報告でまとめられているが、氏の言う、ビルメンテナンス業に内外装の修繕部門をつくり、即時修繕という考えには、共感をおぼえる。

マンション管理の研究のきっかけとなったのが、吉田首相の教示だというのも、興味深い。これは、建設省に在職中、都内目黒区に国家公務員共同宿舎を建設したが、その際、故吉田首相から呼びつけられ「迎賓館の隣りだというのにバルコニーに一杯の洗濯物を干して誠に見苦しい。君等はそのことを意識して設計しなかったのか」と怒られ、止むなく道路沿いに目隠しの樹木を植えこんだ経験による。そしてその後、アメリカ、フランスのマンション調査を含めて多くの研究を行うこととなる。

5．これから――共鳴を呼ぶ建築を造りたい

小林清周氏のこれからの研究テーマは、修復による付加価値の研究にある。そして建物の価値に対する理論解析を進められている。「わずか20万円の外装の改修で、100万円増の価格になる。これはなぜか？」実費から考えると計算できない〝美〟という要素を建物の価値観に入れなければいけない。価値観と価格とは違う。

この価値観（美）の理論解析は、『共鳴』という要素で解明できるのではないか。物的相互の共鳴があるのと同様に、人的と物的との共鳴も考えられるのではないか。そして人的どうしの共鳴が「一目ぼれ」として解釈できるように、建築においても、住む人に共鳴を与え、幸福にする家があってもよい筈であって、建築家が「共鳴する建築」を、名人芸でなしに理論的に造り出したいものであるという。

6．後輩たちへのメッセージ
――かゆいところに手のとどく営繕であれ

小林清周氏は、「営繕」という言葉の意味をもう一度かみしめてほしいという。（公共建築全般に言えることでもあるが）いたいところ、かゆいところにすぐ手のとどくのが本当の営繕の姿である。〝営〟（つくる）だけでは意味がない。そしてまた、ただ悪いところを〝繕〟（修理）するだけでもだめである。そこに美を取り入れて、町を歩く人にも共鳴を鳴ぶ建物として維持していかなければいけない。なぜなら建築の美観は、建築の価値観を高めるからである。

赤井　富弘（編集委員・近畿地建）記

著書

ビルの維持管理　（森北出版）
ビルの経営　（理工図書）
建築工事の失敗例　（森北出版）
ビルの管理（その理論と実例）　（森北出版）
分譲マンションのすべて　（鹿島出版）
建物の値打ちの高め方　（学芸出版）
ビル・マンションの経営企画の管理　（住宅新報）
不動産鑑定士と共著

ぬくもりのある町づくりを

山田昇平　大須ういろグループ会長
VS
中島　一　東海支部長・愛知工大教授


中島　一


空の見える地下街・麹(もち)の木広場


大須観音の境内

モノが豊かなだけではモノ足りない

中島　名古屋には、全国一の規模を誇る地下街が名古屋駅と栄駅を中心に広がり、大いに賑わっています。ところが地上の方はどうかと考えると、賑わいのある街としてはもう一つ少ないように思えます。そのせいか、東京・大阪からやって来た人から、名古屋のまちはそれほど活気を感じない、例えば名古屋駅前に立っても人が少なく賑わいがない、これで人口200万人のまちなのだろうか、30万人ぐらいのまちのようだ、といった声をよく聞かされます。

また名古屋には、全国に誇れる久屋大通りや若宮大通りなどの100m道路があり、地下鉄網や都市高速道路もどんどん整備されてきており、名古屋のまちが大きく発展してきています。が、その一方で、戦後40年以上が過ぎ、モノがかなり豊かになってきたおかげでしょうが、人々は生活の便利さだけでなく、心の豊かさ、暖かい人と人とのふれあいを強く求めるようになってきています。

そこで今日は、人が賑わい、人と人との暖かいコミュニケーションから文化が生まれるような町づくりについて、500年の歴史と伝統をもつ大須の町を中心に、お話しを伺いたいと思います。

まずはじめに、山田さんは名古屋地下鉄地下街連合会の会長もなさっていると聞いていますが……。

山田　1963年から名古屋地下鉄栄地下街組合長をやっており、1981年からは名古屋地下鉄地下街連合会会長もやっています。また、名古屋駅前と栄の地下街は、今から30年前に、日本で一番最初にできた地下街なんですが、その当初から両方を知っているのは、もう私一人になってしまっているのかもしれません。もともとは、せっかく地下鉄をつくるのに穴を掘るんだから、地下鉄の上に地下街をつくったらいいじゃないかといった程度の考えで始まったものです。もちろん地上の交通緩和のためということもありましたが……。ところがいざつくるとなったら、なにせ日本で初めてのことですから、いろいろと大変な工事でありました。そして地下街の空間ができた後も、今度は店が入ってくるかどうかの苦労がありました。当時はまだ、地面の下で商売をするのかといった考え方でしたから、食べ物を人様が歩くその下で売るわけにはいかないとか、あるいは服飾など色ものが人工照明だけで売れるのかといった心配があったようです。

そうして地下街が徐々に拡大されていき、今では名古屋駅前に大きな地下街がいくつもでき、大いに賑わっています。また、ビルの地下街とも結びついて、初めて来た人にとっては、大きくて道がわかりにくいとか、迷路のように複雑だといった声が上がるほどになってきています。そのような名古屋駅前の反省に基づいて、栄には噴水のあるクリスタル広場をつくったり、空の見える麹(もち)の木広場をつくったのです。

中島　地下街に広場をつくるというのは、確かにすばらしいことだと思います。ランドマークになりますし、待ち合わせをする場所にもなります。地下街は雨の日はまことに便利だし、冬は暖かく夏は涼しくて、人が集まりやすいのだから、商店街でショッピングをするだけでなく、そこに人と人とが出会い、楽しい時間を過ごし、新しい文化が生まれてくるような空間であってほしいものです。その点、クリスタル広場やもちの木広場はすばらしいですね。

ただ、地下街の難点としては、人工照明だけなので昼と夜の変化がない、そろそろ黄昏時だなぁといった自然とのふれあいがない、また四季の変化が乏しい、ということがあります。さらに、人工空間の宿命なのか、そこではどうも人は構えてしまう傾向にある。自分をつくってしまうというか、本音で人と人とがふれあうことが少ないようにも思えます。だから、例えば地下街で祭りをするというわけにはいかないと思うんです。そういった意味から、最近また大須のまちに若者が集まるようになってきているようですが……。

歴史と新しさ、若者と年寄が混在する大須

山田　大須のまちは、大須観音を中心に門前町として500年の歴史と伝統をもつ大須商店街があり、寺院・神社があるかと思えば映画館・演芸場があり、家具や仏壇の問屋街があるかと思えばテレビ愛知があるといった具合に、多種多様な顔をした街が混在しています。それが大須の特長であり、おもしろいところじゃないでしょうか。そして、そういうところでこそ、ひょっとして人間というのはやすらぎを覚えるんじゃないかと思うんです。あまりきれいな店がずうっと並んでいるよりも、お好み焼き屋があったり、ブティックがあったり、その隣りに古着屋があってもいいと思うんです。

また最近できたアメ横には、遠く長野や三重の方からもよく電気製品のパーツを買いに若者がやってくるようです。東京の秋葉原や大阪の日本橋までいかなくても、ここで全部揃うからといって集まって来るのです。

そして、イベントとしてはやはり大道町人祭りがメインになりま



山田昇平

やまだ　しょうへい
1927　名古屋市生まれ
1951　東京大学経済学部商業学科卒業
　　㈱大同洋紙店名古屋支社入社
1956　合資会社大須ういろ入社
1970　㈱大須ういろ本店設立に伴い代表取締役社長
　　大須ういろグループ会長に就任、現在に至る
その他
1963～　名古屋地下鉄栄地下街組合長
1967～　名古屋市交通問題調査会委員
1980～　名古屋生菓子工業協同組合理事長
1981～　名古屋地下鉄地下街連合会会長
1983～　㈳愛知広告協会理事長、大須学区協議会長
　　ほか多くの要職を兼務

すが、そのほかにも毎月18日と28日に大須観音の境内で行われるガラクタ市がだんだん定着してきて賑わうようになってきています。さらにこれからは、四季折々のイベントを、年中行事として定着させていきたいと考えているのです。そうすることによって、お客様が、とくに地上のお客様が来るんじゃないかという気がするんです。例えば、お正月の初詣、２月の節分、それから春に若草祭りをやって、夏に夏祭りをやって、といった具合に。それから特に私は今、夏にホオズキ市とアサガオ市をぜひやりたいと思っているんです。そういうイベントは、まさに青空のもと、太陽の下でやらないとだめでしょうね。

中島　それから現代の社会は非常に不思議なことに、プロセスを重視しないで、でき上がったものだけを見ているところがあります。つくり上げていくプロセスを誰も見せてくれない。しかし特にこのあたりの名古屋仏壇や名古屋タンスといったものは、伝統工芸ですから、やはり次の世代にもつくっているところを見せてほしいと思うんです。それは、伝統を受け継ぐためというだけでなく、若者がそれをつくるんじゃなくて、それがつくられるプロセスを見て知ることにより、また別の新しい文化が必ずつくられていくからなんです。

山田　ちょうどこの辺には、ちょっと路地を入ったところに格子のはまった家が並んだ職人の町があるんです。そこでは、おじいさんが彫金や木彫や漆を塗ったりしているんです。私はそういうところが大好きなんです。そういう町こそ、これからも残していかなければならないと思うんです。しかし実際にはだんだんと少なくなってきているようです。仏壇屋とか家具屋とかは、そういった職人さんたちがつくったものを寄せ集めて組み立てるだけなんですから、ほんとうに重要なのは、その一つひとつの部分、部品をつくる職人さんなんですからね。

中島　そういう職人さんたちを、別の場所で残してもしかたがない。やはりここで生まれたのだから、ここで残さなければ意味がないと思うのですが……。

それから最近は、いろんな町でよく再開発をやっており、すべて経済の原則からスクラップ・アンド・ビルトでやっているようですが、あれは実に物質中心主義の考え方だと思いますね。

山田　たしかに、へんな再開発をしてもしかたがないと思います。歴史のないところは、スクラップ・アンド・ビルトでいいと思うんですが、歴史のある、伝統のあるところは、そうではいけないと思います。スクラップを止めて、メンテナンスをしなければいけないと思います。

ぬくもりのある町から本物の文化が育っていく

中島　ところで、四谷・山手通りですが、あそこは大須と違って歴史のない何もなかったところに、名古屋大学ができ、南山大学ができ、中京テレビができ、病院ができ、そこへ最近ではマンションができ、ブティックができてきて、ファッショナブルな新しい街になってきていますが、山田さんは四谷・山手通りについてはどうお考えでしょうか。

山田　東京でいえば、原宿・六本木のような考え方の街だと思うんです。大須とはまったく異質の、新しい街ですが、あれはあれですばらしいと思います。地下街とは一味違う、地上ならではの、一つの街づくりの形だと思います。しかも大学がありますから若いジェネレーションが集まってきて、活気があっていいですね。ただあえて難点をいえば、若者だけの街である点でしょう。年配の人はどうも行きにくい。

そういう意味では、大須にはあらゆるジェネレーションの人たちが集まってきます。そして祭りがあり、年中行事の市が開かれ、赤門通り一帯で毎月夜店が開かれ、アメ横があるといった具合に、あくまで四谷・山手通りとは違った、下町の、人のぬくもりのある町だと思うんです。それは、デパートや地下街のような人工の、すっきりした統一感のある街には不可能なことでしょう。やはり、ごった煮のようなまちの方が、ぬくもりを感じると思うんです。

中島　たしかに、ぬくもりのある町というのは、最近私たちが忘れていたことであり、これからの町づくりのテーマになっていくでしょうね。よそ行きでなく、普段着で、構えないで人が集まってきてコミュニケーションできる町からこそ、本物の、ぬくもりのある文化が育ってくるはずですから。そして名古屋市民が心の故郷と感じるような、四季折々の風情のある町として、大須がますます発展していかなければいけないでしょうね。

今日はいろいろ楽しいお話しをいただきありがとうございました。

旭化成建材は豊かな環境づくりを推進します。

ヘーベル

西独ヘーベル社との技術提携で生産しているALC（軽量気泡コンクリート）。建築の屋根・床・間仕切・外壁に使用される。軽い・断熱性に富む・火に強い・寸法精度が高い……などの特長を有することから、経済性・居住性・施工性に大変優れた建材として、都市部を中心に多彩な用途の建築に活躍しています。

ヘーベルグランデ

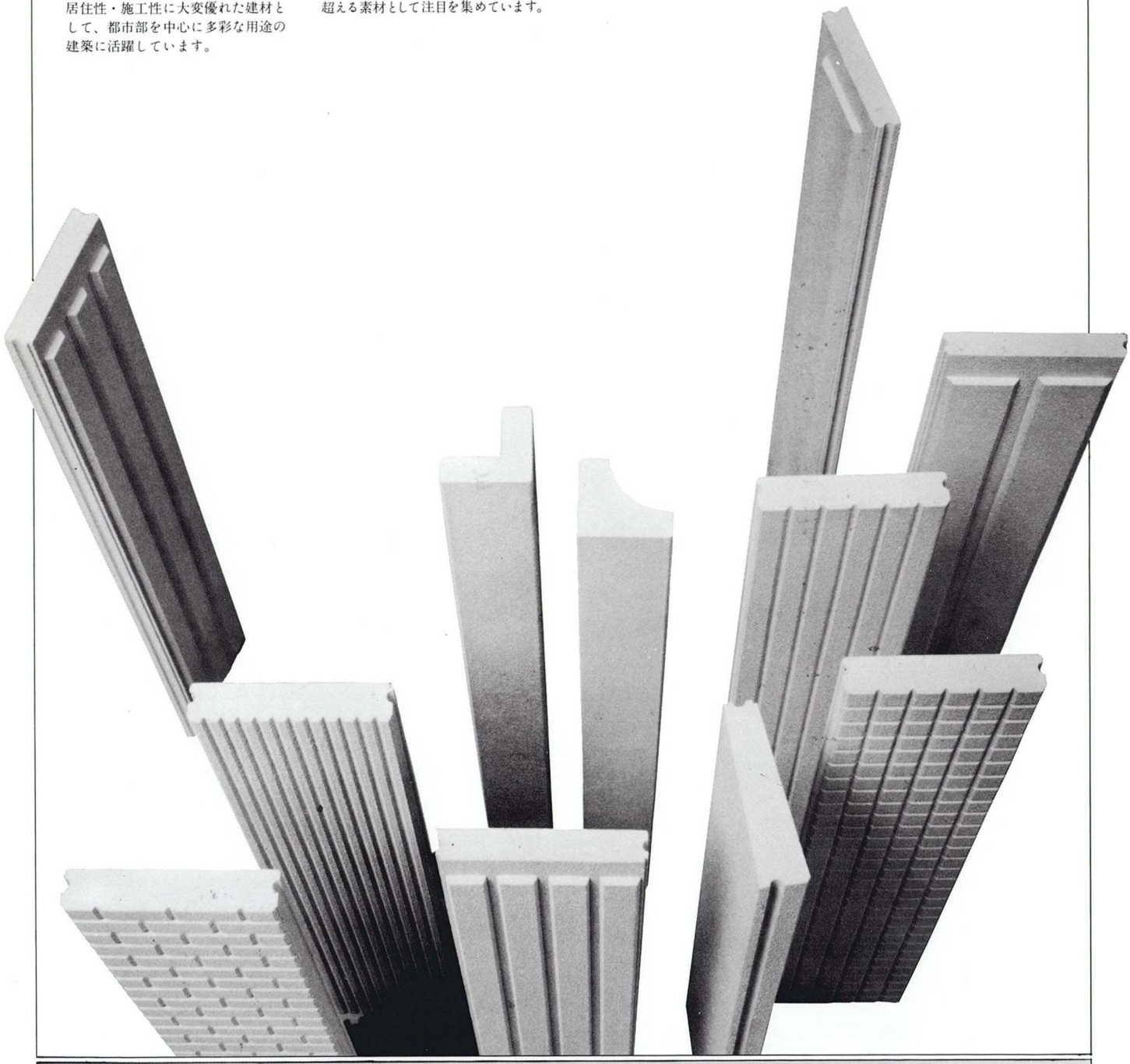
ヘーベルの特性をそのままに、一体成型された大型ALCパネル。ALCの常識を破った幅1800㎜。ダイナミックで力強い壁面・免震ファスナーによる取付け・高度な工業化等々、意匠性・施工性・経済性ともにPC版を超える素材として注目を集めています。

AHSパイル

高温・高圧・蒸気養生によって生み出される高強度基礎杭。普通コンクリートの約3倍強に当たる圧縮強度を有し、品質のバラツキもないため、杭の小型化・軽量化を推進し、施工の合理化を達成します。

ACCSパイル

高温・高圧・蒸気養生を経て生産される高強度コンクリートと鋼管による複合杭。引張力に強い鋼と、圧縮力に優れたコンクリートの長所を組み合わせた最先端を行く杭として活躍中。



中日本旭化成建材株式会社

各製品の問合わせは ●本　社：大阪市北区堂島浜1-2-6 新大ビル ☎06-347-3846

●営業所：名古屋市中区錦2-2-13名古屋センタービル☎052-221-9654/金沢市片町2-2-15北国ビル☎0762-31-7188/高松市寿町1-2-5朝日生命高松第二ビル☎0878-22-0305

有豊化成株式会社

●本　社：東京都新宿区西新宿3-2-5富山化学ビル☎03-348-2017

●出張所：名古屋市中区栄5-3-21☎052-261-6681

サン工業株式会社

●名古屋市北区金城3-12-18☎052-914-1851

弥富町立弥富北中学校

所在地　愛知県海部郡弥富町大字鎌倉62
設計　青島設計
施工　鹿島建設・佐藤工務店・内藤産業共同企業体
敷地面積　32,386㎡
延床面積　9,962㎡
規模　地上3階
構造　鉄骨鉄筋コンクリート造
竣工　1980年3月

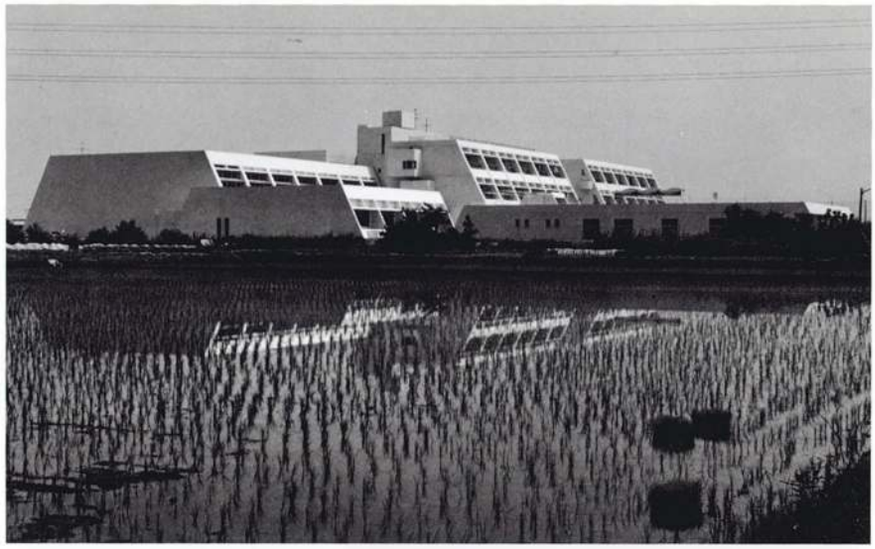
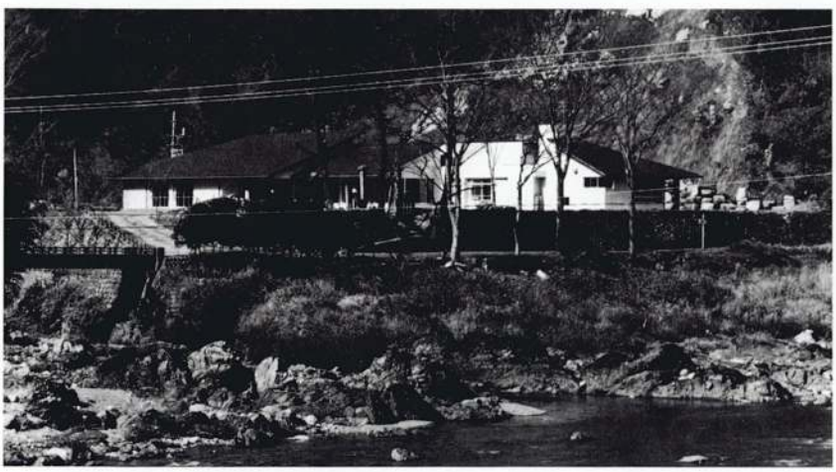
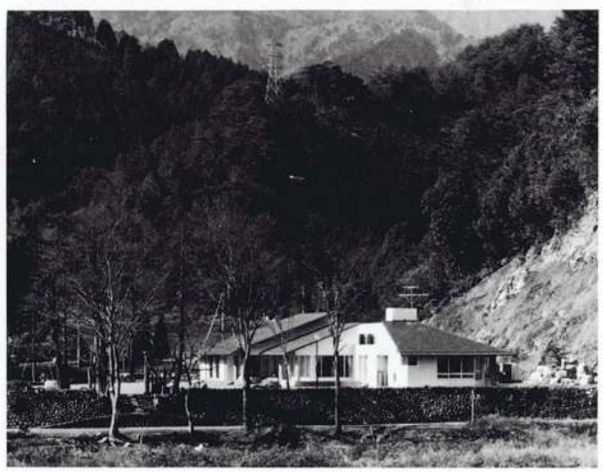


写真　村井　修



名古屋から押し寄せる住宅は、もうこの近く、手の届くところまで迫ってきている。しかし、まだこの中学校付近は数少ない田園風景をとどめている。ここに白い台形の校舎が出現した。海抜0メートル、一望千里の平野のなかに、もし、濃緑を呈しているなら農耕民族の祖を祀る鎮守の森に見まごうであろう。しかし、この白い台形は、白いことにより四季を通してこの風景の中でのランドマークとなり得ていて、いうならば、いまの鎮守さまなのである。この台形状の校舎の発想は、両棟の間の空間を室内に取りこむことにより、生徒相互、教師と生徒のふれあいの場とし、全校生徒と全教員が一堂に会し、種々のイベント、ミーティング、また地域住民との交流の場になろうことを意図している。イタリアのピアツアーを想い起こす愉しい広場は、これからの教育空間である。





美並村基幹集落センター

所在地　岐阜県郡上郡美並村大字高砂
設計　玉田建築設計事務所
施工　カツラ工業
敷地面積　4311.79㎡
建築面積　682.84㎡
延床面積　623.30㎡
規模　地上1階
構造　鉄筋コンクリート造
竣工　1978年12月

何か物かなしい哀愁をこめた民謡でひねもす踊る郡上おどりの隣村の緑深い北濃の山にかかえられるように、この美並村基幹集落センターが勾配屋根のしっとりとした色調で佇んでいる。

この建物は、山裾を切り開いた台地の旧小学校跡地に、この村の約80%を占める農林業者の研修施設として建てられたものである。

緩やかな勾配屋根にあたたかく抱かれるかのように、打放しコンクリートの丸い列柱、アルミ地色の大型サッシュはよく調和をかもしているほかには、際だった特徴をもっていない。しかし、この控え目な表現は、この建物をとりまく自然環境との融合に細心の注意をはらい、最優先したデザインは、使い手に人と自然とが手を結ぶことにより、人と山との深い理解といつくしみを与える象徴的建物である。

書　評

現代ペラペラ住宅への疑問

橋本敏子

正直いって、私は住まいに関する本をあまり読んでいない。理由をあげればいろいろあるが、単純にいってしまえば、興味をおぼえる内容のものにごくわずかしか出会えなかったからである。

ここにとりあげた三冊は、それぞれ視点が異なっていながら、厚みを失った現代のペラペラ住宅のありようへの疑問という共通の問題意識を読みとることが出来る。

＊　　＊　　＊

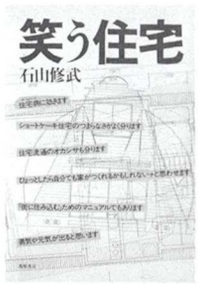
三冊の中では、イキのよさ、問題提起の明確さ、そして本としてのオモシロサの点では「笑う住宅」が最も痛快であった。この本は、前作の「『秋葉原』感覚で住宅を考える」に対して反応してきた様々な住宅病の人々への返答として書かれたものであるが、その中心になっているのは、家にまつわる常識の幻想の打開と、住まいに巣くう病への実践的な反論である。

この本の魅力は、大ていの建築家が得々として語りたがる自分の設計思想の話の持つ一種のアホらしさには目もくれず、著者と同様に自由な精神を持つ住み手との共同作業が、実にイキイキと語られていることである。

ここに登場してくる施主たちは、住まいを作るという作業に入る前に、まず目にみえない大きな一仕事、あるいは戦いをすませてきた強者である点が興味深い。その一仕事とは、家族の内部に存在する最も強固な敵――たいていは、今日のショートケーキ住宅の大好きな母親や女房であるが――との戦いである。この戦いは、まさに今日の大衆消費社会を相手にした戦いでもあるが、それが単にドンキホーテになったり、単純な怒りや、問題指摘に終わらず、工業化時代の小屋づくりとして、視点の転換を具体的な実例で示しているところが共感を呼ぶところであろう。

また、このような住まいづくりは、住宅に限られたものではなく、「地域性や歴史性を産み直す力」にもなりうるのではないかとの展望を示しているところに、この本を単に元気のいい、マイナーな住まいづくりの異端書にとどまらせていないよさがある。

このように読んでみると、この本は書店で「住宅」のコーナーに置かれるよりも、むしろ「文化論」の方に置いてほしい本のように思える。実際、載せられている住宅をみると、住みこなすパワーを持ち続けることが必要条件のように思えるからである。



笑う住宅

石山修武著

筑摩書房刊
1,300円



日本人の「住まい」はどこから来たか

吉田桂二著

鳳山社刊
1,800円



奥座敷は奥にない

中岡義介著

彰国社刊
1,500円

＊　　＊　　＊

「日本人の『住まい』はどこから来たか」の方は、アジア抜きの日本文化論の恥しさを静かな口調で語った味わい深い著作である。日頃、当然のことのように西洋文化に対比して日本文化の独自性を主張することに異和感を感じなくなっていることへの疑問から発して、「ちがい」への着目から「同じ」ことへ視点を転換させてみた時みえてきたものは何か。

著者は、自分の専門分野であり、研究テーマとしている民家を素材に、東アジア諸国での調査を通じて、日本住宅を構成している基本的な要素が、実は東アジアの国々の住宅の中にも〝そっくり〟さんとして存在していることを発見してゆく。

朝鮮（本文での使用に準じる）の古都、慶州周辺の集落でみかけた住宅の屋根や長屋門と奈良にみられる天平時代の社寺の屋根のデザインの近さ。あるいは、日本住宅の独自性を語る上で不可欠の紙障子や襖も、実は朝鮮や中国にもあるという話。

畳や、瓦、壁、卯達といった、日本住宅の特性を語る諸々の要素が、広く東アジアの国々の住宅様式と共有するものがいかに多いかにあらためて驚かされる。

いわれてみれば、日本の文化そのものが、歴史的にも隣接する諸国からの絶えざる輸入によってもたらされてきたのであるから、驚くことの方が、本当はおかしいのである。が、この驚きを感じるほどに、我々は今では「洋」文化との一体化に何の異和感も持たなくなっていることを知らされる。

＊　　＊　　＊

〝住居はカミの住まいである。〟日本人の住居の根源的なイメージをこのようにとらえ、人と住居、住空間のコミュニケーションを様々な切口で示したのが「奥座敷は奥にない」である。ところで住居の発展においてのみならず非機能的なものの重要さが、現代にますます必要だという論旨は、目新しいものではない。どのようなところに、どのようなかたちや意味を非機能的ととらえ、更にそれが「必要だ」論から「どのように可能か」までを知りたいのだが、その種のものは実は少ない。残念ながら、この本においても発見、誘導の重要さの指摘にとどまっている。

一貫して流れている〝住居はカミの住まい〟という発想は、日本人の根源的な住まいイメージをつくものとして興味深いが、現代に生きる我々にとって、カタカナで示されるカミイメージとのかかわりを、もう少し述べてほしかった。空間の持つコミュニケーション機能に強い関心を持つ者としては少し残念である。

新刊寸評

現代すまい考

早川和男編著

「すまいは人間と暮らしにどう影響するか」が本書のテーマである。日本におけるすまい事情の悪さ、特にその狭さは、子供・老人をはじめ社会的に弱い所に悪影響を与えているが、その様子が現場をあずかる人々の口を通して浮きぼりにされてゆく。この本からは、生活の器であるすまいの大切さにいつまでたっても気づかずにいる日本人及び日本の住宅政策に対する苛立ちが叫びとなって聞こえてくる。この叫びには行政だけでなく日本人一人ひとりが耳を傾ける必要がある。ただ本書は、多分に経験的、感覚的であり、取り上げられている社会問題とすまい事情との相関は必ずしも明確ではなく、またその解決方策にまでは踏み込まれていない。それは今後我々日本人一人ひとりが真剣に取り組んでいかねばならない課題であり、そのことに気づかせることこそが本書のねらいであると言えるだろう。

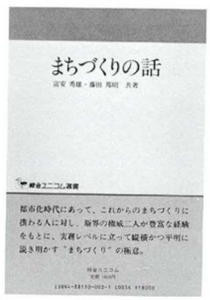
高木雅章／神戸市（都市文化社刊 1,000円）.

書　評

第一人者二人による計画論

まちづくりの話

富安秀雄・藤田邦昭共著



綜合ユニコム刊
1,800円

高田光雄（京都大学建築学助手）

本書は、わが国を代表するニュータウン・プランナーと再開発コンサルタントによって書かれたユニークな都市計画論である。取り扱われている内容は、都市空間計画技術の基本的問題であるが、先端的な話題もちりばめられて示唆に富んだものとなっている。記述は、いわゆる教科書的な体裁を避けて、初学者にも読みやすく工夫されている。

身近な町の問題を扱う

全体の構成は以下の通り。先ず、第１章「都市とは」及び第２章「都市のライフサイクル」で、都市に対する基本的認識が述べられる。続いて、第３章「都市の計画」、第４章「都市環境とニュータウンの計画」、第５章「日本のニュータウン」の３編で、ニュータウンを中心とした都市計画・設計論が具体的に展開される。さらに、第６章「都市の再開発」で市街地の再開発の諸問題が総合的に説明される。第７章「都市の住宅」と第８章「都市の下部構造」は、まちづくりの要素としての住宅、道路、公園などを扱った言わば各論にあたる。第９章「まちづくりと文化」では、都市景観、地域性、近所づきあいの問題などが論じられている。最後に、第10章「これからのまちづくり」で今後の展望が鼎談形式でまとめられている。

本書で強調されていることは、都市が人間の居住によって成立し、住宅を主要な構成要素としていることである。人間に焦点を当てた都市計画、それも身近かな町の問題、住宅や公園、商店街などを中心に都市を論じることが、実はこの本の主題ともなっているのである。従って、都市計画の技術を扱った書物であるにもかかわらず、その内容は極めてソフトであり、また、都市に居住する人間の問題が多く論じられている。例えば、第７章では、都市居住者のライフステージと住宅の関係について、13の世帯型別に興味ある考察が加えられているし、第９章では、近所づきあいの問題が著者の海外居住経験などを通して具体的に語られている。また、第８章における道路の扱いに関しても、都市交通の体系を述べることより、歩行者空間としての道路計画を説明することに重点が置かれている。

経験をふまえた論述の魅力

本書の最大の魅力は、著者らが豊富な経験に基づいてまちづくりを論じていることである。しかも、この本の著者らは、おそらく今日わが国で望みうる最高の実務経験の持ち主であるといってよい。そもそも、建築や都市計画の発展は、純粋理論や大発明によってもたらされるものではない。地道な経験の積み重ねこそ重要なのである。それゆえ、建築計画や都市計画の学問としての成立も、経験の体系化にかかっているといえる。経験に基づく様々な記述は、理解を容易にすると共に説得力を持つ。さらに、著者らが、日常業務における過去の経験を重要視し、次の機会に生かしていく努力を重ねていることを行間から読み取ることができる。経験の積み重ね――これは、この領域における計画方法論の本質をなすといっても過言であるまい。

著者のひとり富安氏は、千里ニュータウンをはじめとするわが国の主要なニュータウンを手掛けたプランナーである。その経験をふまえ、ニュータウンを都市環境モデルとして位置付けた上で、安全性、健康性、利便・効率性、快適性、文化性の５要素からなる都市環境の計画を具体的に述べている。千里ニュータウンにおける現在の環境評価は極めて高い。著者はその主要な理由を、住宅周辺のオープンスペースの豊かさ、高水準の文化・リクレーション施設が集積するタウンセンター整備状況、大阪都心に直結した交通網の３点であると分析する。こうした特性をもつ千里ニュータウンの計画には様々な試行錯誤があった。また、その経験は、それ以降の計画の貴重な資料となっている。

ところで、わが国のニュータウンの多くは、昭和40年代に企画・着工されたものであるが、完成したものは千里ニュータウンだけである。今日、多くのニュータウンでは時代の変化に対応した計画の見直しや修正が求められている。こうした状況をふまえ、著者はこれからのニュータウンのあり方として二つの方向を示している。一つは、住宅単機能都市から多機能都市への転換である。施設誘致により宅地処分を早め、導入した職場により住宅需要を喚起することもできる。もう一つは、付加価値の高い高質住宅都市の形成である。地区計画や建築協定を活用して美しい町並をつくったり、ボンエルフ道路や親水空間を計画し、スポーツ・レクリエーション施設を充実することなどが具体的な戦略である。

もう一人の著者、藤田氏は、多くの再開発事業と商店街の活性化に長年携わってきたこの分野の第一人者である。ここでは、商業活動が都市にとって極めて大きな役割を演じていることを事例を通じて論じた後、住む空間、働く空間に加えて、市民生活を豊かにする商業・レジャー施設等の「第三空間」づくりの重要性を説いている。一方、まちづくりの目標として、広い意味での社会資本の充実という視点の必要性を指摘し、再開発によりその実現を目指す。また、再開発を通じて、都心部への住宅供給を促進する意義と問題点を明らかにし、さらに、公的施設、業務施設、文化施設の組み合わせが、まちづくりと事業成立の両面から求められることを分かり易く論じている。

書評委員（敬称略）
伊藤郁郎（日建設計）
伊従　勉（京都大学教養部助教授）
太田隆信（坂倉建築研究所大阪事務所長）
加藤邦男（京都大学建築学科助教授）
橋本敏子（生活環境文化研究所所長）
増渕昌利（神戸市営繕課）
山形政昭（大阪芸術大学建築学科講師）

新刊寸評

都市に森をつくる

半田真理子著

本来、都市における緑とは、ストリートファニチュアの一つとしての二義的な装置ではなく、人間が生活するのに必要不可欠なものなのである。それが、この本の中で著者が一貫して述べていることなのだろう。それを、理論的というよりは感情的あるいは視覚的に訴えている点がかえってこの本に説得力を持たせており、読む者をすなおに著書に入り込ませる。

近年建築や都市計画の分野でも女性の進出にはめざましいものがあるそうだが、この本を読んでいるとそれも素直にうなずける。ただ、問題は、それをいかに現代の日本の都市で実現していくのかにあり、それこそが著者及び都市計画や建築に関わる人々の腕の見せ所となるのだろう。今後の著者のさらなる活躍を期待せずにはいられない。

野々口雅人／神戸市（朝日新聞社刊 1,300円）

会員グループの頁

5

大日本土木



大日本土木㈱の会員は19名います。「会員グループの頁」をいただき、すぐに会員を集めよう、と声をかけました。会員は、現場、店内などに分散し、なかなか集まることが出来なくて、それではということで設計部門の人に集まってもらいました。

大阪支店の設計部は、堂島でもひときわめだつ「近鉄堂島ビル」にあります。設計の所属する10階は、いつも夜遅くまで光が煌々と輝いています。窓の東側を見渡すと曽根崎新地が一望にみえる、優雅な環境です。

会員の構成は30歳代の後半から40歳代の技術職の社員です。会員の平均年齢は我が社の社員平均年齢をはるかに上廻っています。

高度成長時代は情報不足で協会に入会することで情報収集に大変役立っていましたが、情報過多の現在は、ちょっと影がうすくなったように感じます。

■集まり

大阪支店の設計部では毎週金曜日に自主研修会を行っています。12月12日に「会員グループの頁」をまとめるために時間を当てました。

「ワイワイ、ガヤガヤ」と自由な意見が出ましたので整理をして報告します。

●「建築と社会」のどの記事に興味があるか

1．「作品作風」

2．「法令コーナー」

3．「新建材紹介コーナー」

4．その他「特集」「設備の頁」「構造の頁」

●どんな印象か、感想は

1．「作品作風」

イ）アート紙の上質で印刷され、色づりの出来もよいので見やすい。

ロ）資料として保存する価値がある。

ハ）要領よくレイアウトが出来ている。

ニ）解説をもう少し詳しく欲しい。例えば仕上材はこのようなものを使ったとか。工事費も解りませんかね。

2．「法令コーナー」

イ）毎回まとまりがよく編集され参考になる。

ロ）約200件以上の事例があり、研修材料としても最適。

ハ）どうしようかと困っているとき、たしかにあそこに記事があった、と探してみるときがある。

3．「新建材紹介コーナー」

イ）カタログよりも詳しく解る。

ロ）建材の弱点、使用上の注意をもっと紹介してほしい。

4．その他…「特集」「設備の頁」「構造の頁」

イ）役立つことがある。

ロ）タイムリーなものが少ない。

■保管について

設計部門の日常業務の中で書籍の保管も大切な業務です。そこで我々の保管方法を紹介します。

毎月部内に回覧し、6ヶ月ごとにバラバラにして記事ごとに分類し保管しています。例えば、作品作風、特集、法令コーナー、……等を別々にファイルして収納します。これは利用する側から大変便利だと評価を得ています。

●おわりに

ワイワイ、ガヤガヤと自由な意見が飛びかって、にぎやかな雰囲気でした。日常業務では味わうことの出来ない時を過ごせました。

期待していた以上に話しが盛り上がり、日頃多忙の中、このような団楽を与えていただいたことに感謝致します。

（文責：深田雄三／大日本土木）

ガラス繊維補強セメント

Field-GRC

株式会社　中山製鋼所
本　　社　大阪市大正区船町１－１－66　☎06-551-3331
東京事務所　東京都千代田区大手町２－１－１　☎03-231-1391
九州事務所　宮崎市宮田町11-24(黒木ビル2階)　☎0985-20-9063

1．はじめに

コンクリート構造物は、耐久性が高く、維持管理をあまり必要としない構造物であると言われてきましたが、近年、大気汚染等と相まって、塩害、アルカリ骨材反応等が起こり、コンクリート構造物の劣化が社会的にも大きくクローズアップされつつあります。これらを解決する方法として、①ポリマーの添加　②鉄筋の防錆処理　③各種繊維の添加　などの方法が試みられております。

通常、ＧＲＣは、セメントスラリーをポンプで圧送し、それと同時にガラス繊維のローピングが切断されながらセメントスラリーの噴霧状態の中に混合され、吹き付け、脱水、養生し、製品化されたものであります。従って工場生産が主力であり、現場施工では、ガラス繊維の飛散、及び塗着効率が悪い等の欠点により、困難とされています。

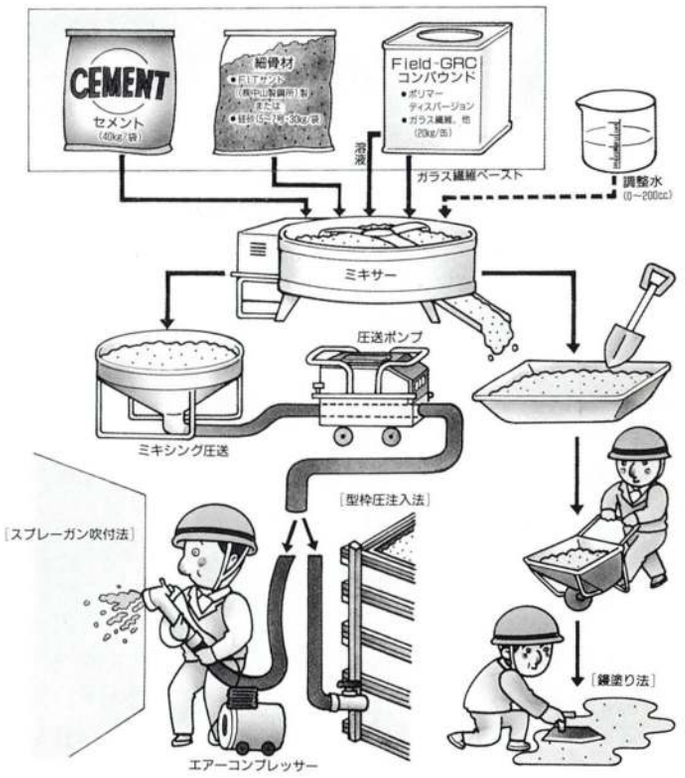
今回、開発されたField-GRCは、耐アルカリ硝子繊維を混入したコンパウンドを使用することにより、硝子繊維を単時間で容易に混合することができ、混合機についても、一般的なモルタルミキサーで行え、いかなる現場においても適応できる現場施工用ＧＲＣです。

2．Field-GRCの特徴

1）広範囲の現場施工が可能です。
2）ガラス繊維の飛散がなく、安全で衛生的です。
3）工場で計量、調合された材料をそのまま使用しますので品質管理が容易です。
4）コンクリートはもとより、木毛板、各種断熱材、防水材、金属面等のほとんどの下地に接着します。
5）施工法は、吹付法、注入法、鏝塗り法のいずれの工法でも可能です。
6）材料の配合が簡単確実で混合機や施工機も特殊なものを必要としません。
7）早強性に優れ、10mm厚みで48時間の自然養生で使用可能となります。
8）曲げ強度170kgf/㎠、圧縮強度350kgf/㎠と高い性能を持っています。
9）耐摩耗性、耐衝撃性、耐ひび割性にすぐれています。
10）低透水性、少吸水性であり、耐海水性、耐アルカリ性、耐酸性、耐薬品性にも優れています。
11）難燃性、断熱性にも優れ、特に難燃１級に合格しています。

3．Field-GRCの調合及び施工手順（１施工ユニット）

1）モルタルミキサーにセメント、40kgとFitサンドＣ－５、30kgを投入し、空練りする。
2）Field-GRCコンパウンド20kgの罐を開け、中のポリマー溶液のみを添加し撹拌する。
3）モルタル状になった所にField-GRCコンパウンド罐に残っている硝子繊維を数回に分けて投入し、撹拌する。
4）混合完了したＦ－ＧＲＣは、鏝塗り、ポンプ圧送による吹付け、及びポンプ圧送注入等のいずれの方法によっても施工できます。



4．Field-GRCの性能

試験項目	規格	試験結果
1．曲げ強度	ＪＩＳ　Ｒ　5201	172kgf/㎠
2．圧縮強度	ＪＩＳ　Ａ　1108	355kgf/㎠
3．長さ変化率	ＪＩＳ　Ａ　1129　コンパレーター法	7.13×10^{-4}
4．耐摩耗試験	ＪＩＳ　Ａ　1451	0.3mm
5．耐衝撃試験	ＪＩＳ　Ａ　1421（なす形1kg1m高さ）	ひびわれ無し
6．付着強さ	建研式（対コンクリート平板）	21.3kgf/㎠
7．吸水量	ＪＩＳ　Ａ　1404　24時間	13.3g
8．透水量	ＪＩＳ　Ａ　1404　3kgf/㎠加圧１時間	2.3g
9．耐アルカリ性試験	ＪＩＳ　Ｋ　5400　30日間浸積	異常なし
10．耐酸性試験	ＪＩＳ　Ｋ　5400　30日間浸積	異常なし
11．塩水噴霧試験	ＪＩＳ　Ｚ　2371　500時間	異常なし
12．温冷繰り返し試験		異常なし
13．難燃性試験	ＪＩＳ　Ａ　1321	１級合格
14．耐凍結融解試験	ＡＳＴＭ　Ｃ　666　Ａ法　200サイクル	質量減少率　−3.4% 動弾性係数低下率　35.5%

5．Field-GRCの応用例

1）駐車場、倉庫、ガソリンスタンド、工場床のオーバーレイ。
2）歩道橋、道路、高速道路高欄のライニング及び欠落部の補修。
3）地下室、地下鉄、トンネル等の防水補強。
4）各種コンクリート及び鋼構造物の塩害、凍害、風化防止、掃流摩耗等に対する仕上げ材。
5）農業用水路、段差溝、農業用サイロ等のオーバーレイ。

建材委員／長橋英彦（日本建築総合試験所）

乾式石張り工法非耐力外壁の耐火性能試験結果

財団法人 日本建築総合試験所
所 在 地…吹田市藤白台5－8－1 〒565
電　　話…(06)872－0391　FAX…(06)872－0784
業務時間…平日：9：00～17：00
　　土曜：9：00～12：00

1．まえがき

耐久性があり美しい天然石による建築は、古くから世界各国で行われてきた。地震多発のわが国では構造材としての利点は見られず施工例もまれであるが、薄物石材を用いた湿式および乾式による石張り工法の開発により、建築物の中、低層域を中心に内外装仕上材として天然石を使用する例が多くなってきた。

建築物の高層化に伴い高層域への需要が高まる現在、同工法の耐震・耐風、耐火性に関して各性能の確認が必要となり、当試験所耐火防火試験室に、非耐力外壁用乾式石張りパネル工法の耐火１時間性能試験の実施依頼があった。当試験室は、依頼者とともに数種類の仕様の小型試験体による予備試験を行ない、その中で最も合理的と思われる工法について建設省告示第2999号に規定する外壁（非耐力壁）１時間耐火性能試験を実施した。試験の結果は良好で、同工法としては初めて外壁の１時間耐火構造として建設省の認定を受けた。以下に試験の概要を示す。

2．花崗岩について

花崗岩は通称みかげ石と呼び、結晶が大きく磨くと光沢が得られ美しいことで知られている。建築材料としては堅硬緻密で吸水性が小さく耐久性・耐摩耗性に富み加工性が良く大材が得られるという利点があるが、重量が大きい、耐火性は小という欠点を持つ。高温加熱時における花崗岩の圧縮強度は、石の産地により差があるが、一般的な傾向を**図－１**に示す。同図には参考としてコンクリートについても併示した。

3．試験体の構成

試験体は、ポルトガル産の花崗岩（以下石材という）の薄板（厚さ3.0㎜）３枚を石引きファスナーにより溝型鋼のパネルフレームに緊結後、石材の屋内面にパーライトモルタル（厚さ30㎜）を打設した物を１枚のパネルとし、同パネル２枚を１試験体に組込みパネルフレームの屋内側に石綿けい酸カルシウム板（厚さ10㎜）を裏打ちしたものである。なお、目地の仕様は石材間、パネル間ともに、目地内部に石綿ロープ（石材間φ10㎜・パネル間φ25㎜）を入れ、屋外面をポリサルファイド系コーキング材で処理したものである。パネルの垂直断面を**図－２**に示す。

4．試験方法（昭和44年建設省告示第2999号による）

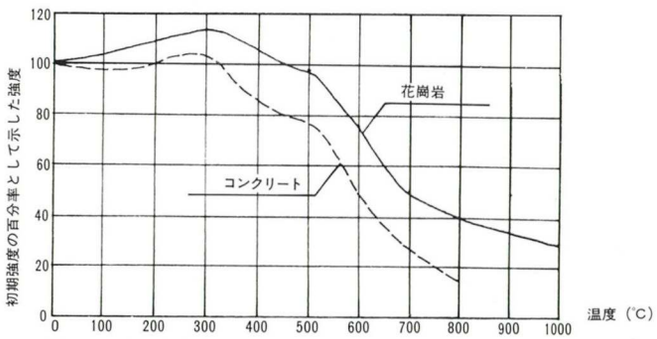
- 加熱炉…有効加熱面積　幅２ｍ×高さ2.7ｍ・熱源…都市ガス。
- 加熱等級…耐火１時間加熱。
- 試験体…屋外側加熱用２体・屋内側加熱用２体（幅2.14ｍ×高さ2.74ｍ）。
- 裏面温度の測定…ＣＡ熱電対の熱接点を10㎝×10㎝、厚さ15㎜のすぎ板で覆い、試験体に密着させて測定。
- 目視観察…加熱中・耐火上有害な変形・破壊・脱落等の有無を確認。
- 衝撃試験…試験体の加熱面を上にして水平に置き、５kgのなす形おもりを１ｍの高さから落下させて裏面への貫通の有無を確認する。

5．試験結果

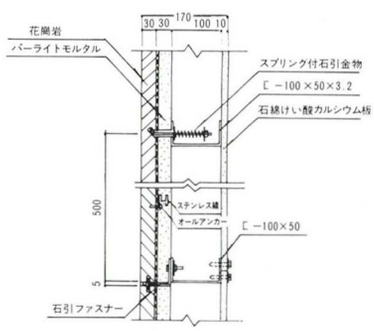
試験の結果、裏面温度は**図－３**に示すように裏面温度限界値260℃を下廻った。加熱後の試験体の状況は、**写真－１**に示すとおり、石材の一部に割れを生じているが脱落にいたる危険性はなかった。

同工法の耐火性能は、石材の熱膨張による変形に大きく左右される部分が多く、今後の課題としては、石引きファスナーおよびアンカーの形状、配置、石材周辺の目地を、石材の変形に充分追従出来る構造とし、加熱中に生じた石材の割れを軽減することで、一層耐火性能の高い工法とすることが可能と思われる。なお衝撃試験では特に異常は認められなかった。　　耐火防火試験室　表　弘

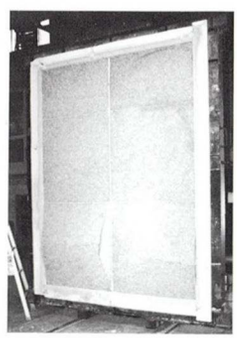
参考文献　新建築学大系47　仕上材料と施工
コンクリートの特性　後藤幸正・屋坂芳夫　監訳



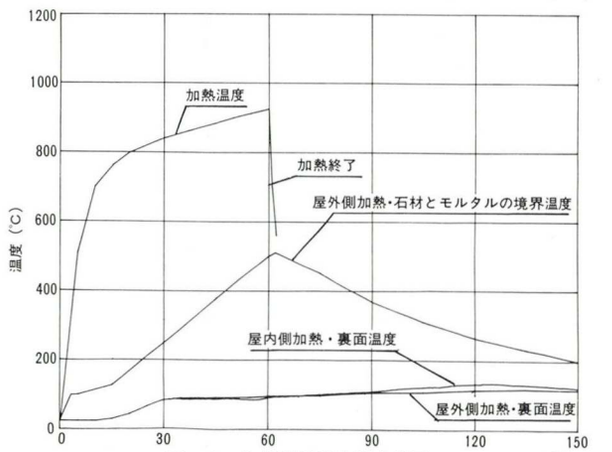
図－１　高温加熱後のコンクリートおよび花崗岩の圧縮強度



図－２　試験体の構成断面図



写真－１　加熱後の試験体の状況



図－３　加熱試験温度測定結果

読者の頁

書評「東京21世紀の構図」

尾島俊雄著・ＮＨＫブックス

「私の東京論」が花盛りである。日本の総人口の8割が都市部で暮らし、2,500万人もの人々が「首都圏」をすみかとしている現在、東京の構想を示していくことは21世紀の日本の全体の姿を考える上でもたいへん重要なことであり、専門家に限らず、様々な分野の人達が東京の魅力について述べ、この巨大都市の将来イメージを描いている。それらの多くは、今後とも首都東京の役割が大きくなることを誇示している。

この本でも「東京の構想」が絵と文章によって示されている。本全体を貫いている考え方は、高度経済成長で太平洋ベルト地帯を作り、列島改造論ではそれを国土の隅々にまで広げようとし、さらに、発展途上国の開発へ手を広げてきた開発の「活力」を、今度は環太平洋への進出と、国内の大都市改造へと向かわせていこうというものであり、政府で策定しつつある「中枢的都市としての東京」のイメージをスケッチ風に示したものである。

筆者は東京についての現状をどのように認識しているのか。文中では「自然資本」「社会資本」と東京の人々の生活の3点から考察を示している。

「自然資本」については、関東地方は従来より豊かな自然風土に恵まれていたのが、戦後次第に失われてきたこと、「自然」を、生態連鎖をそのまま残した形では、大都市と共存させることが不可能であること、の認識から「自然」のもつ変化(エントロピー)と活力(エネルギー)を都市の改造の中で再生しようとしている。

「アングラストラクチャー」(幹線共同溝)は数年前から筆者の示してきた構想で、とくに不足している生活部門のインフラストラクチャー整備のために、公的施設であるエネルギー供給システムを作ることを提案している。地下に建築されるこの巨大構築物が生活のための基盤システムとして優良な社会ストックになるのだと言う。

21世紀には、東京は、国際化に伴い、世界中の人々が交流を行う場になるし、そこに流入した人達が第二、第三世代を迎えて、東京を故郷とする人が増えるし、都心生活も大きく変わっていくであろうと予想している。

現在とくに国民の関心の的になっている(国際居住年)住宅については、高・遠・狭の住宅難を、超高層住宅導入による都心空間供給量の増加によって対応していこうとしている。生活形態についても別荘と都心住宅の併用によるバラ色のビジョンを描いている。

こうして21世紀の東京は「海洋メトロポリス」として夢の未来都市に生まれ変わるのである。と、これが筆者の主張であるが、はたしてこううまくいくものであろうか。

本書の「構想」の第一の特徴は、東京一点集中型の計画になっていることである。地震等の災害が多い東京において、非常の際に大きなダメージを受けるほどに集まってはいけないとしながらも、諸機能が東京を中心に整備され互いに連絡しあうことで、日本列島の中枢として現在以上の集積がなされることと、この機能集中が首都圏規模にまで拡大されていくことを目指している。共同溝による都市ネットワーク作りと都心部の容積率見直しは、そのための条件と読みとれる。国際競争に勝ち残っていく手段として活動の中枢を東京に集める方が有利であるという考え方から各企業は東京へ集積してきているわけだが、東京一点集中型の基盤整備はこの傾向をさらに促し、今以上の混乱を生むことになる。

都市の形成は民間の自由な活動に任せておけばよいとしているのも、この「構想」の大きな特徴になっている。政府は現行法の見直しによる都心の空間保障や空間利用の調整をやる機関にとどめていこうとしている。本書では、自由な建築活動が技術の向上や建設業界に対する活力を生むのだという視点から、都市計画への大幅な企業参加を認めているが、このことは先の東京への過集積とも相まって、土地の投機的活用を軸とした大企業による都市の改造をいちだんと激しく進行させてしまうことが容易に想像される。

この「構想」のもつこのような矛盾が端的に示されるのは土地問題についてである。筆者の見解によれば、土地の価格高騰は、所有者、使用者、行政の複雑な権利関係が生み出しており、それを整理することが必要である、としているが、狂乱地価の本当の原因にそれでせまれるかどうか疑問である。この本では「民間活力」導入を前提として、大企業の営利活動を保証していく形で進められており、地価高騰がこの前提の下では必然的な結果であることからあえてコメントを避けているようにも思われる。結局、本書では投機的に使われることはやむを得ないとし、高騰した土地をいかに有利に利用して利益を生み出していくかの次元での話になっている。

本書では「アングラ構想」をはじめ、大規模プロジェクトによる内需拡大を柱にしている。現実の問題、例えば大都市偏重の土地利用におちいっていることや、緑や住宅の不足が生活の困難を招いていることなど、を解決していくことこそ変革のポイントだが、筆者の「構想」は体制肯定の立場を取り、機能主義理論を徹底的に追求した形で示されている。現在の大企業の投機による乱開発の原因を不問にしたままの「構想」は、もう一度「誰のための都市計画なのか？」の原点に立ち帰ることを読む人に感じさせるものである。

〔本稿は、片方信也(京大助手・工博)、中林浩(平安女大講師)、中山徹(京大院生)、小伊藤直哉(同)、松浦行雄(同)、安藤暢英(同)、栗田和典(京大学生)、馬場俊吉(同)、森田昌宏(同)、向井一郎(同)の共同討論を安藤の責任においてまとめたものである〕

コープフォーラム'87 いま、日本のコープ住宅がおもしろい

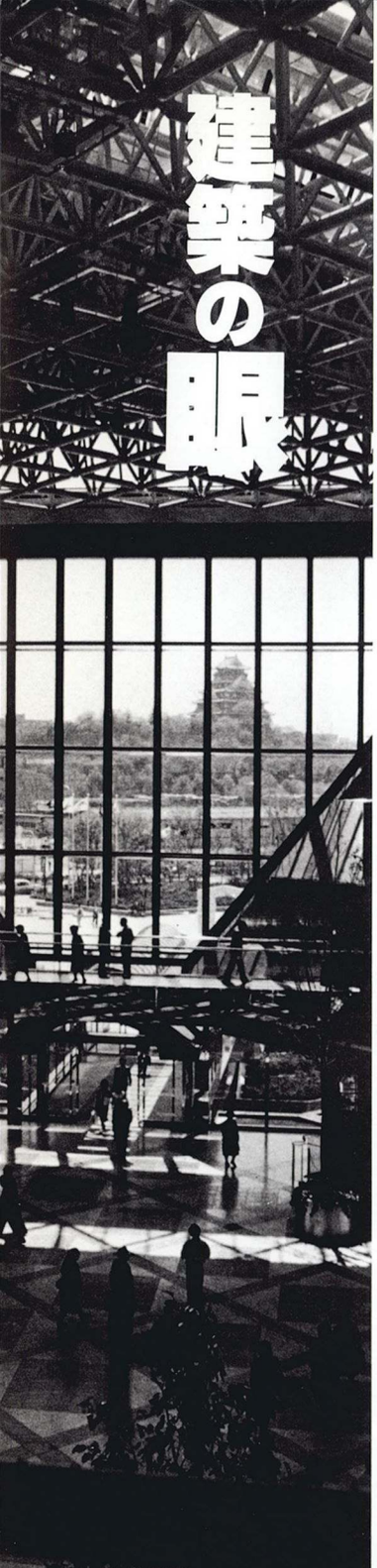
国際居住年の今年、日本のコープ住宅を世界の住宅・まちづくりの動きの中で捉え直そうとする下記フォーラムが、開催される。

- **とき** 1987年3月28日(土) AM10:00～PM5:00
- **ところ** 阪急ファイブオレンジルーム
  大阪市北区角田町 阪急ファイブ8階
- **会費** 無料(但し資料代1,000円)
- **主催** コープ住宅推進協議会
- **後援** 建設省、住宅・都市整備公団、住宅金融公庫、大阪府、大阪府住宅供給公社
  日本建築学会、日本建築協会、
  大阪府建築士会
- **主催者挨拶** 澤田 光英
  (コープ住宅推進協議会会長)
- **趣旨説明** 延藤 安弘(熊本大学助教授)
- **基調講演** 「コープ住宅時代の到来」
  住田 昌二(大阪市立大学教授)
- **報告** 「日本のコープ住宅の動向」
  全国…中林 由行(コープ住宅推進協議会)
  関東…川岸 梅和(日本大学専任講師)
  大川 健(リンテック)
  中部…高岡 正昭(連空間設計)
  関西…広沢真佐子(ＣＯＭ計画研究所)
- **スライド** 「日本のコープ住宅最新事情」
- **レポート** 「コープ住宅：住みこみ体験談」
  古川 智博(熊本大学学生)
- **報告＆討論** 「地域未来像とコープ住宅の役割」

(以下省略)

博物館明治村特別展示
『明治建築をつくった人々 武田五一・人と作品』

1.主 催 博物館明治村
2.期 間 昭和62年4月5日(日)～5月5日(祝)
3.会 場 博物館明治村(愛知県犬山市内山1)
  菊の世酒蔵1階特別展示室
4.概 要
(1)展示要旨 明治30年代後半から昭和初期にかけて、様式主義から近代主義への過渡期にあった我国の建築界において多才な活躍をした建築家・武田五一(1872～1938)をとりあげ、その人と作品を紹介する。
(2)展示資料 図面・図案・工芸品・家具等、武田五一の作品をはじめ、遺品や弟子たちの作品等、約120点



巽　和夫
京都大学教授
古林敏郎
広島県土木建築部都市局営繕課長
谷　淳之介
東畑建築事務所設計部長
美濃吉昭
大成建設建築部設計担当部長
1月号から6月号まで上記の4氏が担当

集合住宅計画をもっとリッチに

最近、都市型集合住宅の設計競技を審査する機会があった。この設計競技は21世紀に向う都市居住のモデルとなる提案を求めており、設計条件や敷地条件もまずまず良好だったので斬新な提案が寄せられることが期待された。期待通り総合的には優れた力作が少くなかったが、住戸計画に限ってはすべての提案を通じて非常に貧困であり失望させられた。

集合住宅の住戸計画はもともと制約性が強くて工夫の余地が少いので、床面積80㎡程度まではどうしても定型的な平面に落着いてしまう。しかし100㎡を越え、120㎡、150㎡、あるいはそれ以上の規模ともなれば、それぞれの規模水準に対応した多様でリッチな住戸計画が実現できてしかるべきである。ところが応募諸案の大型住戸は、申合せたかのように、規模増を室数増で消化してしまい、玄関、台所、浴室、収納空間は中小型住戸のスケールに据置かれたまま、便所は洋風1穴式が1個所のみ、といった有様である。戦後40年間の集合住宅の厳しい設計条件に慣れて、リッチな住空間がイメージできなくなっているのか、それとも、集合住宅はしょせんこの程度のもの、といった安易な割切り方がされているのか。いずれにせよ、これからの都市居住の主流となるべき集合住宅が、この程度のものであってよい筈がない。集合住宅建築家の奮起を強く促したい。　（K．T）

ザ・街なかの美観

川の多い町に育ったせいか、川の有難さや、親しみの情感や、愛着がある。自然を背景とした風景が、木立ちや家並みが川面に写し出され船頭の漕ぐ櫓の音が忘れられない。高度成長の波に乗り、モータリーゼイションの時代と共に高速道路や、川の上の高架道路の出現で街並みの風景はガラリと変って来た。高架道路から街を、建物を見下すというか、建物の5階位が真横で眺められる時代で、何か設計者が意図しなかった工作物の出現で、淋しい思いがする。同じ事は新幹線からの風景も全く同じで屋上のペントハウスや、クーリングタワーといい真横からそれが見られるとは、想像もしてなかった事だろう。何んと屋上の扱いがお粗末なことか、屋上防水の汚ないことか。後から後から高層ビルが出来てくると、今迄気にもとめていなかった屋根部分の美が、屋上部分の材料の選択によって、優劣が決められるのではないかとさえ思える。

日本の瓦屋根の美しさはその土地土地によって、瓦の色合い、雁ぶり瓦の葺き方、鬼瓦の格好等、その地方の風土や地域性を表現し、車窓からの観望も旅情の一味として倍加されるし、道路から見てもこれほど素晴らしい地域文化と密着して発展した古くて新しい材料は見当らないが、何故か伸び悩んでいるのを聞くと残念でならない。　（T．K）

ある街並

西ドイツの北部ニーダーザクセン州の主都ハノーバーは、第二次世界大戦で市域の大部分が完全に破壊されたといわれるが、その後の意欲的で優れた復興計画によって旧市街はよみがえり、新しい機能が付加されながら現在もなお街のリノベーションは続けられている。

市街を歩くとレンガや石の舗装が今も職人の手でコツコツと元通りに手直しされてかつての味わいを伝え、修復された小さな教会の塔が屈曲したいくつかの通りから見えがくれする。近くには雑草の茂ったままの小川がコンクリート等で固められることなく自然な姿で流れている。時折見うけられる新しい建物もスケールと素材感が街並に融け込んでいて、有名なコペンのストロイエ通りやミュンヘンのノイハウザー通りには無いもっと素朴でさりげない味わいがこの街にはある。先人達の長い努力の結晶を今に生かして伝えてゆく手法をこの街並は教えているようである。一つの小さな場所やものを、今私達が行っているよりももっともっと時間をかけて大切に美しく保つことによって、やがて美しい全体を生み出して行ったという1つの典型であろう。　（J．T）

臨場感

数年前のことだが、アムステルダムはコンセルトヘボウでの一夜を、思い出してみる。このコンサートホールは、およそ100年前に出来たもので、オーケストラによる音響効果は、世界的に最良のホールの一つだといわれている。ヨーロッパに19世紀から残っている名ホールに共通した形で、狭いオープンステージを窮屈な客席が囲む、小振りの簡素な空間である。舞台の真横までのびているバルコニー席から舞台後方の席まで観客が埋り、その中に合唱隊が同居している。真からバッハを愛好する人達のつどいのように感じる。

深い精神的な美しさのみなぎるバッハ。地元コンセルトヘボウオーケストラと35人の合唱隊による、長時間曲「ヨハネ受難」が終った。当然、客席から拍手が起り、それに応えてオーケストラ全員が立つ。すると魅了された客席も次々と立ち、またたく間に総立ちの状態となる。賞賛の拍手が続く。オーケストラを中心に前後左右の客が対面し、演奏に酔い感激した顔が、互いに見合う形となる。共感を分ち合う観客とオーケストラが、一体となったドラマが、しばらく続く。プロセニアムのあるホールで、ステージ方向にむく客の背中ばかりを見て来た私にとっては、忘れられない体験であった。　（Y．M）

日本建築協会

創立70周年記念号

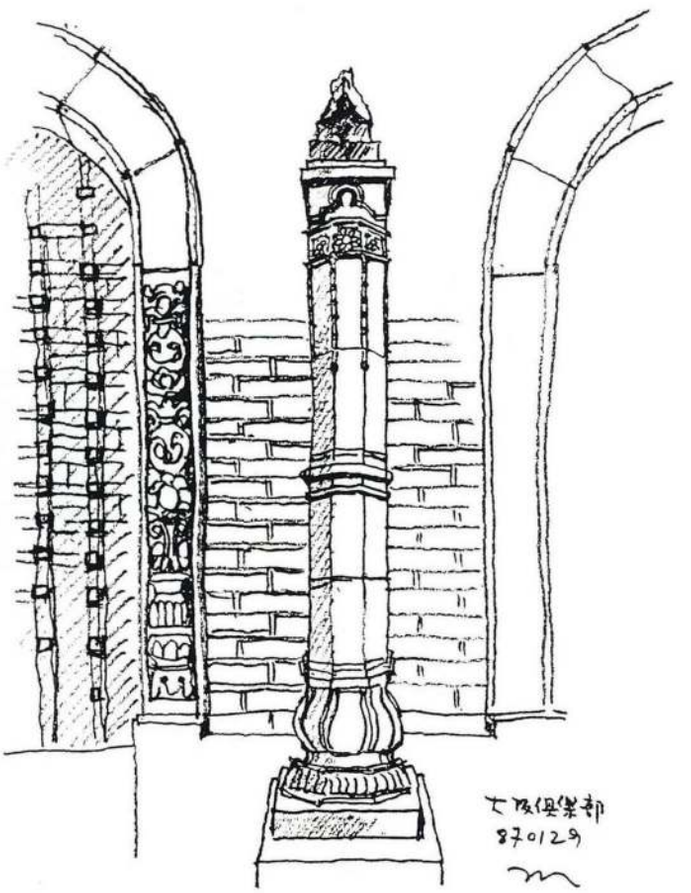
カラーグラビア
大阪モダニズムの精華(大阪の近代建築ディテール)別冊

記念論文
大阪モダニズム変容の70年／向井正也

対談
大正・昭和初期の世相と建築
―建築をめぐる自分史／白石登喜男・東畑謙三

アンケート
最近20年間、そしてこれからの10年
―建築・まち・くらし・社会を語る

年表（1967～1986）
最近20年間の年表―建築界と建築協会の動き





➡この次にカラーグラビアで「大阪モダニズムの精華」(大阪の近代建築ディテール)36頁分(別冊付録)が入ります。

大阪モダニズム変容の70年

向井正也

「大阪にも〈1920年代〉というモダニズムの時代、現代都市の青春はあったであろうか」というコトバから海野弘は、さきごろサンケイ新聞に連載したエッセイ「モダン・シティふたたび」の稿をおこしている。

1980年代半ばの今日、世紀末的な、いわゆるレトロ（回顧または懐古）感覚に満ちた人々の眼に、半世紀を隔てて1920年代～30年代（大正期から昭和初期）の建築、芸術、デザインなどが、えもいえぬ魅力的なものとして映るようである。今回本誌別冊の、美しい数々の大阪の近代建築は、海野のいわゆる大阪モダニズム時代の存在を何より雄弁に物語るものといえよう。

ところで、近頃一般にこうして、レトロ気分で用いられる、モダンだとか、モダニズムなるコトバ自体もまた、半世紀を隔てた'20年代～'30年代の、いわゆるモダン・ボーイなどのモダンに通ずる用語であって、西欧のいわゆる近代運動（モダン・ムーブメント）として歴史的に規定されたモダニズム＝「正統近代主義（オーソドックス・モダーン）」とははっきり区別する必要がある。そもそもこういう懐古的なコトバが濫用されること自体、当の正統派モダニズムの衰退－崩壊という現下のポスト・モダニズム状況を物語るものにほかならない。正統モダニズムが盛んだった頃には、建築やデザインでも、モダンとはホンモノで、似而非（エセ）のマガイモノはモダニスティックとして峻別（しゅん）されたものだった。ポストモダン建築につきものの折衷主義だの、新人類好みのアール・デコなどは、もっぱらモダニスティックとしてはき棄てられていたものである。だから、本稿のタイトルも、現下のポストモダンの風潮のなかで、一般によくコミュニケートするために、海野流に「大阪モダニズム」とよびはしたものの、こうした用語の混乱は、本来学術的には困ったものである。だが考えてみると、大阪というところは、もともとそうした理屈っぽいマジメさなど受けつけないような風土であるし、それだからこそ、かくもリッパな大阪モダニズムという名の折衷主義建築群が生まれたのでもあろう。

1

大阪モダニズムの建築は大阪が近代都市のスタイルをつくり上げる過程で生まれた、あくまでもポスト明治のベルエポックの産物であった。このことは単に両大戦間にはさまれた好況期（相対的安定期）に関するだけではなく、第二次大戦後今日に至るまでの大阪の経済的、文化的地盤沈下から見てもその近代化過程における、後にも先にもただ一度だけの「古きよき時代」であった。それはいうなれば、かつてのフィレンツェにもどこか通ずる、商都大阪のルネッサンスであったといってもよかろう。

すでに大阪は、明治末には日露戦争後の工業発展により、資本主義の発展期にあったが、第一次世界大戦後欧米の列強がアジア市場から手をひいている間に、急激に大きな躍進をとげた。大阪の近代都市としての骨格の基礎づくりが始まるのはこの時である。そしてそのことを何よりも端的に物語るのは、町衆の町大阪を近代的商都へと転じさせた演出者といわれる第７代大阪市長・関一（せきはじめ）の助役就任（大正３年）であった。東京高商（現一橋大学）教授として、すでに当時社会政策の権威として令名の高かった関が、前市長池上四郎の期待にこたえて行った思い切った革新的な市政については詳述の余地はないが、建設関係だけを見ても、まず御堂筋と地下鉄（梅田―心斎橋）の建設、大阪港の拡張、市営住宅・市民病院・乳児院等の開設、全国初の市立大学（大阪商大）の創設、美術館着工、大阪城天守閣の再建など

であるが、関が市長就任２年目に当たる大正14（1925）年、大阪市は第二次市域拡張の結果、東成、西成の二郡を編入し、面積（181平方キロ）、人口（210万）、工業生産額のいずれの点でも東京を抜いて全国一の大都市となった。今から見れば全くウソのような輝かしい「大大阪」の誕生である。

わが日本建築協会がはじめは関西建築協会として発足したのは、これより先、大正６（1917）年３月のことである。会の名称は２年後に日本建築協会と改められ、会誌名は３年後に「日本建築協会雑誌」から今日の「建築と社会」にかわったが、初代会長片岡安（1876－1946）は、その後死に至るまで29年間会長の職にあり、名実ともに関西建築界の大御所的存在として、京都大学教授の武田五一と双璧であった。われわれはここで、近代大阪の街づくりをめぐるこの両巨頭と関市長との三つ巴の関係に注目する必要がある。特に都市計画関係の専門的な面で、関は片岡に負うところがかなり大きかったものと思われる。パリのブールバールを手本にしたという御堂筋、そしてその下に都市高速鉄道を埋め込む案だとか、幹線道路・地下鉄ネット構想など、すべて関の独創とされているが、これには片岡の助言によるところも多かったものと見てよかろう。片岡は東大時代に都市計画を専攻しているが、大正８年議会を通った二つの法案、都市計画法および市街地建築物法は、もともと彼の提案によるものだった。これには後藤新平などの力によるところも大きかったもののようで、そうした関係からでもあろうか、本会創立の際、後藤は関とともに本会の名誉賛助員になっている。なお片岡が、「都市計画」で学位を取ったのは、本会創立後２年、大正９（1920）年のことだが、この年、京都大学に建築学科が新設されており、その創設委員の一人は武田五一であった。そこで片岡は早速講師として、都市計画法および建築行政の講義を担当させられている。

「関西には二人の御大がいる、建築学会を関西でやるには二人の内諾を得ておかぬと円滑な運営は期し難い」と時の建築学会会長横河民輔にいわせた片岡と武田であったほど両者の威光は関西一円の建築界では抜群であった。両者はそれぞれ実作の面で大正以前から活躍していたが、モダン都市大阪の演出の上で、当時しばしば行われた競技設計（コンペ）の審査員として顔を合わせることがよくあったようだ。そのもっとも目ぼしい例としては大阪市庁舎（大.10）や大阪府庁舎（大.15，大.11コンペ）だが、建築におとらず大阪モダニズムの環境デザインに重大な役割を果たしたモダン「八百八橋」のコンペにも同様、ともに審査に立ち会っている。その主たる一例としては淀屋橋・大江橋（昭.10，大.13コンペ）だが、御両所はこうした場合、単なる審査員だけに止まらず、時としてしばしば実施設計の際には御自身で担当されることもあった。たとえば大阪市庁舎の場合には片岡が、淀屋橋の場合には武田が、それぞれ手を加えている。なおついでながら、ここで武田が大阪の八百八橋の近代化につくした貢献は特筆すべきであろう。八百八橋の近代化は、すでに明治末ごろから試みられており、心斎橋（意匠野口孫市、日高胖）など代表例であるが、やはり何といってもその目ぼしいものの大半はベルエポックの所産であり、武田五一は京大の教え子で当時大阪市土木部の技師だった、元良勲（後の大阪工大教授）を片腕に、かなり深くその意匠設計にかかわった事実はあまり知られていないが、そうしたモダンな橋たちも今日のレトロの季節の中で、やはりモダン建築と同様ただいまその見直しの作業がはじめられている。

2

明治の頃の町衆の街大阪は、黒々とした町家の甍の波のひろがりの中に、ポツンポツンと洋風建築が点在するといった前近代的な景観を呈していた。このことは、当時の大阪に建築家などというものは、あるかなきかの存在であったことを端的に物語る。ここでの洋風建築とは、石やレンガの公共的な官衙か巨大資本の建物にほとんど限られており、その設計者の多くは東京にいたものと考えられる。ところが、その東京ですら当時の建築家の数は知れたもので、明治12（1879）年工部大学校・造家学科の最初の卒業生の数というのがわずかに４人、その後明治35（1902）年にいたるまで、毎年の卒業者数は最大で７人（平均3.2人）で、この20年ほどの間にトータルしてわずか77人にすぎない。ではそうした卒業者

たちの行方は？　これについては西山夘三博士の記述によろう。「多くの卒業生は、大蔵省、宮内省、海軍省、大学などに仕官し、また後に三井、三菱等財閥の使用人になり、少数はそれらにつながる請負会社の番頭となった。建築家は政府の建物・裁判所・学校・府県庁・兵営など官公庁から銀行・取引所・劇場・博物館および貴族財閥の邸宅といった19世紀ヨーロッパの先進ブルジョア国の主題建築とほとんど同じテーマにとりくみ、ヨーロッパと同じ折衷主義様式が支配した」(「私の見た建築運動の30年」〈新建築〉'56－4月)

武田や片岡などはそうした明治期の建築家としては、むしろ異例の存在だったといえるが、大正期のモダン大阪のルネサンス期には、当然のこととて、多くのしかもすぐれた建築家が大阪をめざすことになる。私はこれを「ベルエポックの名匠たち」とよぶが、ここで問題は、彼らが、すべて前記明治期の建築家たちとは違って、より自由な立場で商都大阪に定着し、設計によって飯を喰おうと覚悟をきめた新しいタイプのプロの建築家、いわゆるオフィス・アーキテクトのはしりであったということである。

「もうかりまっか」とか「それでなんぼになる」などがログセの勘定高いなにわの商人を相手に仕事をするからには、一般に彼らの建築観が東京の建築家のそれとは本質的に異なるものになったのは当然のなりゆきといえるが、そうした対比は今日においてもなお何らかの形でのこっているものと思われる。村野藤吾の「プレゼンティズム」だとか、浦辺鎭太郎の「三笑主義」など、このことを端的に物語るものであろう。村野は、建築の創造においては「念々刹那」が真でもあれば目的でもあると考えるものだし、浦辺のイズムは、設計者、施工者、施主の三者が「お互いの利益を認め合っていきたい。他人を泣かせて自分だけが栄えることは、ないではないかという合理的採算点を基盤に据えたもの」(「建築と社会」'67－3月)だという。いずれにしても、これは商都大阪の精神風土の中でもみぬかれたオフィス・アーキテクトに特有の思考法といえるもので、およそいかなる建築運動の理念などとは折り合いのつくシロモノではない。

そうしたわけからでもあろうか、ここでは東京と違って、近代の建築運動などほとんど見られないのだが、ただ一つの例外は、昭和2(1927)年の「日本インターナショナル建築会」で、説明は省くが、これは日本の建築運動にしては珍しく本場西欧のモダニズムとほとんど時間的にズレのない、いわばドイツ・バウハウスの日本版といったものだった。あのタウトの来日(1933)も、亡命が目的とはいえ、もともとこの会のよびかけに応ずるものであったが、そのタウトが来阪した時の講演会で、村野藤吾は「日本に於ける折衷主義建築の功禍」なる講演を行っている。そこで彼は、日本の折衷主義建築が西欧のいかなる国の建築にもひけをとらぬものだと胸を張り、それに対するわが国のモダニズム側からの批難は的はずれだとのべたが、場所が場所だけに、これは前述の意味で「大阪モダニズム」の真骨頂を示したものとしてまことに興味ぶかい。その後、村野は終生この折衷主義的態度を崩さなかったが、その故に戦後になって、東京の教条的なモダニストたちと対決することになる。昭和32(1957)年の東京読売会館評をめぐる「新建築」編集者解雇の事件だが、その後の近代主義の解体化に伴う彼の作風への評価の逆転は周知の通りである。

3

膨脹発展する大正期の近代都市大阪にとって、建築技術者の養成は焦眉の急であったものと思われる。大正初期に活躍した前記なにわの名匠たちは、ことごとく「東」から供給されたものであって、プレ大正の関西における建築家の養成機関としては武田五一が東大からの左遷で着任したという京都高等工芸学校(明·35創設)ただ一つであった。そこで前述のように、武田が創設委員となって、大正9(1920)年、京都大学に建築学科が新設されるのだが、翌年には神戸に神戸高等工業学校建築科(神戸大の前身)が設置されている。大正11年に片岡安が京都大学の講師にまねかれたことは前述したが、この時、神戸高工教授だった東大建築出身の古宇田実(明·35卒業)もまた講師として京大で建築史を担当させられてい

るが、大阪モダニズムの黎明期からはじまったこうした業界と学界との連携の実例は枚挙にいとまがない。京大関係だけをとりあげても関西の錚々たる人物が建築教育の一翼に連なっている。安井武雄、東畑謙三、浦辺鎭太郎、山根正次郎等々、竹腰健造にも京大から誘いがあったのは事実だが、住友の側の反対で沙汰やみになったという。竹腰といえば、彼と東大が一年後輩で親交があり、竹中工務店から京大にひきぬかれた藤井厚二がいる。そのきっかけは恐らく大正5（1961）年竣工の大阪朝日新聞社社屋の工事での、設計者武田五一との出会いによるものと思われるが、加うるに東大卒の上に同郷(福山)の好誼によるものだったようでもある。

なお本会が創設以来、会誌「建築と社会」の発行を、戦時下のわずかな期間を除いて、今日まで不断に継続してきたことは、関東には、商業誌や学会誌は別として、これに当たるようなユニークな雑誌が皆無であったことから見ても、まさに西の文化的首都圏にふさわしい大阪モダニズムの大きな功績だったと思われる。建築ジャーナリズムについては、大阪では「新建築」が大正14(1925)年いち早く創刊されたことも、その後の同誌の今日までの発展ぶりからして見過ごせないが、今一つ、京都大学建築学教室が、一学科として、月刊誌「建築学研究」を編集・発行していた事実もまた至ってユニークな文化的な試みだったといえる。創刊は日本インターナショナル建築会の結成と同年の昭和2(1927)年、当時としては「建築雑誌」と並ぶ学術雑誌であった。同誌が若い建築の研究者たちの知的トレーニングや研究発表の場として、その後戦中の一時休刊から戦後の一時期まで、果たした役割の大きさについてはいまさらいうまでもない。ところでこの雑誌がその後経営困難となり、発行を日本建築協会に委託することになった事実はあまり知られていない。これは昭和8(1933)年、藤井厚二のあっせんによるもので、この年7月刊行の第69号から昭和16年5月の第100号までであったが、この間の編集は京大と協会の双方から委員を出し合って行ったとのことで、こんなところにも大阪モダニズムにおける関西の業界と学界との間の見事な連携プレーが見られるのである。そして、こうした連携が終わる頃は、時期的に見ても、第二次世界大戦は、ドイツの対ソ宣戦布告など、戦局のますますふかまり行くなかで、目ぼしい建築作品はほとんど見られなくなり、そのうち空襲の激化にともない建設活動は全面ストップという事態において、戦前の大阪モダニズムは終焉を迎えるのである。

4

敗戦の翌年、日本建築協会初代会長片岡安は他界し、竹腰健造がこれに代わる。思えば片岡安は、大阪のベルエポックの建築の象徴的存在であった。会長の交替のあと、焼野ヶ原となった大阪に展開する戦後のモダニズム建築には、もはや昔日の栄光の名残は見られなかった。戦前の大阪モダニズムは、さすがは一つのルネサンス期だけあって、この地に定着した名匠の名に価する建築家たちの手によって一地域に集中的に現出したわが国の代表的なモダニズム作品が実に十指に及ぶという事実は、日本の近代建築史上稀有のことといわねばならない。その名匠たちの主流は、武田・片岡とは一世代あとの、おおよそ1880年代半ば頃から1890年代はじめ頃までに生まれた人たちに集中している。その主な顔ぶれは次のようである。渡辺節('84)、安井武雄('84)、長谷部鋭吉('86)、竹腰健造('88)、藤井厚二('88)、村野藤吾('91)等（カッコ内は生年）。なおこれには、多少例外的ではあるが、W．メレル・ヴォーリズ('80)の名を加えるべきであろう。彼らに共通した特徴としてはまず、その世代が、この後につづく「分離派建築会」や「日本インターナショナル建築会」の世代とは一線を画していることと、およびそのことにもからむ特徴として、西欧のモダニズムとは一応無縁であったということで、いちがいにいえないにしても彼らの建築の作風は、どちらかというと、西欧からではなくアメリカ合衆国からの影響によるところが大きかったといえる。

早い話、渡辺節や安井武雄は「分離派建築会」結成の年の大正9(1920)年、研修の目的でアメリカに渡っているし、村野藤吾も翌年、渡辺のさしがねで同じ目的で渡米している。ヴォーリズに至ってはい

うまでもないことだが、一般にこの頃は日米の間に建築の設計施工に関して交流が多かったことも事実である。そして当時のアメリカが未だに西欧モダニズムの影響圏外において折衷主義の支配下にあったことは、大正11(1922)年の有名なシカゴ・トリビューンのコンペで、西欧モダニズムの巨匠たちの作品をおさえて、レイモンド・フッドのゴシック・スカイスクレーパーの案が一席に入っていることからでも明らかであろう。

このようにして彼らの作風は、時としてそこに西欧モダニズムの影が見られぬでもないが、その共通の基調としては、さまざまなスタイルを自在に操るアメリカ式の折衷主義、すなわち何らかの様式選択主義だったといえる。一方彼らが、その創作活動の場を「東」ではなく、あえて「西」に求めたのは、ごく一般的にいって、彼らが、政治がらみで理念の先行する、長谷川堯のいわゆる東大系の神殿的思惟に何よりも反パツする自由人たちであったからではないかと思う。

そもそも彼らの先輩である武田五一が京都へ左遷されたというのも、自由奔放にふるまってボス教授辰野金吾の不興をかったためだというが、東大建築科のオキテにそむいて型破りの卒業設計(住宅)をやって、佐野利器(としかた)の怒りを買った安井武雄や、遊興三昧で卒業がおくれたりして当局の信用を喪ったという渡辺節など、すべて非東大的自由人間の典型であろう。ちなみに武田五一に代わって東大にまねかれ、後に辰野に代わる大ボス教授となった佐野利器とは「形のよし悪しとか色彩の事などは婦女子のする事で男子の口にすべき事ではない」と小さい時から思い込んできて「これからは耐震構造で国家社会に尽くそうと決心した」などという人物なのであった。ところが一方、武田五一とは、まさに「色彩や形に長けた男として助教授のポストを得ていた」(長谷川堯)のであって、ここに日本近代建築史における東と西の思考の対立が見事に浮き彫りされている。東は東、西は西なのであって、あの太平洋戦争のど最中においても、西側の自由建築家たちの、特に名匠クラスは、平たくいって戦争にそれほど協力的ではなかった。安井武雄は軍関係の施設の設計にはきわめて消極的だったとのことだが、村野藤吾なども、仕事もないままに自宅にこもって「資本論」に読みふけっていたなどといわれる。

このようにして戦後の民主化の一時期においてならともかく、あの朝鮮戦争の「特需」による好況を背景とした50年代のA・フォーラム誌のいわゆる「日本のルネサンス」期においては、村野をはじめとする西軍＝大阪モダニズムは、戦後アメリカを経由して輸入された西欧の正統モダニズムによる、丹下健三を主将とする東軍の敵ではなかった。それは西軍がよって立つ大阪の経済的基盤が、特に朝鮮戦争終結にともない全国の90%ものシェアをもつ糸ヘン相場の暴落などによってもろくも崩れ去ったことにもよるが、一面何といってもやはり経済や文化の過度な東京への集中によるものであったことはいまさらいうまでもなかろう。

5

1960年代に入り、経済の高度成長期に移ると、この東京集中化にはますます拍車がかけられるようになる。これについて司馬遼太郎は「戦後財政は中央集権型になり、全国の国税という形で大きな金が東京に吸い上げられる。高度成長で東京に吸い上げられる金がいよいよ大きくなって、金のある場所に企業が寄っていくというのが当たり前で、大阪の象徴的な名前の会社（例えば大阪商船）が東京へ行く。どんどん行く」。こうして大阪は「陥没」したのだとのべている。(週刊朝日'82－12－1)

昨今、世界の金融の中心だの現代文化の震源地などといわれる国際都市東京のすさまじいばかりの活性化現象が見られるようになった。そのことは何よりも「建築」の集積としての都市空間の演出の上に視覚化されるとともに、いまや東京は情報的にも世界の建築の中心的な拠点になってきている。今日すでに世界的にひろまった新しい建築のよび名としてのポスト・モダニズムなども、その有力な発信源は東京であった。60年代のはじめ東京で世界デザイン会議が開催され、私も出席したが、この時東京の一部の若い建築家のグループから提起された新しい建築のコンセプトが、後に世界的にひろまったあの頭

でっかちで実のないままで破産した「メタボリズム」だったが、一般的に戦後の「東京の建築家」に共通の特徴は、その設計における理論や方法論の先行性だと思われる。建築家たちはそれぞれ固有の世界観や方法論をアタマでひねり出し、それに従って建築を設計し、作品が完成すれば、それをジャーナリズムに発表する際何らかの「論」を効能書きのように添付する。このことほどわが国今日の建築における「東」と「西」の対立をきわ立たせるものがあろうか。「プレゼンティスト」の村野や「三笑主義」の浦辺をはじめとして関西建築界のとるところではない。だが、そうしたおとなしい音なしのかまえが、今後国際都市化が予想される大阪にとって果たしていいかどうか疑問にも思われるのだが。

ところで60年代も半ば頃ともなれば、部分的にしろ、大阪モダニズムにも復調のけはいが濃くなってくる。とりわけこの期で見のがせないと思われるものは、秀作御堂ビルをはじめとする、岩本博行ひきいる竹中工務店設計部の一連の作品であろう。私はかつて、御堂ビルの「格調と気品」をたたえる文をものしたことがある。もはや70年代も半ばに近く、当時の私としては、その文の末尾にも書いたように「この建築文化の不毛時代に、独りこうした古典主義的な様式の灯を関西で高くかかげた秀作のもつアノニマスな規範性を、新しい角度から見直す」必要があると思ったのである。当時はすでに大阪は、地盤沈下のカサ上げをねらったバンパクの後に来た第一次オイルショック後の沈滞した空気につつまれていたが、東京の第一線作家たちはマニエリスム・バロックの線で、もっぱら「格調を下げる」方向にのみ専念していた。そしてその行きつく先はほかならぬ今日のポスト・モダニズムであった。

この頃になると関西でも、60年代末の学園紛争の余波ともいえる、「反文化（カウンター・カルチャー）」の一環に連なる建築の「新しい波」が芽生えはじめており、神戸大学の私の研究室でも、先年、ポストモダン作品としてははじめての学会賞を受けた毛綱毅曠が、助手のかたわら「反住器」等の作品発表で、すでに一家の風をなしていた。その彼に私が一種の「肩たたき」をやったのもまたこの頃である。そこで毛綱は東京へ出て事務所を構える（'76）ことになるのだが、結果的にはよかったと私は思っている。毛綱はやはり「西」ではものにならぬ建築家だったのである。彼が「釧路市立博物館」等で建築学会作品賞を受けたのは '85年のことだが、関西での「新しい波」としては今一人安藤忠雄が「住吉の長屋」で'80年に同じく学会賞を受賞している。すでにこれより先「日本の新しい波」展が米国十都市を巡回しているが（'78）、この年安藤はハンガリーにまねかれ、建築個展および講演を行っており、これが彼の国際的な活動のはじまりとなった。彼はいまや21世紀をめざす、村野なきあとの大阪モダニズムのスターとして、大きな期待がかけられているものと見られる。その安藤が先日のテレビで、文化の東京集中の問題について発言している。「都市の文化は、都市が強いときにおこるもので、大阪文化に力があったとき栄えました。その力の余剰の部分が文化だと思います。いまの大阪には力の余剰がないのでどうも少し淋しい気がします」（「国際文化時代・都市はどう変わるか」NHK，870131）

*

たしかに大阪の街は華やかな東京にくらべて淋しい。ということは、街を歩いていてもあまり楽しくないのが実感である。これはやはり街の活性化の問題で、建築以前の問題かもしれないが、御堂筋など、モノそのものとしては、シティ感覚から見て、情感の深さや格調の高さなどやはり抜群で、とうてい東京の比ではないと思ったりもする。ともあれ今回の「四全総」の中間報告に見られるように東京重視の方向において、あいもかわらず情報、文化、経済の東京集中計画がますます進行する中で、今年は大阪で21世紀の国際都市をめざして二つの巨大プロジェクトがスタートした大きな節目の年である。国際空港が出来ることで田舎町が堂々たる国際都市になった例はすでに世界に数多いとのことだが、大阪をそうした活性化した魅力的な国際都市にするために地元の建築家として果たしてこれからの建築や都市をどのように考えるべきなのか、なかなかむずかしい課題をふくむようである。私のさし当たっての個人的な見解としてはやはり東は東、西は西の線で、エイズではないが、風化した「東」のポスト・モダニズムに対して免疫不全にならぬよう心掛けねばならないと思うのである。（むかい まさや　神戸大学名誉教授）

対談

大正・昭和初期の世相と建築

―建築をめぐる自分史―



白石登喜男氏
（満90歳）



東畑謙三氏
（満84歳）

司会　足立　孝氏

と　き　昭和62年１月28日
ところ　日本建築協会会議室
編　集　松井昭光

足立（司会）　建築協会が創立されましたのが大正６年、大正が終わりますのが15年。ですから、まず大正時代のことで先生方の身辺のご記憶をご披露いただけたらと思います。それで初めに、片岡（安）さんの事務所ができた初期の状況ですね、それから片岡先生で何か印象に残ったことがおありでしたら、白石さんからお話をいただきたいんですが。

片岡安先生のこと

白石　片岡先生はご承知の通り非常に謹厳な人でね、設計のことに対しては非常にやかましいんですが、その反面、温情的で、また社交的で、まあ将来代議士にもならられたりなんかして……。大阪の今橋にある小さい、木造の２階建ての事務所でした。

自分のことになるんですが、初め旧制今中におったんですが、父親が亡くなりましてね、これから中学卒業して大学へ行ってたりしたら、母親がちょっと病身やし、困ったなあと思うとるときに、ある会社の社長が、東京の工手学校へ行くか、大阪の関西商工かと言ってくれた。そしてアルバイトしていけるからというので関西商工へ入ったわけです。関西商工で、絵が好きでしたから建築へ。

建築を２年で卒業して後、どういうように将来進もうかと思った。役所へ勤めるには学歴が低い、これはだめだと。あの時代の業者というのは、建築請負業といってね、イメージがちょっとピンとこないんですわ（笑）。それで、どこかの設計事務所へ入って勉強しようと思った。

その当時、設計事務所というと、大阪ではいろいろございましたけれども、辰野片岡建築事務所が一番……辰野さんはまだ生きておられましたからね、で辰野片岡建築事務所へ入りたいと思ったが、なかなか入れないんですわ。

伏見に片岡さんの家があったんですが、弁当持ちで表へ居座りしたんですわ、三日間。そうしたら三日目の晩の８時ごろに、片岡さんらしいような人が帰ってきたんです。それで奥さんが言うたんです、青年が表へ三日も頑張っとる、いっぺん会うてやんなさい、と。で、入れ、というので、入った。

応接室で直立して待っとったんですわ。そうしたら入ってきはって、「君か、三日も座っとったのは」「はい」「まあ、座れ」と言うて座った。「何用や」と。「お宅の事務所へ入所希望で、三日間待っとったんです」と。履歴書出したら「そんな履歴書なんて、いらん、いらん」と言って、見もしないんですわ。で「建築というものはね、なかなか君の思うてるような、そんな生易しいものじゃないよ」と頭から。「いや、私は勤めたら１ヵ所10年主義でやります」と言ったら、「ああ、10年おったらバカでもなんとかなるわ。じゃ、あしたの朝、事務所へ来い」。それで行ったんですが、「このもの」…… 品物扱いです。「このものを今日から入れるから、なんか仕事あてがえ」ということで（笑）。あの時分は白いカバー、皆お医者さんみたいなの着てました。何やらされるのかと思ったらね、青写真です。朝早くから暗室で青写真の感光の薬を調合して洋紙に塗り付け、陰干しをして乾燥したのを缶に入れておいて、上司がトレシングペイパーに墨で書いた物と感光紙を日光に直射し、一枚一枚水洗いをしました。冬は手にあかぎれをこしらえ、曇りの日は思うようにならず、焼き付けの色が悪いときは上司から小言を受け、涙ぐましい努力をしました。上司より早く出勤してトレースをする。硯石をきれいに洗い墨をすり、寒いときにはその墨がねばり上司から小言も受けた。その間６ヵ月を経て後輩ができれ

ば、その仕事を譲る。つぎは上司の図板の掃除から片付けをして、ようやく現寸図を鉛筆でトレースさせてもらう……。その現寸図も使用材料により色別けして業者に渡し、業者はまた現寸図に合わせて型板を造り、それを現寸図に合致するかを確認してはじめて現物に施工する役をやり、それを過ぎてはじめて鉛筆を持たしてもらう……。画用紙に煙突か便所くらいの設計をやらせてもらったときの嬉しさはいまでも忘れられません。追々と事務所なり、工場の一部なりの設計にたずさわっても、いまと違い朝8時から夕方7時までで、その後は居残り、手当てもなく、早く勉強して一人前になりたいばっかりに、明細を拾い、仕様書を作成しておりました。いまから考えればスパルタ式の教育を受けたものですね。

大阪市中央公会堂



白石　それからしばらくして中央公会堂をやりかけましてね。公会堂は大正2年からやってるんだ。わたしは大正4年に卒業したんですからね、竣工間際に、忙しいから手伝いに行けというんだ。それで竣工間際に手伝いに行った。あれは岡田信一郎さんの設計ですが、それを片岡さんが少し手を入れて、部分的に変わっとりますけどね。

現場主任は片岡事務所の谷民蔵氏、そのときに、白石、煙突設計せいと言われました。いまでも煙突一本すーと建ってます。その煙突、どないして設計したらいいかわかりまへんやろ(笑)。耐震構造の本といったって、内藤(多仲)さんの本、まだ出てなかった。もうとにかく地盤だけ大きいして、地震に耐えるようにしたらいいと思って、地盤を大きいして煙突建てた。それがいまだに残っとるんですわ。

あの公会堂は、大正2年に起工式して、大正7年にできあがった。岩本栄之助氏が当時100万円寄附されて竣工を見ないで亡くなられたんですが、建築費が112万円。いまのそこらの土地の1坪の値ぐらいですな(笑)。全部で120万円ですよ。間口25間、奥行き35間、建坪が650坪。3階建てで、延べが2,391坪ですね。建築費は、延べ坪で割ると1坪470円や。あれ、いまやったら、まあ坪100万円ぐらいかな。

東畑　100万円ではできんですよ、大きいから。

白石　あのときに初めて鉄骨鉄筋でできましてね。それでホールを広く取るようになったんですよ。

それから、大阪市の建築嘱託ということで、わたしは片岡事務所から出向したんですわ。

その頃わたしが学校で習ったのは、工学士・波江悌夫（片岡事務所勤務）に和風建築、工学士・置塩章（陸軍省技師）に意匠と建築歴史、工学士・山田静（山田守、京都タワーホテル設計の兄）に建築設備、工学士・牛村喜勇（堂島赤レンガの控訴院を設計）に洋風建築、工学士・岩田成實（大阪市土木部長）に構造計算、それから製図は住友の営繕課におった佐藤秀三さんという人。心斎橋の橋を設計して、いまも残ってますね。

東畑　当時の人は、そうそうたる人ですな。

白石　ええ。その人たちが皆先生。心斎橋の橋のところへ行って、皆繰形を覚えろといって、そんな調子。そういう先生に習いました。

旧大阪市庁舎建設



白石　それから大阪市庁舎の工事に行けと。その時分には大阪市庁舎は、江之子島の川口のほうで、府庁も川口だったわけで正面が西を向き、市役所はその横手にあった。

それから後に今度は狭くなったので、江之子島から中之島の…堂島の、高商の跡へ市役所を2階建てで建てた。それは2回目です。2回目だけれど、それもある時期来たらもう狭くなって、現在のところで、中之島公園だったわけですが工事をやりかけた。そのときの市長が池上四郎さんでした。それから助役は関一。あれは実施設計、懸賞募集したんですわ。小川陽吉という人が3階建てで当選しましたけれど、片岡事務所はそれを骨子にして、設計しましたんですわ。

東畑　小川陽吉という方は、わたし知ってます。息子が業界の新聞記者してて、よく知ってます。

白石　このごろ会うてないですけれどね。

東畑　もう亡くなりました。息子のほうも。

白石　大正7年の4月に地鎮祭をやりましてね、定礎式は大正9年。それで大正10年の5月に竣工しましたんですわ。まあ当時はあれを近世復興式と言うたんですね。

塔屋がありましてね、塔屋が高いんで、大阪一だったんですけれどね、5階建てにしまして、間口が47間、奥行きが30間、建坪が1,049坪7合5勺。延べ面積が6,336坪1合5勺、建築費が350万円余、坪当たり値段が550円。いまで勘定したら、どないなるやろな。で延べ人員が47万人。

基礎は地面から14尺掘り下げましてね。昔、2本孤って知ってはりますか。丸太2本立てて、それで分銅でボーンボーンと落として、松杭打つんです。いまはいろいろコンクリート杭やなんかがありますけれどね。松杭の末口が7寸に、長さ10尺、1尺5寸間で打ちます。

それで直営工事。鉄材、セメント、全部直営でした。セメントは樽です、昔は。それでセメント1に砂2、バラス4と、そういう調合です。それとまた、セメント1、砂3、バラス6。だから桶で切って運搬するんです。4ヵ所にミキサーがありましてね。倉庫の鍵はわたしが持っとるんです。で朝早う行って、セメントは何樽といって出すでしょう。それを打ったコンクリートの量とセメントの量と、何樽使うたということを検査するんです。桶のあとの始末もする。鉄筋もトン数を初め渡して、これ、切りっぱしが出ますわね、そうしたら切りっぱしは切りっぱしでかためておいて、夕方になったらそいつをまた目方かけて、渡したトン数と目方が合わなかったら困るので、どこかで鉄を拾うてくるかもろうてくるかしてこい言うてね、それでトン数合わすんですわ。そうして不正行為は一つもなかったんです。左官工事にしたかってみな直営です。それにはもう往生しました。

だから朝は職人と一緒に出て、しもうて帰るのは9時ですわ。土工事は……土工事はたしか主体工事ですね、銭高と鴻池でした。あとは左官は左官屋へ直接注文する。でペンキ屋はペンキ屋と、明細拾うてね。

杭打ちの、杭を完全に打ってるか打ってないかを検査するのに、

杭の頭を朝来てからパッパッパッと踏んで歩くんですわ。コトコトと動いたらね、抜かしたら、1メーターぐらいしか入ってない、そういうような検査をやりましてね。

東畑　そのときの鉄骨は日本製ですか、輸入ですか。

白石　日本製と、リブのついた輸入のやつと、二つありました。大阪市役所の仕事は、大体そういうことなんでございます。

日銀その他の名建築

白石　その当時すでにできあがっとったのは、市役所の前の日銀ですね。当時、片岡直温というのが日銀の支店長やった。その片岡直温さんに見込まれて、片岡さん、養子にいったんだろうと思う。

東畑　あれは、片岡直温さんが日本銀行の大阪支店長の時代に、片岡安先生は、細野安だった。それが東大を出て、日本銀行の現場の監督に来たんです。「あいつ、ようやる男やな、おれの娘の婿にしようか」と言って、口説き落としたんだ。そういう歴史があるんだ。

白石　あなたみたいに詳しく知らんけれど、養子にいったということは耳にはさんだんだ。それで直温さんの関係で、仕事が大分片岡事務所、増えたんですわ。

東畑　鹿島守之助がそうでしたね。あれも鹿島建設のおやじさんが外国へ行くときに同じ船に乗ってて、ようやる外交官やな、あれ、なんとかならんかというて……(笑)。で守之助が鹿島家へ入ったんです。

白石　それから後に三十四銀行の旧館も設計したんですわ。あれは残そうと思ったんですけれどね、残してくれなかった。

東畑　あれはいいものでしたね。

白石　いいものだったですよ。石造でね。

東畑　あれはどなたの設計ですか。

白石　片岡さんの設計ですわ。日銀がすんでから、あこへ来たんですわ。そやよってに、日銀によう似てるんですわ。

東畑　三十四銀行の菊池恭三さんが頭取で、当時の山口、鴻池両銀行と合併して三和銀行ができたわけです。

白石　そのときに、あれ残してもらいたいと…。菊池さんはあれ、残そうかと言うてはったんですけれどね、下の部長連中がもう残さん、と。それで潰しましてね。

それから、道修町の山口銀行が堺筋へ出るので、いまの三和瓦町支店、当時その山口銀行へまたわたし出向しましてね、設計監理をやりましたんや。できあがってから合併になりました。そのときに野村銀行、いまの大和銀行本店ができた。できあがったら外観がモダンで、野村銀行は当時片岡事務所にいた安井(武雄)さんの設計でした。山口銀行はやはり片岡事務所の波江悌夫さんの指導で完成した。

当時漆喰工事でね、いまの若い方は知らないが、石灰をたいて、糊をたいて、まぜて、それで壁に塗るんですわ。それから彫刻なんか、全部模型こしらえさせて、それで型板こしらえて……。いまだにね、瓦町へ行っても、彫刻一つ落ちませんでしたよ。わたしも自分で喜んでるんですわ。

東畑　ああ、しっかりしてます。わたしもあそこへよく行きますけれどね。

白石　そのほかには、郵船が江之子島に。立派な石造の建物です。郵船、潰しまして、いまはマンションになってる。あの江之子島、当時は大阪の玄関だった。賑やかでねえ。みな船で来たんですわ。

東畑　ああ、あそこまで。船での玄関ということでしたんやね。

白石　国鉄がまだ全部開通してなかったんですね。それで船で夜乗って朝着くんだ。四国、中国、九州方面からみな船で。

東畑　東海道線が大阪へ……、それで大阪駅が中心になってきたわけですね。

白石　そうそう。それから大ビルも後にできましたし、それから綿業会館。

東畑　ああ、渡辺節さん。私が学生時代に大ビルのほうができたんです。

白石　建物、下がったんかな。

東畑　うん。だんだん下がってきた。これはいわゆる大阪の地盤沈下というやつね。わたしもかつて港区で掘りましたら、いまの地盤の水平面下2メートル半ぐらいのところに、橋脚が出て来た。その下を船が通ったわけです。それほど下がったんですね。

白石　それから四ツ橋筋に日本火災海上というのがありましたが、あれももう潰しちまった。いま建てかえとるが、あれは明治末期か大正の初めにできたやつですわ。

東畑　ちょうど1階分下がったようになってますね、あの跡では。戦後に直したやつは沈下がとまりました。やっぱり地下水の汲み上げなんですね。

白石　それから「大阪市廳」の表の銘板、いまは右書きや、昔は左書きや。あれの制作者もわかりました。平田直吉さんといってね、鉄工所を経営していた。

それと、これは古い話だが、岩田成實大阪市役所土木部長、いま中央市場の前にアーチ型の橋がかかってますね、あこは川が三つ寄ってるんですが、僕らがまだ学校におったときに、あの人が、君らが社会へ出て何年かの後に、この橋が傾くか、まあわしらいなくなるけど、見といてくれと。あの橋はいまだに使えてますね。右がちょっと傾いてるかと思うような感じがするんですけどね。

それから後に大正橋という、大きな橋ができましたが、あれを設計した人が、女の人と死んでしまった。どんな関係か知りまへんで、わしはまだ若いから。「大正橋心中」という歌が流行しましたわ。

足立　そのころ白石さん、外国の雑誌、あるいは情報をお知りになるような機会がございましたですか。

白石　当時、自転車ばかしだったんです、それで自転車の置くところをこしらえよと。外地へ行っていっぺん見てこいと言われてね、戦後すぐ行ったんですわ。行ったらね、向こうは自動



旧三十四銀行

車が多いんだ。自動車の駐車場をみなこしらえとる。それで帰ってくるなり、自動車の駐車場の敷地を買いました。京都の河原町の角に三和銀行の京都支店がありますが、あの横手に 400 坪の土地を買いましたんです。それが駐車場になりましてね、非常に喜んでおります。まあ外国の雑誌や、外国で見てきた情報というのは、それですね。

それ以外に、銀行の客だまりに便所をこしらえたんです。銀行へ来たら、お客さんが便所と言ったら、どうぞ上へ上がってくださいというわけだ。それじゃ気の毒だからね、客だまりの風よけの横に便所をつくるようにしたんです。

東畑　洋式の便所ですか。

白石　洋式です。外国へ行ったら、銀行なんか、偉い人はみな正面に座ってませんわ。横へ回ったところに座っとる。僕は、支店長席を横手へ回すようにしたんです。そういうようにしたけれど、やっぱり日本人は真正面へ座りたいらしいのよ(笑)。そういう変更をやりましたけれど、それは実施できなかった。

新しい建築学台頭

足立　ありがとうございました。東畑先生は大正の末期はまだ学生ですね(笑)。

東畑　大分若い(笑)。いま白石さんのお話を聞きますとね、わたしらの学生時代は、そういうと画期的ですね。

わたしは大正15年に京都大学を出たわけで、開学は大正９年ですね、わたしは第４回ですからね。わたしらの講義の一番初めが「建築意匠計画第一部」というんですわ。僕入ったときに、意匠とはなんじゃ、ということですね(笑)。意匠というのは、これ（洋服を示す）だと思ってましたけれど(笑)、あれはデザインというものの直訳ですね。

足立　そうですね。いまでも使ってます、意匠登録といった特許関係でまだ「意匠」という言葉を使ってます。

東畑　「意匠」という言葉がついた。それをわたしは非常に奇異に感じましたね。それから構造のほうは、学校では「構造強弱学」という言葉だったですね。

足立　わたしの学生時代にも受講した講義の名称に残っていました。

東畑　あれはドイツ式の教育でね、ドイツ語で言うたらフェスチヒカイトレーレという。それが「構造強弱学」という学になってましたね。２年生のときに初めて習ったのが、鉄筋コンクリート学という名前で、それは坂（静雄）先生です。そのときに並列して習ったのが「剛節架構論」というものです。剛節とはどういうことかというのは、われわれとしてはわかりません、そのときは。というのは、構造強弱学、これは土木の先生の大藤先生に習ったんだから、それはいわゆるトラスとかの強さというものの理論ですわね、だから剛節とはなんじゃというわけです。そして坂先生の講義は、クラインローゲルのラーメンフォルメンと、ラーメンフォルメルンという本の講義です。

わたしは昭和７年に建築事務所を持ったわけですが、そのときにいろいろ先輩のやられたものを見学しましたけれども、なんであんなトラスなんかやるのかいな、ということですね。というのは、実務の経験なしにポコッと出たでしょう、先生の講義というものが頭へしみ込んで、それがもう一番偉いものだと思うとったわけね。それでラーメンでやったんですわ、綺麗ですわね、トラスがないから、工場なんかは。お前のやる仕事は、柱の下のほうが細いじゃないかというわけ。下が細い柱というものがあるか！と叱られたわけ。大丈夫かと言われても、先生の講義の通りやってるんだから(笑)、大丈夫と思わざるを得ないし、事実いまでもありますがね。坂先生のお陰です。

わたしらの時代が建築界の変わった時代ですね。と申しますのは、わたしが大学に入った年に大震災があったわけです。大正12年ですね。いいときに入ったようなものですわね。わたしらはのんきな話で、先輩を見習うてやらずに、先生の言うことばかり聞いてやっとるわけだから、いまから思ったら画期的なような状態だったんでしょうね。

剛節架構という講義をされたのは、坂先生が初めてじゃないですか。わたしらが最初に聞いたのがそれでしょうね。それと、鉄骨については全部、英国の「ケッチャム」という本があったんですが、それがわたしらの教科書ですね、そうすると、全部インチ、ポンドですわ。材料は全部インチ、ポンド。日本のやつも全部インチ、ポンドです。しかもそのころにメートル法ができたので、大学の講義は全部メートル法になってたのです。そして木造は尺貫法ですからね(笑)。だから木のほうはみな尺で言ってますわ。畳でもみな何尺と。鉄骨のほうはインチ、ポンド。それから学校の講義はメートル。それが非常にややこしいので、わたしらは全部対数表というのを与えられましてね、それで換算して、みなメートルに直してやっていくわけですね。

坂先生の剛節架構というのは、理論的に言うたら非常にむずかしいものなんです。鉄筋コンクリートでも、理論的に計算したら非常にむずかしいものです。ところが先生の実務的な講義は、大した差のないところは、ある仮説をおかれるわけです。だから一見して断面がパッと出る表ができるわけです。それをわれわれの講義に使ってもらったわけ。だから、その講義をわたしらは、先輩のすることを知らずに、出てきてこれを使うでしょう、そうすると先輩が怒りよるわけです。お前、そんなに早うできるかい、ということですね(笑)。

坂先生のは、いずれにしても大した差はないという仮説が一つあってこそあの計算ができるわけですね。ラーメンでも、下固定だったら下から３分の１前後のところに必ずインフレクション・ポイントがあるということはわかってるわけですわ。だから、そこを今度は仮説にしてやったら、すぐ解けますからね。そうすると、結局先輩は、こんなところへこんなものをしたら、計算のしようがないじゃないか、ということになるわけですな。それがいま現在われわれが、若い人がコンピュータを使って精密なデーターを出すのに驚くのと同じことですね(笑)。

足立　そうですね。第一の変革期だったんでしょうね。

東畑　だから、わたしはつまり幸福に生まれたということですね。

分離派の講演会を聞く

足立　そろそろ、分離派のお話を伺いたいと思うのですが……。

東畑　話は長くなりますが、京大建築学科ができたのは大正９

年です。土木学教室で鉄筋コンクリート学のわが国の開祖ともいうべき日比先生と、当時名古屋高等工業の校長をされていた建築学の武田五一先生の二人で、土木学教室から分かれる型式でできたものです。ところが土木つまり構造の日比先生並びにその助教授の荒木先生が相ついで死去され、急きょ東大より若い新進気鋭の士を迎えられたのが上述の坂先生。また一方武田教授の助教授に迎えられたのが森田慶一先生です。いずれもわたしらが初講義を受けたものです。

森田先生は計画法の若いプリンスで、わたしらのあこがれです。そのプリンスが分離派の一人で、大阪で分離派の同人が講演会をやるということです。同級４人ではるばる大阪の堂ビルの講堂へ行きました。同人は森田先生のほかに堀口、瀧沢、石本、山田守の諸先生。いろいろの模型を出しての堂々たる論説でした。ただ、聴衆はわたしら４人を入れてわずか13人(笑)、こんな時代でした。わたしらはかえってこんな時代に堂々と旗あげをされるその意気に感激しました。もちろん武田先生には内緒でした。

白石　昔、分離派の本を石本さんからもらったんでね。その分離派の本を探したんですが、出てこないんですよ（笑)。

東畑　それは「建築譜」という本でしょう。

コルビュジェの紹介

足立　先生、コルビュジェの関係というのは、どういうことになって翻訳という……。

東畑　武田先生はああいう方だから、全世界の雑誌をお取りになっていた。そのとき、英国には『アーキテクチュラル・レビュー』、アメリカには『レコード』。それからドイツにはワスムートの『建築月報』、フランスには『ラルシュテクツール』という雑誌があった。

まあその４つがね、…ドイツにはもう一つ『モデルネバウフォフメン』という雑誌がありましたが、まあこれは大したことはなかった…。この４つが、われわれとしては外国知識を得る道だったわけですね。

たまたまそのワスムートのほうに、初めてル・コルビュジェというのが小さく、２ページぐらい載っとる。その時代にペーター・ベーレンス、メンデルゾーンとか、ハンス・ペルチッヒとかね、いろいろいるんですが、どうもくせがあってピンとこない。そこへサーッとものをすべて解決したような設計図が、それなんです、いまでもありますがね、アパートの。これは偉い人やなあと。それと同時に、その雑誌に、アンドレ・ルルサーという人も出たんです。これが行くべき道やなあ(笑)、と思って感心したんです。そうしたら、そのときにたまたま国際連盟のコンペがあったですね。当選の案が載りました。佳作のところに、ル・コルビュジェ・ソーニエと書いてある。で、ああ、こんなところまで出す人かいなと思って、ますます崇拝したわけですね。

ドイツの本は大体紹介だけですからね、ところがそこで『ベルシュム・ラルシュテクツール』という本があるということが書いてあるわけで、その本を取り寄せたわけです。なかなか読みにくいのを、字引を引いて読んだりしてね(笑)。絵だけはわかるんだけれどね。そうしたらその本でヒルベル・ザイマーという人のドイツ訳『コンメンデンバウクンスト』という本があるのをみつけて、その内容を紹介したんです。

〔松井　紹介はどこにされたわけですか。〕

東畑　『建築学研究』というのにね。わたしが大学院におるとき、お前、一番若いんじゃからこれを編集せいというわけで編集した。ところが原稿が集まりゃせん(笑)。それで場ふさぎに「資料紹介欄」というのをこしらえましてね、それは僕の独演ですわ、そこへ外国のそういう資料を埋めてたわけですが、そこでは、だれもまだル・コルビュジェを言うた人ない。ル・コルビュジェ・ソーニエというのが本当の名前です。でル・コルビュジェ・ソーニエ・エ・ピエール・ジャンヌレのピエール・ジャンヌレ、あれは身内の人で、二人の合作です。



「建築学研究」については前掲の向井論文参照

種本はもう一つあるんです。ハーバート・ロバートソンという人がね、あれは英国の建築家協会の会長さんです、どこかの学校の先生や。校長先生をしていたその人が、ロイアル・インスチチュート・オブ・アーキテクトの機関雑誌の、世界の新しい建築家についての論説の中にル・コルビュジェの話を載せてるんです。それをわたしは訳したことがあるんです。

そのル・コルビュジェだけに関しては、これはスイスの絵かきであると。これはだれも知りませんわね。でスイスの絵かきであって、英語流に発音するとチャールズ・エドワード・ジャンヌレですわ。立体画の絵かきさんです。ル・コルビュジエはペンネーム。立体画、丸やら四角を集めて一つの構成をする絵があったでしょう、ドイツ語の空間という意味のラウム、そのラウムを寄せ集めて描いた絵がル・コルビュジェ・ソーニエの絵なんです。

そういう立体画派の絵と同じような建築をやったのが、パリの博覧会の出品ですね。それをもう一つモディファイしたのが、いま言うたわたしが惚れ込んだアパートですね。そういうことがロバートソンのにも書いてあるし、それから『コンメンデンバウクンスト』にもちょっと書いてあります。

足立　大正末期から昭和にかけてようやくヨーロッパなんかの情報がどんどん入ってくるようになったんでしょうね。それに皆さん刺激を受けてということに……。

東畑　刺激を受けたわけです。

足立　で、たまたま有名なコルビュジェに、早いこと先生が目をつけられたという……。

東畑　それは、こんな偉いのがおるのに、なんでだれも言いよらんのかいな、というので、その『建築学研究』というのに小さく書いた。

変革の時代

足立　白石さんが昔の立派な様式をいろいろ勉強なさって堅実

な建物をおつくりになる、東畑先生の頃は、鉄骨を手がけられるようになり、その面でも変革期だったわけですね。

東畑　変革期ですね。

足立　大体堀口さんとか森田さんの年代で初めてヨーロッパの様式模倣から離れて、日本的なものとは何かとか、建築の本質とはと考え出した時代だと思うのです。そこで堀口さんは日本的なものの追求から、やがて茶室へ目を移され、森田さんはウイトルウイウスを通じて建築の本質をつかもうとされた。堀口さんは日本的なものについての論文を発表されて、わたしなどは刺激されましたし、森田さんからはギリシャや『建築十書』のお話をよく承りました。ちょうどそれが昔の大先生と、次の第二世代の、差だったと思いますね。

東畑　そんなことだったろうと思いますね。

武田五一先生のこと

〔松井　武田五一先生なんかも、ご存じでしたら、ちょっと触れていただくとありがたいと思うんですが。〕

東畑　武田五一先生はね、だれもが偉い先生だと漠然と言うてますけれどね、わたしももちろん偉い先生だと思いますよ。こと、絵とかフリーハンドというのは天才ですね、手の動かし方は。で速いし。絵かきになってもあの方は成功した人だと思いますよ。

しかし、英国式の教育を受けてこられたので、それも英国で、それであああいう講義をわれわれ受けたわけです。そのうちに一つだけね、コンポジションという作図があったんですわ。足立先生の時分にはなかったでしょう、そういうのは。

足立　ええ。

東畑　コンポジションとは、西洋建築歴史で習ったギリシャ、ローマ、アラブ等の各スタイルの柱、軒、屋根、柱頭等の部分を、色分け、配置分けをして一つの構成をして画面を創作することです。これは武田先生の留学時代に受けられた建築の講義の製図課題の一つであります。建築物のプロポーションをよくすることの練習なのでしょう。立体画家が丸やら四角を色分け、配置分けして一つの絵を構成してゆく方法、また、ドイツ語のラウム…目的をもった空間…を巧みに組み合わせて住という空間をつくり出すという思想と同じ主旨で、わたしらは武田先生からそれを習っていたのです。ただ学生の頭ではスタイルの部分の練習としか考えられなかったので、武田先生の教えの本旨をよくのみこめなかったのです。

われわれは正直に、詳細にわたってディテールを描いてやっとるわけでしょう、先生が入ってきて、お前、何しとんのじゃ、と、ビャーっとその上へ、ここは黒く、ここは白く、ここは青、といって、画かれるのです。せっかく描いたやつを、先生滅茶しよんな……(笑)。それがですね、プロポーションというのはそういう具合に考えていけということだったんでしょうねえ。わたしらはそれを正直に考え過ぎて、ことに先輩のすることをちっとも知らずして、ポコッと出てきて勝手にやった。真面目だからやったんですよ、それは。僕はああいうところはやっぱり先生というのは偉いもんじゃなあと……年寄ってからですよ、考えるのは。

建築事務所開設の動機



東畑　話は戻るけれども、武田先生のもとに、わたしは大学院の給費生だったんです。年に900円もらって、月謝が100円ですから、1,000円ですね、それが切れるんです。お前、切れるのに、何か収入の道を講じんといかんなあ、そんならこれをやってみないか、と言うて出されたのが東方文化学院の……。先生、それは一体どういうものですかと、当時は支那と言っていましたが、中国の文化を研究する研究所をこしらえるんだから、これをやれ、と。(注：外務省東方文化学院京都出張所)

中国の文化というのは、わたしはよく知らない。家をやるんだったら、屋根が反り返った、龍が柱にまきついた(笑)、あれをやるんだろうと思った。さあ、困ったなあと(笑)。ル・コルビュジェを崇拝しとるのに(笑)、先生いやです、といったら、切腹せんならん。困ってあげくの果てに、先生、一体これどなたがといったら、文学部の濱田耕作、羽田亨、狩野直喜の三教授に会えということです。いずれも支那学の大家、当時は大家どころか殿様です。足立先生はどうか知らんが。

足立　いまはガタ落ちの庶民ですわ(笑)。

東畑　だから武田先生にはよう言わんのですわ。

ところで同じ神様、殿様でも、他学部の教授はうちのおやじとちがって隣のおじさんにみえるのです。その建築の幹事役をされている濱田教授に直接会って思い切って言いました。「指導教授から言われまして参りましたが、わたしは屋根の反って龍のまきついたような支那の建築は建築技師としてきらいです」と。「こらっ！何を言うとるか、支那文化を研究するのに建物まで支那風にする必要がどこにあるか。大学院学生として余りに見解がせまい」とえらい叱られました。私はそれで胸のつかえがいっぺんになくなりました。

「わしはスペインの僧院が好きだ、中庭のまわりに個室があり、万巻の書を庫にそなえて研究できるような家、すなわち僧院風な設計はどうだ」と、自分の画かれたスケッチを示された。やれやれこれだったらいけるなあと思って武田先生のところへ行って「先生、させてください」と言った。それがもとなんです。ところが、ついにコルビュジェも何もあったものじゃないですわ。あの辺が大学の教授の偉いところですなあ。狩野さんにしても羽田さんにしても、自分の専門にかけて言われるのは大したものですね。そのかわり、すきがありますね。こと計算になってきたら、数字的なことは全然わからんのだ。メートルで言うたってわからしませんしね、何尺ぐらいなもんじゃ、と(笑)。そこでたまたま覚えたことは、こういうことなんです。大学の自分らの先生は神さんみたいに思てますけれど、つまり、ほかにもそんな人がたくさんあるということです。わたしは缶詰の中のこんなものと思うてますからね、この人が一番偉い人だと思うてますから、世の中のことは、ちっとも考えてえしません。ほかの殿さんに仕えたということ。やっぱり偉い先生がおるもんだなあと思て、それでちょっと眼下が開けましたですね。

わたしは当時理論的なことを研究して、ル・コルビュジェを崇拝しながら、グロピュース一派の理論的指導者でテオ・ヴァン・ドースブルグという人の「新構成芸術の基礎概念」……バウハウス叢書中の一冊……を愛読していました。その中に上述の

ラウムという言葉とゲシュタルトという言葉が出てきます。ちょうど当時ごく親しい親戚の者が西田幾多郎先生の下で哲学の勉強をしていました。優秀な哲学者です。ラウムを空間、ゲシュタルトを構成と訳したらどうだと教えてくれました。私はいまでもよい訳だと思っています。わたしはその学者の学の広さに感心するとともに忠告を受けました。君は工学部の学生ではないか、一方で数学的な工学を勉強しながら片方で哲学を研究したって無理だよ、自分は全心身をなげうって哲学の勉強をしているが未だに学成らずだ、と、なるほど君の言うことは真実だと言って私は哲学的な研究をやめました。

やめたのと同時に、その片方の偉い先生について仕事をやったので、実務ということに対しては非常に興味を持ちました。あ、これはあんな偉い学者相手に哲学のようなことをやっても仕方がないと思ってね、それで実務のほうへ転換しようと思って建築事務所をやったということでね。

海外へ出ての印象

足立　先生は外国へ行かれたでしょう、そこでさっきの白石さんのお話のように、何かやっぱりよかったということはございましたか。

東畑　ナポリへ上がってからずーと……結局半年かかってずーと見てきたんですがね、前もって日本でしらべてみんな書いてあるんです。一番最初に行ったのがナポリですが、まあいろいろありますわね。一番行きたかったのは、ウィーンのオットー・ワグナーの作品。よろしいねえ、あれは。教会がありますね。

足立　ええ、シュタインホフ教会堂。

東畑　あれはウィーンのずっと郊外。それがむずかしいところでねえ、バスよりないんです。長いことかかってバスの終点に着いたら、精神病舎なんです。あこがれのワグナーの教会が丘の上に見えとるから、あれを見に来たんですといったら、なんでこんな田舎の町はずれまで日本からわざわざやって来たんか、珍しい男やな、というて案内してくれたのが、そこの建築技師なんです。

教会の病舎の中を通りますとワーッと、変なやつが来よったわいと、抱きつきよるんですわ(笑)。あれにはわたしは参ったですね。怖いやら……助けてくれというのでしょう、ノイローゼですね。だけど、あの建物は、いい建物でしたね。

足立　ワグナーという人は、金色をうまく使いますね。

東畑　そうですね。それから郵便貯金局とかね。なかなかいい建物ですね。

また、パリではコルビュジェの作品を見に行きました、それもノートしてね。凱旋門のすぐ近くにあった、それは住宅ですわ。ところが、せっかく行ったんですが、鉄条網が張って、入れしません。ちゃんとできてるんですよ、家は。そこに門番がおりましてね、「一体これどうしたんだ、わたしはコルビュジェという先生の作品を、日本から見に来たんだ」と言ったら、「ほおー、実はこれはえらいものをやってもらったものだから、施主との間に文句が出てしもうて、いま係争中でね、出入り禁止にしてます」と(笑)。パリでもそういう時代でした。

それともう一つ、行ってオットー・ワグナーには感心したけれども、感心しなかったのは、英国の雑誌に載っておる近代建築ですね。ドイツは困窮時代ですからね、わたしが行ったときには、ヒットラーと共産党の間の喧嘩の最中ですね。またその辺には、毒ガスでやられた乞食ですね、あれのおるときですから。あんな時代だから、いい建物ができるはずがありませんしね。だから貧弱なものでね、かえってドイツの古い建物にいいのがたくさんあったという時代でしたね。

それでアメリカへ渡ったんです。アメリカはもう断然違うんですね(笑)。アメリカへ渡ったのも理由があって、工場建築のいいのがあったので、それを見に行ったわけです。そうしたらちょうどクライスラービルができあがるちょっと前でした。で、なんと申しますかね、スケールの大きい、つまり量産的なる考えですね。わたしが習った剛節架構というようなものは、ドイツでは小さなものでやっていただけのことであって、アメリカでは自動車工場なんか、もうでっかい、それこそ1万坪や2万坪ぐらいの建物も、みな剛節架構でやってます。あ、これやなあと思って感心して、だから工場建築というのは非常に面白いなあという気がしたですね。

足立　いまだにアメリカの場合はスケールが大きいというか、大味と言うてもいいですけど、そういうのが特色ですね。

東畑　日本がいまそれと同じですね。つまりクライスラーでも、Hですね、大きなHを二つポンとついで、溶接したんでしょうね。大きなビルの50階も80階もあるやつが、そうなってるんですよ。

それからスラブを打つんでも仮枠の代わりの鉄板をはさみましてね、コンクリートを流すのにどんごろすをずっと敷きまして、そこへ一定の重りをやって、向こうから引っ張りよるんです。そして流していくわけです。そうするとコンクリートが固まるでしょう、固定仕上げというのはしないんです、あまり。そういう量産的なる工法ですね、それにはわたしも、ほおーと思って、すっかりアメリカ風に……。そのときにドイツにジードルンクというのがあるんですよ、あれはクラインだったかな……。

足立　動線を考えた人はアレクセス・クラインですよ。アパートもつくっておりましたね。

東畑　あのクラインのところへ見せてもらいに行ったんです。あれは面白いんです。人間の寝る、働く、休む等の行動の範囲を寸法的に大きさをきめ、室の寸法を規制し、その組み合わせによって一単位住宅の幅と奥行きとを標準化したもので、これを幅5種類、奥行き8種類くらいに分類し、セクションペーパーのようにした表があった。そうすると建物の幅と建物の奥行きとがわかって、それでできていくわけですね。家具なんかも全部統一されます。いずれも階段式4、5階建てのアパートで、「ジードルンク」という言葉を使うてやっていた。いまから思うたら、ケチなものだなあという気がしたですがね、僕には。

足立　そうですか。ありがとうございました。それでは時間も残り少なくなりましたが、白石先生からも、何か面白いお話を伺いたいのですが……。

白石　明治末期から大正の初めにかけてね、大抵みな壁はレンガですわ。それで外へ石を張るようになる。われわれが監督し

Memo

ドイツのジードルンク建設

1933年ナチス政権下、小菜園と畜舎を付属したクラインジードルンクが、産業労働者住宅の最善の形態とされた。

とったときは、レンガを4個ずつ縄でくくっとるんですわ。それで必ず水の中へつけとくんですわ、何分間も。吸水させて、それを積むんです。15段以上は積まないんです。トロを流すと、ずーと目地のところへトロが出てくるんですわ。いまは真ん中へポンと置きよってやりますから、そこへ水がたまってしまいますが……。

そのレンガが今度は鉄筋になりましてね、壁厚は薄くなる、薄いと、また壁厚を厚くしようと思うとレンガを積む。とにかく15段以上積まないようにしました。そういうようにして監督していって……。

それから鉄足場がね、日本はまだ丸太の足場ですわ。外国はもう鉄足場をやってます。で、わたし日本へ帰ってくるなり、すぐ業者に、いっぺん見ていらっしゃい、鉄足場をやれ、と、たしか大林のだれかに言うたら、見に行って、それから鉄足場が流行しましたよ。

それから10年ほどしてから、またシカゴへ回ったんですがね、そのときにはもう高層建築、できてましたね。日本では御堂筋、30メートル以上やったらいかんと言うてるときでした。帰ってきたら、すぐまた高層建築やろうという話がありましたけれどね……。

足立　この関西でいろいろ働いておられましてね、面白い方がおられたんじゃないですか。

白石　そうですねえ、面白い方は、あまり……(笑)。真面目にこつこつやっとったから(笑)。飲み連れはありましたけれどね。

東畑　波江さんがおりましたやろ。

白石　ああ、波江さんは片岡事務所におりました。もう亡くなりましたけれど。

Memo

手もとに、大正9年の「日本建築協會會員住所姓名録」がある。茶色に変色した表紙には、万年筆で、「備考　本簿以外ニ新加入者百余名　一月之……」と書かれているが、ボロボロになってあとは読みとれない。

大正9年12月20日現在の会員の中から、片岡建築事務所所属の会員を拾ってみた。

伊藤　正文　大阪市外鶴橋町字岡九
伊藤幸太郎　大阪市北区相生町三五
片岡　　安　京都市外伏見桃山
吉木　久吉　大阪市外天下茶屋五七六
長田岩次郎　兵庫県武庫郡六甲村篠原字下岡五五五
波江　悌夫　兵庫県武庫郡御影町東明三三九
山本辰次郎　大阪府北河内郡守口町字瀧井四六四
安井　武雄　東京市牛込区若松町一四二　井上征夫方（渡米中）
藤井　令三　大阪市南区難波桜川町二丁目一〇九六
平島　末吉　大阪市外天下茶屋五七六　三浦清方
馬野　七登　大阪市北区北野牛丸町八二　佐々木方
友田　　薫　大阪府東成郡森小路八六七
大塚　錦三　大阪市北区上福島二ノ六七二　今木方
川村種三郎　大阪市東区今橋一　片岡建築事務所
田原三千男　大阪市北区西梅ヶ枝町八九五　内川方
野網友次郎　大阪府東成郡榎並町野江四一〇　松田方
木越誠二郎　大阪市北区上福島一丁目五九ノ二　後藤方
白石登喜男　大阪府東成郡住吉公園
守山　廉三　大阪市西区阿波堀通五　船津方

因みに、大正9年11月には、名誉賛助員60名、会員 187名、地方会員62名、終身賛助員43名、特別賛助員12名、普通賛助員287名であった。

名誉賛助員のなかには、井上準之助、池上四郎、林市蔵、大隈重信、片岡直温、直木倫太郎、村山龍平、後藤新平、関一の各氏らの名前が見られる。

建築協会入会のいきさつ

足立　東畑先生も事務所をお開きになってから会員になられて、協会に関係されたということでしょうか。どんなことがございましたか、初めごろは。

東畑　わたしがまだその協会員でないとき、大学院の学生のとき、昭和の5、6年ごろ、いまでも覚えてますけれども、大同生命ビルの中で、新しい木造建築について話をしろという武田五一先生からの命令なんですわ。そのときは木造建築みたいなものは僕らわからん……(笑)、しようがないな、あんなものをやったって……。「新しい」という名前がついとるんだ。先生はどういう意味で言うたのか、わかりませんよ、困ったなあと思って、文庫へ行って……えらいいい本があります、ドイツの。「ジベルの使い方」という本があった。小さい木を合わせまして、たくさんジベルによってしめていくというのが新しいドイツの建築工法だという本があった。これええなと思って、これをずーと読んで、訳して、訳したやつをパンフレットにこしらえて……あのときね、ご存じかどうか知りませんけれど、スカンジナビアのストックホルムの駅がそういうふうになってます。あれが木材の産地ですからね、ムクの木の薄い板を集めてこしらえたアーチですわ。それが載ってるのです。これが新しい建築だなというので、その講義をパンフレットをこしらえてやりました、あそこで。そのときは聴衆は割に多かった、それは記録にあるはずです。

そうしたら、会長の片岡先生から、ちょっと来いということ。片岡先生はわたしらの都市計画の先生なんですわ。

それでいわく、「君、この間、うちの会で講義をしてくれたそうやな。パンフレットを拝見したが、なかなか面白いことを言うとるな」というわけ。「ところで、この会へ入らんか」と、こういうことです(笑)。で入った。入るために呼ばれたわけ。

足立　白石さんは協会にいつごろお入りになったんですか。

白石　創立当初からです。初め、片岡事務所に協会は同居してね。それから後に、雑誌を発行するから、広告をもらいに歩けと言われた。それで広告もらいに歩いて、で原稿も書けって、原稿も書いたこともありますけれどね……。

それから思い出ですがね、一番怖かったのはね、辰野博士、鞭持ってるんですわ。昼、ご飯食べるときに、食事が現場に出てるのに、おそくなり室におったら、パシーッとたたかれるんですわ(笑)。そういう厳重な……いまの若い人には似合わんような教育を受けました。日曜休みなんて全然ないですからね。休みの日の1日、15日も必ず明細拾うたりなんかしてたら……。

足立　それでその広告集めに回られて、いつも順調に広告は取れたんですか。


足立孝氏

白石　ある程度ね、三つに二つぐらいは広告くれますわ。で、たくさんもらうと、また来月困りますからね、この月はこれだけ、来月はこれだけと、そういうて順番に回って……。(笑)

足立　それじゃ、長時間お話をいただきましてどうもありがとうございました。

アンケート

最近20年間、そしてこれからの10年

―建築・まち・くらし・社会を語る―

【設問１】

高度成長の末期からオイルショックを経て低成長時代へと推移したこの20年間の建築、まちづくり、くらし、社会の出来事の中で、あなたの印象に残ったものは何だったでしょうか。

【設問２】

これからの10年の動きを象徴するキーワードあるいはコンセプトは何でしょうか。それに対するあなたのお考えをお聞かせ下さい。

創立50周年記念号（昭和42年３月号）では、建築界と建築協会の過去50年を回顧しているので、今回の70周年記念号は、それ以降今までの20年間と、さらにこれからの10年の、建築だけでなく広く社会にまで目を転じてその動きを見つめたいと思いました。

建築界のみならず、建築やまちづくりに接点をお持ちの識者に、上記設問で、1000字程度のアンケートをいたしましたところ、21人の方々からご意見が寄せられましたので、以下に掲載いたします。

いずれも貴重なご意見で、今後の参考になると存じます。アンケート記事を寄せて下さった方に厚くお礼申しあげます。

21世紀の建築様式

表音文字の文化から表意文字の文化へ

原　桂一郎

「文明は西進する」という言葉がある。世界の文明は、中近東地方に始まり、ペルシャ、エーゲ海、ギリシャ、ローマ、サラセン、パリ、ロンドンと、西へ向かって進んだというのである。その後も大西洋を渡り、アメリカ東部から西海岸へ移り、今やハワイから日本へ渡りつつあるといえる。次の世代には、朝鮮半島から中国大陸へ移ることになるのだろうが、できる限り日本に足を止めて欲しいと思う。

これらの文明のリーダー達は、それぞれの時代において、世界中から富を集め、その財力でもって自らの街づくりをしてきたのである。過去の文明を振り返ってみると、それぞれ独自の遺産を持っている。それ故にこそ、一つの文明として歴史に名を残したのであろうけれど。

建築と街づくりについてみるとき、かつての文明のリーダー達には、それぞれ独自の様式があった。ギリシャ建築、ローマ建築、サラセン建築といえば、直ちにそれぞれの固有の建築様式が想い浮かぶ。パリには、パリ独自の美しい街並みと建築群がある。アメリカは超高層建築という遺産を残した。しかしながら、現在の日本は、まだ日本独自の建築様式を持っていない。アメリカの模倣に過ぎないように思う。あれが21世紀の世界の文明をリードした日本文明の建築様式であると後世の人々に語り継がれるような様式を創り出していくべきではないかと思う。それはどんな建築なのか。予見することはむつかしいが、社会のさまざまなニーズと新しい風潮の中で自然に形成されていくように思う。

その新文明について、あえて所感を述べれば、その一つは、物質文明の行きづまりの中に再び心や精神の解放を求める第二のルネッサンスともいえる風潮が生まれてくるように思う。さらに東洋的な伝統や哲学が加味されたものになるのではないかという気がする。その根底にあるものは、大胆な私見をお許しいただけるなら、それは、表音文字の文化から、表意文字の文化へ変わることによる文明の変化ではないかと思う。

西欧の表音文字は、符号のようなもので、数字のような正確さを持つ。１＋１＝２であって、決してそれ以外の答えは出ない。その思考がコンピューター文化を生み出し、衛星探検を可能にしたのである。それに反し、漢字は表意文字であって一字ごとに意味をもつ代わりに、その語の意義が多様であいまいなところがある。しかし文字を組み合わせて熟語を作る場合には、加減乗除自在な思考の組み合わせが可能である。思考は文字を念頭においてするというが、カタカナで考える思考が、漢字で考える思考に変わることにより、思索的、精神的な奥行きは増していくのではないかという気がする。東洋文明再出発の時代が来るのではないかと思うのである。

（はら　けいいちろう　大阪市都市整備局次長）

『心のゆたかさ』

森内盛一郎

「設問２に対して」

住宅難の時代には雨露を凌ぐだけのものでよかった住宅も、生活にゆとりがではじめると、単に住むだけではなく、くつろぎ、語り合いなど楽しめるスペースであることが要求され始める。したがって内部造作や設備についても、最低限必要なものでは満足されなくなり、さらに進んで、住宅のデザインの多様化、個性化などが必要になってきている。

生活水準が上昇したいま、改めて生きがいを問い直すと、物の充足より精神の充実感が問われてくるのではないだろうか。ありきたりの、人と同じものでなく自分だけのもの、創造性を尊び、自己を表現したものが望まれる。自分の精神の充実感、『心のゆたかさ』が今後の指標になるのではないか。

ネクタイやハンドバック等でブランド製品が好まれるのは、品質の良さもさることながら、むしろブランドが与える情緒的満足、精神的充実感が人気の原因ではないかと思う。

創造性を尊び自己の表現を求めるうごきは、手芸、俳句、和歌、書道、または模型製作などが盛んになっていることからもうかがえる。ちょっと脱線するが〝カラオケ〟なども、この中に入るのかも知れない。いまの家庭では、家族の誰かはこれらの一つを楽しんでいるように思う。

心のゆたかさを求めて、地方自治体も文化施設に目をむけ始めている。音楽館、美術館、博物館、歴史館などの設置は、昭和60年には52年の倍の数になっているそうだ。住民生活を維持するための最低水準、シビルミニマムがある程度充足されたいま、地方行政も、住民が心のゆたかさを求めているということを察しているのかも知れない。

働く時間が短縮され、人口の老齢化などで国民の余暇、自由時間は増えてきている。衣にしても、食にしても、住にしてもいままでよりひと味ちがうもの、これまでのように〝高いものが良いもの〟という経済的論理よりも、楽しさを好み、自分の好みを生かす『心のゆたかさ』を増すものに関心が集まるように思う。

（もりうち　せいいちろう　住宅・都市整備公団関西支社副支社長）

成熟社会への道

田中孝男

㊀１　関西新空港を迎えた国際化への道

大阪で開催されたEXPO'70、万国博後の伊丹空港の状況から、時の運輸大臣・丹羽喬四郎氏が第２空港の「位置と規模」のあるべき姿について航空審議会に諮問したのは昭和46年であり、その答申が行われたのが昭和49年である。昭和62年１月に着工になり、昭和68年春に開港となると、着工までに17年、開港までに25年も経過することになる。

その間、国をはじめ産官学を含めた多くの有識者・諸団体による推進大キャンペーンにより、とにかくもやっとの思いで廻り道をしながらも着工に漕ぎつけた感がある。そしてその間に関西学術研究都市の計画・神戸ポートアイランドの実現・大阪南港テクノポート計画・大阪ビジネスパーク（ＯＢＰ計画）等数多くの国際化へのプロジェクトが生まれ、実りつつある。

今後関西が東京と肩を並べて国際化の道を歩むのであれば、まず関西の自治体・財界人がナショナルプロジェクトを推進し、創り上げるためには手を取り合って協調する組織、たとえば関西経済協同体（ＫＥＣ）のごときものを創り、運営するたくましさと運営能力が問われていることを日頃感じている。そして日常の生活の中から、ビジネス・学術・研究開発等の分野まで幅広く、深い社会を築くための生活環境をはぐくむ都市経営が必要であり、そしてその芽が生まれてきているように思われる。

㊀２　成熟都市へのアプローチ

古（いにしえ）から―衣食足りて礼節を知る―と言われてきた。日本の国も経済的に豊かになり、日常生活も特に衣・食・医までは大変めぐまれている。しかし、こと住生活環境は根本的に立ち遅れてしまっている。お陰様で人生の平均的寿命が伸び、大都市に人口が集中してきた現在、特にこの10年は戦後からの産業構造の転換と合わせて、都市生活の次への課題―成熟社会への道―に向かって新しい土地利用計画を創り換えてゆく必要を感ずる。

一つの例として、特に大阪湾ベイエリアに面する臨海ゾーンは、重工業混合のグレーゾーンから、すべて新しい都市生活ゾーンにイノベーションする絶好のチャンスである。この10年間は、大阪湾本来のあり方とともに、臨海部の有効活用を多角的に見直し、新産業立地と合わせて、キャンパス・レクリエーション・住宅等、国際的な水準以上に向かって活力ある、そして昼も夜も美しい環境に育て上げたいものである。

（たなか　たかお　株式会社日建設計取締役）

国際化・高付加価値の時代

藤縄正俊

これからの10年、あるいは21世紀にかけて、時代は、どうも想像を絶するような勢いで変貌をとげていくのではないだろうか。そのメガ・トレンドとして二つ挙げてみる。

政治・経済いずれをとらえても、国家の枠を越えて地球規模で展開されており、相互の国や地域と複雑に関連を保ちつつ、実に不透明で不気味な広がりを持って国際化が急進しているようにみえる。われわれの慣れ親しんできた社会の枠組みや制度から日常の生活の価値観や嗜好に至るまで、否応なく国際的尺度になっていかざるをえないのではないだろうか。

貿易摩擦と急激な円高は、世界での日本国家を孤立化の方向へと追い込んでいるようにもみえるし、すでに、国家といった過去の枠組みの空洞化は、日増しに大きくなっていくようで、海外投資と海外生産へのシフトが、各企業の生き延びる道といった感すら与える。個人でさえ、生活の豊かさと低廉さを求めて、住む場所を国境を越えて選択し始めている。

次に、高度情報通信化時代の到来によって、すべてに高い付加価値を求める社会は、トレンドとしてソフト化・サービス化へと向かっているようであり、物質文明の終焉と感性文化への

偏向、第三次産業への社会構造の変革といった現象となって展開している。

狭く閉ざされた国土の中で、人と土壌をこよなく大事にして、物をつくるという営為に人生観をダブらせてまで生き続けてきた日本人に、物をつくるな、次は国際化だ、ソフト化だといって発想の転換を迫っているのが、現在の真の状況かもしれない。変わり身の速さが身上とはいえ、社会に定着するには、多少の時間を要すると思われる。

いずれにしろ、街や建築が、その時代の、その地域の文化的・歴史的意味を表現することになるとすれば、いかに複雑で動きの速い不透明な時代とはいえ、われわれなりに未来を読み解き、地域特性を焙り出し、物の存在の中に多様さと豊かさをどれだけ浸透させることができるか、そして人の心を打つ表現にまで高められるか、が肝要だと思っている。

（ふじなわ　まさとし　株式会式大林組本店建築設計第一部長）

地方に芽吹いたコンペ・エネルギー

牛山　勉

「名古屋は、どうなってるんだ……」と、当時、毎月のように東京に出向いていて、親しい委員会仲間からよく尋ねられた。

昭和54年――岐阜、名古屋を中心とする地域に芽吹いた第一期オープン・コンペ・ラッシュのはじまった頃であった。この稿を書いている昭和62年１月というのは、その第二期ラッシュの真っただ中にいる。

地方自治体が発注する建築工事の設計者を、どう選ぶかについて、永い混迷の時期が続いてＡＥ選択法の日本版といえる東京都方式がやっと、その成果を一つ一つ生み出しつつある一方で、全国各地で公開設計競技の実施に踏みきるオーナーがふえてきたのは喜ばしい限りである。設計者だけではなく、発注者側にそうした意欲とノウハウを積極的に求める気運が満ちみちてきた証拠である。この動きをさらに、すそ野を拡げたい。そのためには、良き推進役をはたす人物が必要となる。

昭和54年の第一期ラッシュの火付け役を務めたのは、岐阜高専で教鞭をとっておられる宇都宮新氏である。「岐阜県口腔保健衛生センター構想設計競技」という二段階のオープン・コンペが発端となって、その後、愛知県、名古屋市が続ぞくと公開設計競技の実施に踏み切ったのである。

「口腔保健衛生センター」の場合、主催者は地方自治体ではなく県の歯科医師会である。ここに意義があった。いわば、民間のプロフェッショナル・アソシエートの良識ある決断が、行政に先行して行動し、逆にその波紋の大きさが地方行政の上層部をゆり動かしたということになる。

宇都宮氏は最初に話があった時点で、引き受ける条件として一年間の〝勉強会〟を、のんでもらったという。そして、その期間、精力的にオーナー側のコンペ認識を高めるために動いた。その熱意が、各会員につたわって大きな盛り上がりになったと、あとで述懐しておられる。

最近では、日本建築家協会の関東支部や東海支部が仲介役を積極的にはたす事例が出てきているが、正当な地域オープン・コンペ時代に入ったというのが実感である。そして、この動きを定着させる最大の要因は、結果として「何が出来たのか…」の一言で終わってしまうのだ。

〝コンペでなければ、生まれない〟建築を生み出さなければならない責務を、公開設計競技というのは企画側、審査員会、応募者という三者が、〝社会〟に対して担っているのだ。

（うしやま　つとむ　名城大学講師・ウシヤマ設計研究室主宰）

ここらでゆっくり、手間ヒマかけて…

瀧　光夫

〔設問－２〕にこたえて

万国博・EXPO'70の準備をしていたのが、ほぼ20年前。お祭り広場の丹下先生・磯崎新氏はじめみなさん、相変わらず、というかいやますますご活躍の様子である。なんだか20年も経った気がしない。この分だと、むこう10年もすぐにすぎるにちがいない。

これまでもこの先も当分大切な言葉は、いろんな意味で「自然」……。だと思う。なんとなく不自然・反自然なことがなくならない、というかむしろ増えている気がする。

原発事故のように技術の進歩が、かえって生活をおびやかす例はこの際おくとしても、超高層をはじめ、ぼう大な量のビルや土木構造物をつくったわりには都市の生活環境はよくなっていない。少なくとも総体として美しくない。パリのセーヌ河、ロンドンのテームズ河の上に高速道路をつけるようなことをしては都市景観も何もあったものではない。

田園は過疎化して自然荒廃がすすみ、どこへ行っても広告看板ばかりが目に入る。山紫水明の瑞穂の国に、緑化運動がさけばれる。自然とのつき合い方がどこかで、いやいろんなところでマチがっているのである。

設計の分野でも、「新耐震」とかでコンピューターがはじき出す構造寸法は、直観力によれば明らかに不合理・不自然な場合があるし、消防法のために実質的には全く無意味な設備をとりつけることなどもおこっている。効率一点ばりの設計にうんざりしているのに、機械をつかってさらに設計を合理化しようというのもどうかと思う。

いろんな人のいろんな研究や理論、あるいはその法制化が、合理・効率のみにむけられる結果として、はなはだ不合理で不自然で住みにくい環境がつくられている面がある。

月まで行ける技術があるのだから、大ていのことは出来る時代。ここらでゆっくり、じっくり手間ヒマかけて（超高層などつくらずに）、かつての日本の都市や建築や庭が世界に対比してもっていた質とユニークさの現代版なり未来型なりをさぐる方にむかうべきではなかろうか。

その意味で、キーワードは「感性」、「美意識」、「直観力」あるいは「ゆとり」……。とおきかえてみてもよい。

（たき　みつお　建築家）

今を考えつつ未来をさぐる

山本良介

設問1

日本の生活様式、いろいろの祭事、あるいはしきたりがいつの間にか滅びゆく現代生活の中で、都市も街も個の住居も、すさまじい限りで変貌してしまった。日本の都市や街はどこへゆこうとするのか想像しようにも想像しようのない現況……。土地価格の予想以上の高騰、放っておけばすさまじい限りで進み、いずれの都市もいずれの街並みもみな一緒になってしまいそうな近代建築の乱立。都市文化の平均化現象は……！

そうした今こそ、行政と民間が一体となってこの都市この街はどうあるべきか問い質す時期にきているように思う。特に石油ショックから今日の円高まで、日本経済のたびたびにわたる経済破壊ショックは、都市環境に大きな影響を与えたわけだが、もし100年なる都市経済、都市生活の大計があったなら、「私達はなにがあってもあの目標に向かって」の指針をめざして、ショックにも十分耐える力になるかもしれない。

まだまだ未来に対し夢と希望を持つ都市住民、地域住民が、次なるショックがこようとも耐える施策「都市の100年計画」を作る時期にきているのではないだろうか、そんなことを思いながら、ここ数年、巨大都市化、平均都市化にさからって、こまめに建築活動を進めているのだが……。

設問2

たった10年の動きを象徴する目先のキーワードなどあるわけがない。

今や、街や人々は将来に何を残そうとするのか。行政はどんなことをめざして地域社会に寄与するのか、都市の姿をどうしようとするのか、産業構造と都市環境をどこへ導くのか。特に伝統と文化の中から生まれたはずの都市にあって、次なる伝統や文化は、あるいは人の心は、より情報化にむりやり染められる現代人、未来人にとって街の心は、生活の心は……。そんなことを考えるのがより重要と、今、ボチボチたのまれた施主と協同で話し、語り、試行錯誤しながら街の点を造りつつある。

ポストモダニズムなど話す前に、ポストアーバンモダニズムを語る時にきているのではないかと思う。すくなくとも建築家は自分のたずさわった建築を誇るのではなく、その建物が、その考えが増殖した時を競ってみては、と考えながら建物造りに精を出しているのだが……。

（やまもと　りょうすけ　建築計画山本良介アトリエ）

この環境の変化に、〝働き〟を出して…

志賀修一

工業中心の社会から情報化社会へ移行してきたこの20年間を振り返り、あらためて〝請負〟とはどういうことかを考えてみました。請負とは、お客様に気持ちよく納得していただき、私達がお世話したサービスやチエを喜んで買っていただくことではないかという思いを強く致します。

お客様の信頼をいただいた私共はお客様と施工作業を担当する協力会社との間に立って、建設がうまくすすむように関係者と心を通わせ、皆様をお世話する、これが最も大切なことであると思います。建設をすすめるために、知識を集めた計画、考えた施工計画をいくら立派にたてても、所詮それはお世話するための立派な道具ともいうべきものであって、これらの計画をたてること、そのことが目的ではないと思います。

お世話するためにはどうすればよいのか、それには、まず調べることから始めなければなりません。お客様がどのようにしてほしいと思われているのか、そのためにどのようにすればよいのか、どんな方法があるのか、例えば用地問題は解決しているのか、許認可は終わっているのか、まわりの人々の思いはどうか、雰囲気は、などなど……。

まず調査を行う。そして、お客様の思いを実現するために関係者が手分けし、確かめ合って、さらに「どうしたら……」を追い求めて調べを続けてゆく。そしてお客様にとって最も有効な形で自分達の〝働き〟を出す（お世話してゆく）ということではないでしょうか？　逆に調べないお世話は大変危い道具作りになると思います。

お世話するための方策として(道具として)、計画を練り、管理をしてゆくわけですが、それがいつの間にか、その事自体をうまくやることが、またいろいろ工夫してゆくことが最終の目的であるかのように思い違いをしていないでしょうか？

これまで「脱工業社会へ」と言われてから、相当な時間がたっています。現実の環境は大きく変わっていますが、私共の心の底に〝モノ〟中心の考えが残っており、なかなか払拭できていないように思います。

「お世話をする」ということが人間本来の〝働き〟であるとあらためて思い直しました。

これまでに述べてきました考えや行動でもって自然を、社会を、街を、そして人の心を、豊かにするために毎日のつとめを果たしたいと思います。

（しが　しゅういち　フジタ工業株式会社大阪支店専務取締役支店長）

都市の活力としての商業施設

藤田邦昭

脱工業の時代を迎えた。すでに大都市では第三次産業は70%台に達している。第二次産業の支援産業の時代は過ぎ、金融、株式、外国為替等を中心に全産業の中軸となっている。

工業出荷額と商業関係（卸、小売、サービス）売上げ額を対比すれば、全国人口30万人以上の都市50の中で、工業出荷額が商業を上廻る都市はわずか11都市のみである。

わが国は国民性として体を動かし、額に汗し、産業製品を生産することによって国力を維持し、都市の振興を図る思想が強く、これは信仰に近いものがある。商業関係はそれらによって成立するものであり、自身が産業にはなり得ない考え方は未だに強く、現在ですらなお各地域で工業団地を造成し、優遇措置を講じ企業誘致を計画しているが、商業に関してはコミュニティ・マート構想等ごく一部で都市に貢献する要素として考えら

れているのみであり、政策としては皆無に近い状況にある。

だが商業活動の活発でない都市に魅力があるのであろうか。巷、繁華街、界わい、この中で都市生活は満たされる。各地での商店街フェアーの百貨店での開催、有名老舗街、有名市場の常設コーナー、尼崎西武つかしんの引き合い（プラント評価）は商業自身が産業として自立することを示している。大阪の観光、神戸の観光、東京の観光で心斎橋、元町、銀座が抜ければどうなるか。女性の海外ツアーはショッピングの旅である。小売業とその構成要素は重要な都市産業で、この単位を移出、輸出も可能である。

商業活動を中心としてまちづくりを行う。住み良く暮らし良く豊かな生活の中心は、商業施設に加えての文化施設・公共公益施設の組み合わせ、交通ネットワークの整備により出来上がる。具体的には、そのような施設のないところには情報も集まらないし、とっておきの先端産業も来ない。この角度がしばしば逆転している場合もある。商業に政策を。まちづくりの中心は商業環境の充実。今大切なことである。

（ふじた　くにあき　株式会社都市問題経営研究所所長）

群居―ゆたかな質感と表現をとりもどすために―

大野勝彦

（設問１）

建築設計がファッション化し、建築家がメディアの下請け化する傾向が強まる一方で、若手を中心とした住宅づくり、町づくりの新しいムーブメントが発生しはじめている。

木造住宅のみなおし、自分の町や地域づくりのみなおし、町づくり運動への参加、コーポラティブ、地域住宅工房づくり、職人ネットワークづくり、自前の部分づくりなどのベーシックな作業がすすめられている。

私達が刊行している雑誌「群居」は、各地のハウジング・ネットワークをめざしており、相互交流もしだいに深まりつつある。またアジアのハウジングサーベイなどもさかんになり、日本＝アジア的なハウジング計画手法づくりの芽がではじめてきたと考えられる。

狂乱再開発と民活におどる東京においても、世田谷や下町グループのように〈町と地域〉にこだわり、町の独自なイメージづくりの準備がはじまっている。

（設問２）〈住宅＝町づくり〉＝〈群居〉

多様化した価値観や地域社会、その一方でネットワーク型の情報社会、国際化のうねりはさらにすすんでいく。

そのために、単純な論理や、表層的なデザイン処理では建築・住宅・町のゆたかな質感を表現することは不可能となりはじめている。

建設省ですすめているホープ計画（地域住宅計画）のように、3,300 余の自治体ごとに、きちんとした社会システムのサーベイをもとに町総体としてのイメージ表現を、住民コンセンサスの上にたって創っていくことが、自立した、そして社会化された建築家像を再構築しうる唯一の道となっていこう。

群居型社会におけるネットワーク型の社会システムの形成は、文明史的な視点からみても、個人・家族・社会の新たなる関係を形成していくものであり、それだけに質の高い、自由な住宅と建築と町とが一体となった表現をとりもどしうる可能性があるからである。

（おおの　かつひこ　大野建築アトリエ所長・工博）

人間社会近代化への「苦悩の時代」

広原盛明

〈１〉

戦後日本は二度にわたる大変動期を経験しようとしています。第１期は60年代から70年代にかけての高度成長期、第２期は80年代から90年代にかけての国際流動期です。

高度成長期におけるもっとも強い印象は、日本の都市があらゆる「成長型都市問題」の舞台になったことです。そして、これらの諸問題に住民運動を通して接したことは、研究者としても得がたい体験でした。今から思うと信じられないようなスピードとスケールでスプロールが拡がり、これに対して後追い的な運動でしか対応できず、理論的先見性を生かした研究を展開できなかったことが残念です。

〈２〉

今後の10年間の第二変動期は、東京を中心として一部の大都市圏が華やかな成長を遂げるものの、その他の都市や農山漁村地域では「衰退型地域問題」が拡大・深化していくものと思われます。第１期の「成長型都市問題」への対応が「土木建築的アプローチ」であったとすれば、第２期への対応は疑いもなく「社会経済的アプローチ」へと移行するでしょう。私たち、建築分野で、都市・地域問題の研究を主として「空間的側面」から行ってきた者は、今後、その抜本的な研究方法論の変革を迫られることでしょう。

それと同時に、「住民運動・冬の時代」の中で、研究も運動と共にあった「ホットな研究」に加えて、歴史的に検討し、国際比較の中で対象と対策を追いかけるという「クールな研究」も必要となってくるでしょう。

いずれにしても、日本の国は経済的には第１期において「農業社会」から「工業社会」へと変化しましたが、その主体である人間社会は「農民社会」のままでとどまっていて、「勤労者社会」に移行しきれなかったところに、我が国の前近代性があるというべきでしょう。その意味で20世紀の残りは、名実ともに我が国の近代化が進行する「苦悩の時代」となるでしょう。

（ひろはら　もりあき　京都府立大学教授）

暮らしの中の心痛むもの

田中恒子

設問１

今、日本は世界一お金持ちの国だそうです。国民の大多数は納得がいかない思いでしょうし、私もです。

ここ２年ほど、民間木造アパートが林立する地域の再生計画に参加しました。昭和30年代に形成されたこの地域は内部的に

は再生能力をもっていません。空家になった住戸の窓は壊され、中学生の溜まり場になっています。家賃の安さ故に、ひとり暮らし老人が棄老された形で住んでいます。高齢期こそ近隣の人々とのつきあいが大切であるのに、一日中誰との会話もなく、ただテレビに向きあっています。面としてのまちがさびれたままにされている状態は、人間が大切にされていないと心痛みます。

一方、「高級」分譲住宅地と称される地域での、建蔽率いっぱいに建てられた住宅群もまた心痛みます。数寄屋風のすぐ隣にアーリーアメリカン調の家が建ち、その隣にR.C.の陸屋根の家が建つ。一つひとつのデザインはそれなりに完成されていても、街並みとして見たときには、統一感のない貧しい眺めです。

世界一お金持ちの国日本の住宅と住宅地に、豊かなモデルがないことが、一番印象的なことです。

設問2

「労働時間短縮」と「性別役割分担意識（男は仕事、女は家事・育児）の克服」です。

世界に冠たる長時間労働国日本は、あらゆる意味（国際的批判、失業者増大の中でワーク・シェアリングへの指向、父親不在による家庭内矛盾の激化、労働者の肉体的・精神的健康の阻害）において労働時間短縮に向かわざるをえないでしょう。もし、残業がないという状態になれば、家庭生活のあり方は大幅に変わるでしょう。当然、住宅に対しても地域施設（図書館、スポーツ施設、集会所等）に対しても多くの要求が出てくると考えられます。

また、今や国際的な動きである性別役割分担の克服が実現するならば、男性の中に秘められていた豊かな各種の能力が花開くでしょう。住宅を建てるとき、女性ばかりが要求を述べるのは出しゃばり過ぎると批判する方がありますが、男性に要求がないことの方が問題だと考えています。男性も結婚の意味、家庭づくりの意味、その中での自分の果たすべき役割を考えるなら、当然、住宅のあり方についての要求が出てくるでしょう。

（たなか　つねこ　奈良教育大学助教授）

「アンケート」

田中　喬

アンケートを与えられて、その大きな質問に正面から答えられそうもない。平生研究室に閉じ籠っていて、実社会の出来事にうとい自分を痛感させられる。時たま実社会のことに目を向けるとすれば、せいぜい斜視に見ることしか出来ない。その癖で、ここでも斜視に答えることになりそうだが、お許し願いたい。

――送られて来た一枚の紙面のうちに答えの手がかりを求めるほかはない。アンケートの文面をあらためて読みかえしてみる。このアンケートは、どうやらいわゆる識者に送られたのではないかと思う。公衆への質問ではないようだ。後者の場合、普通の仕方としては、多数の回答を回収して、それを数字として処理し、その数値についての何らかの解釈を加えるのであろう。ここでの場合は、そうではない取り扱いがされるのかとも想像される。回収された回答は、いずれ誌上に掲載されるだろうが、その場合、多分、三分の一自分の、多視点からの多様な意見が羅列されることになるのだろう。イロハ順か、ＡＢＣ順か、ひょっとしたら原稿到着順にしたがっての配列になるのだろうか。それぞれの貴重な意見が、各人各様の意見が並ぶことになるのだろう。「あなたの」「印象」は、「あなたの」「考え」はと聞かれているからである。私たち回答者も、日頃多忙であるからあまり立ちどまって考えず、アンケートに気軽に答えるだろう。思いつくままに、それらは自分の、自分一人の独自の意見として述べられる。西洋の古い言葉を使っていえば、臆見と訳されるドクサとしてであろう。あるいは、思いつき的なものではなくドクサが長年にもわたって凝り固まった信念としてなのかもしれない。編集にあたっては、統計的処理のアンケートの場合のように、今回もそれらを通しての解釈が思考されて述べられるのであろうか。(そうであって欲しいと思う）あるいは、識者の意見だからとそれらを尊重して、そのまま掲載するだけになるのだろうか。解釈をし、解釈を強要するのは、それぞれ識者に、読者に僭越だというようなひかえ目な態度で。解釈は、読者一人一人に任せればよい。通しての解釈どころか、それらのうちの一項にでも読者が立ちどまれば僥倖であるというわけである。が、読者もまた多忙である。仕事のあい間に、雑誌を斜め読みして、しばらくはそうした意見とかかわりあうだろうが、すぐに紙面を閉じて雑誌を抛り出し、再度仕事に忙殺されるであろう。とすれば、読者に任せてばかりいられない。ここでは、アンケートは一種の情報であって、情報はもともと大量に生産され、消費されるものなのであろう。それにしても、断片の洪水は沈澱せず私たちを疲労させるだけであり、そこでは私たちは拡散するほかはない。各人各様の思いなしの先のような順による配列は、唐突ないい方だが、いわばミニ百科辞典的な整理の仕方であろう。百科辞典もＡＢＣ順に断片の項目が並べられたものであるからである。それらの項目相互に内的な関連はない。

――私たちは、現在、建築・都市の状況をも含めて、こうした世界のうちにいるのではなかろうか。一言にそれは、「乖離」の世界であるといいえようか。「乖離」は、端的に、人間存在の尊厳のために「全体」に斎らされなければならないであろう。全体「とは何か」――

この小文のために千字の枠を与えられた。すでにその字数をこえている。しかも、多忙にかまけて、光沢のない言葉での雑駁な運びの文章で。再度、お許しをいただきたい。千字文という課せられた形式の律を守りえぬこの一文もまた、大袈裟にいえば、現代の一面を「象徴」するものであろうか。自戒しなければならない。

（たなか　たかし　京都大学教養部助教授）

失われた心象風景と地域性

櫻井敏雄

設問1

一般的に風景とは、経験の無限の連続性の上になりたっている。個人の心象風景は、その人の存命中に失われることはないが、過去20年間にわれわれは経済性に立脚した豊かな生活を求めるために、風景を構成する建築と空間の多くを売った。過去

の空間の多くが、合理的生活のために風景から消えた。その風景はしばしば地域性を形成し、都市や町にとっての心象風景であった。都市が発展と衰退を繰り返したことは、歴史の教えるところであるが、都市を再生させるはずの外科的手術が、経済性を追求する名のもとに行われた破壊であることの実例を私達は知っている。風景とは、都市と住人の間に実存するものである。経済という合理性の中で、私達は格調高い景観文化や魅力を失ってしまった。同じような駅、同じようなショッピングモール……。

技術を経済や死の目的のためにではなく、生の目的に従わせることこそ、21世紀の大きな課題であろう。この意味で、G・エクボが『The Landscape We See』(景観論)の中で、「高度の文明というものはすべての人々に、経済的かつ文化的な豊かさと安全を与える任務に奉仕することであろう。とは言え、そのような豊かさと安全が可能になる唯一の背景こそ自然的環境なのである」としたことは注目すべきである。

技術を背景として都市は急速に成長し、営利主義的無秩序状態の中で、かつての自然の有機的形態に、伝統的かつ歴史的に結びついていた地域社会は失われ、高さをます建築、騒がしさをます照明と広告、激しさをます交通混雑のなかで、人間性を失いはじめ、歴史がいまだ経験しなかったジャングルの中で、歴史的生活空間や神社・寺院・教会ないしはその風景景観は失われたのである。

このような状況の中で、これから建築家は何をなすべきか。土地に対する投機的価値の高まる中で、多くの建築や空間は柔軟性を失った。創造的な空間が生まれにくい以上、私達は有機的な建築や空間を失わないようにすることが急務であろう。

地球の資源が有限であるように、長年月をかけて成立してきた有機的な空間もまた有限である。その空間を急速なテンポの中で、利便さととりかえる前に、われわれは何をなすべきか、この20年の時空が教えてくれるだろう。

(さくらい　としお　近畿大学理工学部建築学科助教授・工博)

市民参加でマイナスデザインからの脱却を

恒成一訓

設問1

1966年、DAS(総合デザイナー協会)の広報誌に、私は次のようなことを書いた。都市部から郊外へと住宅がスプロールしてゆく現象の中で、建売住宅の乱立を評して、マイナスのデザインではないかと言ったのである。つまりその様相は、ニュー吉原赤線地帯に踏み込んだ感じではないかと思われるほど、低俗なデザインが横行していたことを評しての感想なのである。

いま大阪を眺めてみると、徐々に改良され、御堂筋や市庁舎あたりの景観は、世界的レベルとまで言われるようになった。また個々の家や事務所ビル・商店建築などは、経済の向上を反映して、20年前に比べれば、よほどましになった感じがある。

しかしそれは個々の家や会社であって、町並み、街全体に目を転じれば、依然としてマイナスデザインと評したいところが多いのである。

人々の意識はまだ、せいぜい自分の家をよくする範囲内にとどまり、その外には向けられていないのが現状であると思う。それがなければ、行政の力だけでは都市美化は不可能である。そこの限界に来ていると思う。

設問2

これからの都市問題を考えるとき、キメテになる鍵は、「市民参加」であろう。

中世ドイツの自由都市が市民のものであった故に、今日に残るあの美しい中世都市を創りあげたことを思えば、われわれ市民も、もっと自分の町という自治意識と愛着をもち、美しい町をつくるのは自分だという自覚に立って、積極的に都市づくりに参加する気運が澎湃と起こるのでなければ、大阪の街の未来は、乱雑さを続けるだけである。

実際、都市の問題は、行政や予算の力だけではどうにもならない。何よりもそこに住む主人公である住民自身の問題なのである。行政指導や法制だけでなく、そうした意識を住民の内側からどうして引き出し、育てるか、それが鍵であると思う。

私はかねてから中之島一帯を親水公園にすることを夢み、図に描いたりしている。たとえ実現しなくても、夢みるのは楽しいし、生き甲斐ともなる。市民の人々も、自分の住む町についてもっと夢をみることをおすすめしたい。そして行政側は夢だと馬鹿にせずに積極的に、夢に耳を傾けてほしい。アーチストと行政と、住民(企業を含む)が一体となって、はじめて都市づくりが始まる。

(つねなり　かずのり　都市計画家・つねなりすたじお主宰)

日常生活から文化が生み出されるために

喜多俊之

この20年間は、戦後の復興とめざましい経済発展を土台として、都市環境や住居の整備をするチャンスであった。しかし、今やその都市は劣悪な姿となり、物置きと化した住居空間という、市民が文化的な生活をするにはほど遠い情況である。わが国のこの問題は、国際的に見ても、特筆されるべきこととなっている。

四季折々の美しい自然を持ち、心豊かな暮らしを築いていった祖先達の知恵の積み重ねは、現代の私達の生活に必要不可欠なものであるが、過去の文化遺産は次々にわれわれの目の前から姿を消し、その跡にはまったくの新興地と変わらない町の姿が見られるようになった。

同じ敗戦の運命にあった西ドイツや、イタリアは、どうであろうか。美しく整備された国土、都市や田舎の風景、木のない所に木を植え、戦火に遭った建物を復元させ、海岸線のほとんどは市民のリゾート地として整えられた。住宅の内部は、サロンとなって家族や人々の暮らしの源となっている。

ヨーロッパは、わが国より一足先に長い低成長をくぐってきた。その間に、各プロフェッショナルも、着実に市民の文化的な生活を基本ターゲットに、国土の整備、都市や住居の整備を計ったのであった。その結果、どのような地方へ行っても美しいその地方なりの風情を残し、特色を活かした町づくり、環境づくりが進められている。

自然に手を加えることにより、もっと自然らしさを創り出す

ことは、日本庭園や、生け花の理念とあい通じるところがある。一方、自然のままの山や谷であったときと比べて、新興住宅地やその付近といえば、見るも無残な姿となり、そうして全国的に土地開発という経済中心の住宅が所狭しと建てられた。それは、土地が高いから仕方がないということでは済まされない状況となった。

住居は家族の額であり、人格形成の基本を作るものである。生活におけるマナー、教育、対話、感情、それら社会人としての基本を育むものである。ところが、換気扇を止めるとカビだらけになる風呂場や台所、一日中騒音に悩まされる住居、物に占拠されてしまいベランダにまではみ出した物がうず高く積まれている住居といった、住む者の立場が考えられていない建物が氾濫しているのがわが国の現状である。







国際化が進むわが国には、これまでの量産、量販といったものから、クォリティや生活ソフトといったものが反映された物づくりや、良い感覚的な物が求められる。これからの10年は、文化やそれらのクォリティがまさに日常の生活から生み出されることを考え、環境問題、住宅の整備を急ぐ必要がある。

（きた　としゆき　インテリアデザイナー・I.D.Kデザイン研究所主宰）

高齢化社会とストックの充実

右田紀久恵

高齢化社会の到来が予想を上回って早いと言われている。他方、1986年の１人当たりＧＮＰが世界一になる見通しが強まり、世界最大の貿易黒字と〝金あまり〟が伝えられる反面、必ずしも生活実感としての「豊かさ」に確たるものがあるわけではない。つまり、地域社会での〝くらし〟に安定感を欠いているのである。これからの10年は、これまでの〝くらし〟の不安感に、多面的な方法で対応してゆくべきだと考える。とりわけ〝くらし〟の豊かさをＧＮＰや経済効率のみではかるのではなく、〝ストックの充実〟を基本にすえるべきであろう。ストックとしての住宅・生活環境・都市環境の整備が叫ばれて以来、すでに長い。しかし、他の先進諸国とつねに比較されるのが、わが国におけるこれら一連のストックとしての社会的資本の水準の低さである。

高齢者の〝くらし〟の豊かさは住宅・生活環境・都市環境の整備と、社会保障（社会福祉）の充実にあると言っても過言ではない。社会福祉政策もこれまでの施設中心主義から地域福祉・在宅福祉へと、その力点が移りつつある。しかし地域福祉・在宅福祉は、その基礎的条件としての住宅・生活環境・共同利用施設が欠落していては成り立ち得ない。地域福祉・在宅福祉はノーマライゼーションの理念に立脚し、その多くをイギリスのコミュニティ・ケアに学ぶとされているが、いまだ内実化されたものではない。

ストックの充実には、一方で上にいうハードウェアの側面と、地域福祉・在宅福祉に含まれるところのソフトウェアの側面が、車の両輪として社会的に蓄積されなければならない。つまり、物的資産と文化的資産の総体が社会的に定着することによって、はじめて21世紀における先進国に名を連ねることができよう。しかし、このようなストックの充実には、時間と計画と英知が、さらに加えて国民一人一人の精神的自立が不可欠である。個人的努力と社会的解決の重要性を認識し、政策的誘導から距離をおくことの可能な精神的自立が必要である。その意味でもストックの充実に文化的資産をふくめたのである。「民活」路線による国公有地の売却などが、結果的には〝その場しのぎ〟で高くつき、〝くらし〟の豊かさの象徴としての〝ストックの充実〟に逆行することを、これからの10年でいかにくい止められるであろうか。一人一人の精神的自立に、かかっているように思われる。

（うだ　きくえ　大阪府立大学教授〈社会福祉学部長〉・Ph. D. ）

セカンド東京になった大阪

宮本憲一

〈1〉

この20年間の前半は、都市をいかに経済的に効率に利用するかという「下司」の根性で政策がすすめられた結果、日本の大都市圏は独自性を失い、無国籍で非文化的な事務所空間にかわってしまった。この間の成果は、住民の世論と運動でＳＯx の

極端な大気汚染や水汚染の一部を解決したことであろう。たとえば大阪市ではＳＯx の環境管理基準を1966年、はじめて１日平均0.1ppm（現在の基準の25倍の高濃度）ときめて規制をはじめたが、世論の進展によって次々と基準はきびしくなった。この結果、当時西淀川区の濃度0.189ppm（最高濃度0.321ppm）という地獄の様相をようやく脱することができた。しかし、自然や街なみの保全までは、行政の目は全くとどかなかった。大阪湾は埋めたてられ、古い街なみは片はしから破壊され、堀や池は道路と宅地にかわってしまった。私たちの反対にもかかわらず、高速道路が市内を横断し、中之島と淀川の景観はなくなってしまった。

その後の10年間、ようやく、アメニティに行政も目をむけるようになった。鳩のふんで汚れていた水晶橋に化粧をしたり、中之島の周辺を市民が散歩できるような整備がすすみはじめた。府も市も緑の保全をこんご10年の基本戦略というようになった。しかし、本質的な転換は全くすすんでいない。関一が再生した大阪城の景観をぶちこわすようにツインビルが立ち、都心のマンハッタンナイズがすすんでいる。都市の活力ともいうべき大学を郊外へ分散させ都心の文化的空洞化がすすんでいる。臨海部の工業地帯は放棄されている。

この20年間をふりかえってみると、日本の大都市とくに大阪圏には独自の目標がなく、風格のない経済空間をなしくずしにつくってきたにすぎないような気がする。

〈2〉

国際化とそれにともなう社会的費用の発生である。国際化は異種の文化の交流であって、それがうまくいくためには、大きな社会的コスト（たとえば福祉や教育）が必要となることは、ニューヨーク市をみれば明らかであろう。社会的コストは自治体の財政危機あるいは新しい都市問題となるであろうが、それを予測し、その負担にたえ、かつ、その都市の市民のアメニティを高めうる地域が、生きのこっていくのではないか。

（みやもと　けんいち　大阪市立大学商学部教授）

なりふり構う都市づくりを

木津川　計

〔設問１〕にお答えします。

大阪の文化的グレードが転落いたしました。いつの時代もそうですが、歴史的な時代には必ず〝期待される人間像〟が生産されるのです。

〝15年戦争〟の時代は〝肉弾三勇士〟が賞揚されました。〝滅私奉公〟が時代の精神でした。高度経済成長期には〝モーレツ人間〟が喧伝され、〝ど根性〟がもてはやされました。石油ショックの大混乱から脱し切るおよそ５年間は〝省エネ時代〟と呼ばれ、〝どケチ〟であることが期待されたのです。

大阪の文化、あるいは都市のグレードにとっての不幸は、高度経済成長期と石油ショックの歴史的時代に〝文化のテロル〟を浴びせられたことでした。すなわち、大阪人が〝ど根性〟を持った〝モーレツ人間〟の典型とされ、〝省エネ時代〟の〝どケチ〟人間には大日本どケチ教教祖が全面に押し出されたのでした。

彼らの活躍が小説やテレビドラマや舞台劇、映画や歌謡曲の領域で展開されればされるほど、大阪や大阪人のイメージが悪くなり、文化的グレードが転落するのでした。

大阪はこのテロルで蒙った深傷を癒していないのです。本来なら、文化的グレードアップにつながるはずの、たとえば、国立民族学博物館、国立文楽劇場、大阪城国際文化スポーツホール、府立国際児童文学館…、などのすぐれた施設も、ただ〈在る〉というだけの捉えられ方に思えるのです。残念なことです。

残念といえば、大阪城を見下ろすツインビルの誕生も大阪人の成金趣味を人びとの胸に焼きつけました。そこへこんどは大阪府庁が超高層ビルに建て替えられる、というのです。

歴史的景観エリアを殺風景（風景を殺すという意味です）にしては、大阪人の文化性が問われましょう。

なりふり構わずの都市開発はいけません。なりふり構う含羞の美学、そのありなしがこれからは検証されねばなりません。かつて大阪は含羞都市であった、とする私の目に今も映るのは成金都市の像ばかりです。成金が地上で尊敬されることがないように、成金都市も尊敬されはしないのです。

恥じらいを心得ながら合理的に開発する、そんなポリシーを大阪は打ち立てねばと思います。

（きづがわ　けい　立命館大学教授、『上方芸能』編集長）

失われた汀線

長尾義三

この20年、もっとも印象の深いことといえば、大都市臨海部の汀線の喪失である。大阪湾でいえば、河口部周辺を含めて全海岸線延長456kmのうち347kmと、77%が汀線を失っている。

元来、水陸の境は干潟、砂浜、岩礁で構成され、波が砕け、海洋のエネルギーの消散が行われる場である。

戦後から高度成長期に入るに及んで、海辺付近の土地の評価も高まり、また、河川上流部におけるダムの工事、治山治水のための山腹工事が行われるとともに、急激に海浜の侵食作用が進むに及んで、コンクリート系の護岸工事が行われるようになった。もっとも、昔から干拓のための石積護岸は河口部周辺ではよく行われていた。

しかし、この20年、人間の生産・生活活動の都合と、侵食・高波・高潮から人命を守ることから、より背の高い強固な堤防や護岸がつくられたのである。加えて、大型船舶のけい船用の岸壁や、装置産業の臨海工場の周辺の護岸も、大水深の埋立地を囲うものとして大規模に行われるようになっていったのである。

大阪湾の湾奥部では、わずかに、神戸市の須磨海岸、大阪府の二色浜を残すのみという状態になってしまっている。

こうしたことは一概に悪いといえるものではない。こうした犠牲のうえで、鉄鋼・石油化学を主軸とする日本産業の基盤が確立し、安い原料で、加工して貿易黒字の今日の日本がある。

いまこうして、消失した汀線を思い、凋落した大規模な装置産業の荒廃した工場と、前面に汚れた水面をみるとき、感無量である。

元来、汀線付近の水面は河口部と同様汽水域と称され、生態

学からみても、多くの生物の種の保存から重要な場とされている。また引き潮、あげ潮の作用で、汀線は水質自体浄化する能力すら持っているのである。

いま、富める国民生活を営むようになった。だからといって、水辺にゆとりを求めてといって、安易に都市機能を進出させてよいものでもない。（ながお　よしみ　日本大学理工学部教授・工学博士）

都市と緑のアメニティ

—1990年花博をたんなるイベントに終わらせてはならない—

庄谷邦幸

これからの10年間に、大阪都市圏では関西国際空港や関西文化学術研究都市など48のプロジェクトや、国際花と緑の博覧会など12のイベントが実施に移されようとしている。まさに目白押しの状況である。それらの中で、大阪の都市問題と関係の深い「国際花と緑の博覧会」について考えてみよう。

1990年に大阪市鶴見緑地公園で開催される予定の「花博」は、それ自体歓迎すべき事業である。緑の少ない大阪で、この機会に花と緑に象徴される自然と生命について反省し、また都市と緑との関係についても再検討するよき契機となろう。

ところが、「花博」の基本構想、基本方針、事業内容を読むと、不安と危惧の念が生じてくる。例えば、その「基本方針」では「花と緑に関する技術、自然と人工を調和させる技術及び生命科学につながる産業技術の最新の成果や可能性を展示する」方向をうちだしている。そのために「大胆な実験」、「現代の最高の科学技術」、「新しい広場の造形」が企画されている。このままでいくと、これまでの日本での博覧会のように「花と緑」と調和しない巨大なパビリオンの建設と、バイオインダストリーのコンペの様相を呈しないと誰が保証できるだろうか。科学万博つくば'85のテーマも「人間・居住・環境と科学技術」という崇高なテーマであった。このテーマに対し真正面から取り組み特色ある展開をしたパビリオンは外国館の中にあったが、日本の民間のパビリオンの多くは「世界初の」、「世界最大」というキャッチフレーズで新しい映像技術を競い合う映像オリンピックの様相を呈していたことを想起すべきである。

1990年の大阪の「花博」は単なるイベントとしてではなく、都市政策、とくに緑化を軸とした都市環境整備の総合事業の一環としてとらえ、大阪における緑の回復の出発点として位置づけるべきである。そのように考えるならば、鶴見緑地公園に180日間に2,000万人を動員する計画は過大であり、修正すべきである。1982年のオランダ・アムステルダムでの国際花と博覧会、1983年の西独ミュンヘンでの国際造園博覧会、1984年の英国リバプールの国際庭園博覧会でも330～460万人の入場数であった。日本では、一たん目標入場者数が発表されると、その目標を達成したか否か、博覧会協会の入場料主体の収支が黒字か赤字かで博覧会の成否を論じる風潮があるが、それは本末転倒であり、目的と手段を間違えているものといえよう。

1990年の花博は、日本の社会設計、生活設計における花と緑の意義を再確認し、市民や府民のアメニティの水準をたかめるため、緑の回復の出発点として位置づけよう。20世紀末における都市計画者、企業経営者の思想や哲学が問われている事業である。（しょうや　くにゆき　桃山学院大学経済学部教授）

これからの建築・まちづくりのあり方を求めて —21のアンケート回答より—

このアンケートは、いわゆる統計的処理を施すものではなく、過去、現在、未来にわたる建築、まち、くらし、社会を考える読者の視座を形成するため、各界の有識者に問いかけ、自由に回答していただく形式とした。したがってこの場合、回答者をどのような基準で選定し、結果をどのようにプレゼンテーションするのかが、ポイントになった。

アンケートの問題意識に呼応し、回答者は、編集委員会の独断と偏見でもって選定した。紙面が許せば、さらに広い分野でより多くの人々に参加していただきたかった。

プレゼンテーションについては、順不同で、エッセイ風にまとめることにした。したがって、文体その他、回答者の原文についてはできるだけ手を加えず、持ち味を生かすよう努めたが、おのおのについてポイントになるべきタイトルを冠してみた。

アンケートの（設問1）（設問2）に対し、全く区分せずに回答された方、いずれか一方または両方と、さまざまであったが、その視点については専門領域を背景にした含蓄ある意見が多かった。

（設問1）の過去の動向分析、認識については、わが国全体の動きとして、戦後復興を経た高度経済成長、その後の経済ショックを経て、低成長安定時代を迎え、来るべき高齢化社会を見ながら、情報化社会、国際化社会へ突入し、高付加価値の時代にあるといえるだろうか。この中で特に従来の合理性、経済性優先の建築・都市づくりの結果、かつてわが国が保持していた〝よさ〟を失ったばかりか、都市環境は不合理、不自然であり、住みにくく、美しくないというようなコメントが目立った。この都市環境、住環境の整備の立ち遅れとともに、文化的状況として、とりわけ関西、大阪圏に着目し、現在多数のイベントやプロジェクトが計画され、進展されているにもかかわらず、独自の都市理念に根ざしたアメニティ創造のための方策に欠けていることが指摘されている。大阪湾というウォーターフロントにゆとりがなく、東京、ニューヨークという他の大都市構造のコピーを求め、平均化、巨大化へトレンドし、歴史的景観や心象風景、文化を喪失したり、大学の郊外分散もみられ文化的空洞化現象もあるという指摘である。

（設問2）の現在から未来へのベクトルの中で意識される〝あるべき姿〟について、いくつかの貴重な提案をいただいた。これまでの〝もの〟文明から〝こころ〟や〝サービス〟の文明へ転換する中で、やはり、大きな流れをリードする都市経済や都市生活のマスタープランが必要であること。自然や地域の特性を大切に、多様化した価値観や感性、美意識に呼応するゆとりある社会システムの形成をめざし、成熟都市としての生活環境の整備を図ること。住民一人ひとりが精神的に自立し、自らの自治意識と愛着をもちながら、建築家をはじめ行政その他関係者と一体的に夢づくりに参画できること。そのようなムーブメントの中に着実に地域に密着した建築やまちのイメージづくりやデザイン活動もあること等々。さらに、高齢化社会へ向けての福祉環境の整備についても同様に、従来のストックを大切にしながら、労働や性別意識の社会状況の変容をふまえて、ゆとりある生活環境の実現に向けて、努力してゆくことや、まちづくりの中心をになう商業環境の充実を新たな都市の魅力づくりの方策として展開することも提案されている。

来るべき時代の建築やまちづくりのあり方については、まだまだ多くの視点からの検証を必要とするであろう。今後とも〝日本建築協会〟、〝建築と社会〟という舞台で、建築やまちづくりのロマンが展開されることを期待したい。

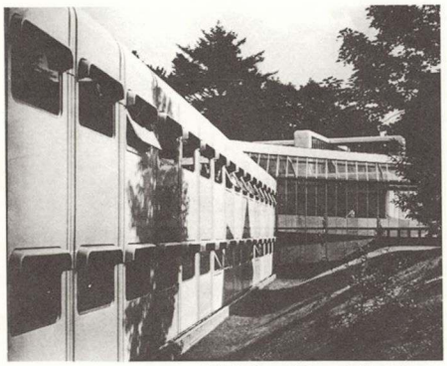
（田中直人／編集委員・神戸市）

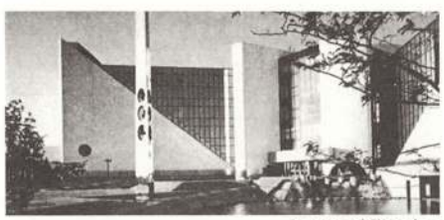
最近二〇年間の年表―建築界と建築協会の動き 1967～1986―

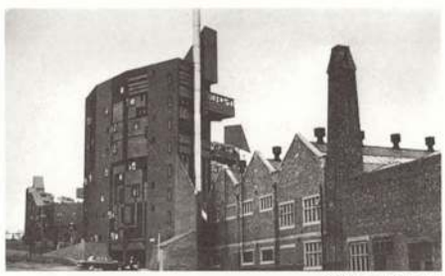
創立50周年記念号（昭和42年３月号）に1910年～1966年の建築界と日本建築協会50年の歩みが年表として収録されているので、今回は、その後の20年間の動きをまとめてみた。

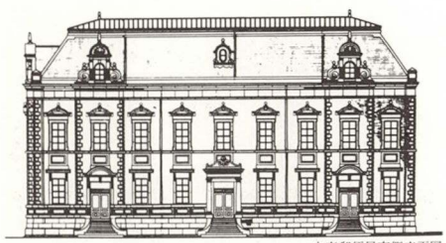
作成担当委員：
石田潤一郎(京都大学)／安田孝(大阪大学)
佐野潤一(摂南大学)／田中直人(神戸市)
高田佳子(アートランド)／平岡博(大阪市)
藤田治彦(京都工芸繊維大学)

	昭和42（1967）	昭和43（1968）
社会の動き	• 山陽新幹線の建設始まる • 国鉄、23年後の新幹線網のビジョン発表 • ユニバーシアード東京大会 • 総人口１億突破 • 中東戦争開始 • モントリオール万国博	• 「第五次道路整備５ヶ年計画」閣議決定 • 川端康成ノーベル賞受賞 • ３億円強奪事件 • ＧＮＰ西側諸国第２位 • えびの地震、十勝沖地震 • 水俣病、公害病に認定 • メキシコオリンピック
トレンド	ヒッピー、フーテン族 グループサウンズ メタボリズム メガストラクチュア 住宅の工業化	学園紛争 サイケデリック、アングラ 第二次マンションブーム 超高層ビルの曙 都市開発制度再編
都市計画と建築	• 下水道法の一元化 • 公害対策基本法公布施行 • 下水道整備５ヶ年計画 • 住宅建設工業化の長期構想（建設省） • 住宅公団、ＰＣ中層4000戸発注 • 特定目的（身障世帯向）公営住宅建設開始 • 宅地開発指導要綱（兵庫県川西市） • 大阪開港100年祭 • 京都において、前年公布の古都保存法による歴史的風土保存区域の指定 • 国道１号線東山バイパス開通 • 宝塚カトリック教会（村野藤吾） • 新宿西口広場（坂倉建築研究所） • 山梨文化会館（丹下健三） • 大津市庁舎（佐藤武夫） • 白の家（篠原一男） • 宍戸邸（鈴木恂） • 山形ハワイドリームランド（黒川紀章） • 山荘・もうびいでいっく（宮脇檀） • 『行動建築論』（黒川紀章） • 東京海上ビルをめぐって、丸ノ内美観論争起こる	• 新都市計画法公布 • 大気汚染防止法公布（12月施行） • 騒音規制法制定（12月施行） • 住宅宅地審議会発足 • 住宅問題懇談会・土地問題懇談会設置（建設省） • 工業標準化推進５ヵ年計画実施決定(工業技術院) • 神戸高速鉄道開通 • 阪神高速道路守口線開通 • 地下鉄（東梅田～天王寺間）全通 • 清水焼団地完成 • 静岡新聞放送ビル（丹下） • 福岡相互銀行大分支店（磯崎新） • 慶松幼稚園（ＲＡＳ） • 鹿島建設本社ビル（鹿島建設） • 武蔵野美大（芦原義信） • 霞が関ビル（鹿島建設） • 『都市住宅』創刊 • 『日本の都市空間』（都市デザイン研究体） • 『建築に何が可能か』（原広司） • 『広場の造形』（Ｃ.ジッテ）  武蔵野美術大学本館
海外情報	• クイーンズ・カレッジ（Ｊ.スターリング） • ハイアット・リージェンシー・ホテル（ジョン・ポートマン） • プラス・ボナヴェンチュール（アフレック他） • アビタ'67（モシェ・サフデイ） • ナイツ・オブ・コロンバス・タワー(ローチ＋ディンケル)	• セント・マリーズ教会（ダグラス・カーディナル） • 霊地教会（ゴットフリート・ベーム） • ベルリン国立近代美術館（ミース・ファン・デル・ローエ） • エヴァーソン美術館（Ｉ.Ｍ.ペイ） • ウルヴィーノ大学（ジャンカルロ・デ・カルロ） • アンドリュー・メルヴィル・ホール（Ｊ・スターリング）
日本建築協会の動き	• 『風力係数』発刊 • 創立50周年記念事業―モントリオール万博視察団派遣／記念講演会「モントリオール万博視察報告会」 • デザインコンクール「大阪城公園に建つ休憩所」（応募数37点・入選〈安藤忠雄案〉） • よろず相談住宅展覧会（阪神百貨店） • 見学会―大阪市街地改造第１棟／千里高層住宅団地 • 工高生デザインコンクール(第13回)：テーマ〈博覧会場内に建つ公衆休憩所〉以下工高生コンペと略称 • 「青年技術者(第17回)」特集、以下毎年続行	• 十勝沖地震の調査報告とＲＣ構造耐震対策講演会 • よろず相談住宅展覧会（阪神百貨店） • 見学会―大阪商工会議所ビル／住宅公団森之宮市街地住宅と大阪市清掃局森之宮工場 • 『鉄骨のデザイン』出版 • 「建築データシート」、50周年記念事業の一環で「建築と社会」付録として、３月号で第１回刊行・配付 • 工高生コンペ〈日本万国博覧会モノレール・ステーション〉

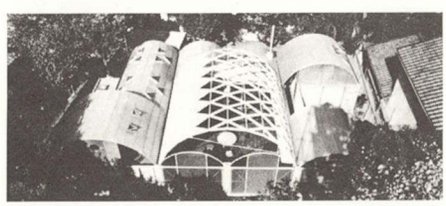
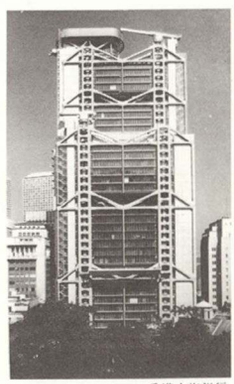
	昭和44（1969）	昭和45（1970）	昭和46（1971）
社会の動き	• 新全国総合開発計画策定 • 東名高速道路開通 • 初の「公害白書」発表 • シースルールック、パンタロン、タートルネック、マキシスカート流行 • 「アポロ11号」月面着陸	• 日本万国博開催 • 国産衛星おおすみ打ち上げ成功 • 銀座で歩行者天国始まる • 公害問題激化 • 日航機「よど号」ハイジャック事件 • 三島由紀夫ら「楯の会」自衛隊乱入事件 • ニューヨーク五番街で初めて歩行者天国を試みる	• ロサンゼルス地震 • 大阪府、黒田知事誕生 • 沖縄返還協定調印 • ニクソンショック、変動相場制移行 • 中国、国連参加
トレンド	いざなぎ景気 断絶の時代 デザイン・サーベイ スーパーグラフィックス 高層住宅の普及	モビリティ コミュニティ プライマリー建築	脱サラ 開発と規制 ダブル・コア
都市計画と建築	• 都市再開発法公布施行 • 地価公示法公布 • 住宅生産工業化の長期構想第１次案（建設省） • 住宅産業振興要綱（建設省） • 第１回高層住宅展開催 • 大企業、グループ化により住宅産業進出 • 大阪市市電全廃 • 阪急三番街開業（S48年完成） • 地下鉄（天六～動物園前間）全通、阪急と相互乗り入れ • 京阪三条歩道橋をめぐって論議起きる • 親和銀行本店（白井晟一） • 一番館（竹山実） • 東京カテドラル聖マリア大聖堂（丹下） • 代官山集合住宅第１期（槇文彦） • ホテル・ブルースカイ（坂倉建築研究所） • 萩市民会館（菊竹清訓） • 彫刻の森美術館（井上武吉）  オリベッティ・トレーニング・スクール	• 建築基準法改正 • コミュニティ構想発表（自治省） • マンション購入資金貸付制度開始（住宅金融公庫） • 住宅産業振興の方策について答申（住宅宅地及び建築審議会） • 第１回地価公示（建設省） • 阪神高速道路神戸西宮線(2)・第二神名道路(3)・中国縦貫自動車道（吹田～豊中）(3)・神戸大橋(4)開通 • 船場センタービル、オープン • 大阪、ミナミ地下街「虹のまち」オープン • 大阪中央環状線完成 • 新御堂筋全通 • 大阪駅前第１ビル完成 • 天六ガス爆発 • 大阪市内南北幹線、一方通行となる • 京都市風致地区条例制定 • 第三スカイビル（渡邊洋治） • 桜台コートビレッジ（内井昭蔵） • 秋田相互銀行盛岡支店（宮脇） • 西宮トラピスチヌ修道院（村野） • ルナホール（坂倉建築研究所） • 青山タワービル（吉村順三） • 新建築家技術者集団発足 • 『住宅論』（篠原一男） • 『建築馬鹿』（矢田洋） • 「コミュニティー研究」（『都市住宅』）	• 改正建築基準法施行 • 環境庁発足 • 総合設計制度通達 • 第２期住宅建設５ヵ年計画（建設省） • 勤労者財産形成促進法公布 • 都市再開発融資開始（住宅金融公庫） • 住宅産業振興５ヵ年計画策定（通産・建設両省） • 第１回パイロットハウス技術考案競技入選発表 • 初の14階ＨＰＣ工法（公団豊島５丁目） • 近畿地建「淀川河川敷公園」建設発表 • 阪急ファイブ、オープン • 静岡市農協センター（大高正人） • 遠山美術館（今井兼次） • 佐賀県立博物館（第一工房＋内田祥哉） • 五反田ポーラビル（日建設計） • 愛知県立芸術大学（吉村） • 北海道開拓記念館（佐藤武夫） • 京王プラザホテル（日本設計事務所） • 樹木園（村野） • 佐倉市庁舎（黒川） • 箱根国際観光センターコンペ • 『碧いニルヴァーナ』（竹山実） • 『a＋U』創刊  オールド・ウエストバリーの住宅
海外情報	• オリベッティ・トレーニング・スクール（J.スターリング） • ジョン・ハンコック・センター（S.O.M.） • ボストン市庁舎（カルマン＋マキネル＋ノウルズ） • ブリオン家墓地（カルロ・スカルパ） • ミース没	• ママーズ・シアター（J.M.ヨハンセン） • ローマン・カソリック大聖堂（ベルーシ＋ネルヴィ） • ザ・キャナリー（ジョセフ・エシェリック） • ハーバード大学ガンド・ホール（ジョン・アンドリュース）	• 空間社屋（金壽根） • ハイアット・リージェンシー・オヘアホテル（ジョン・ポートマン） • オールド・ウエストバリーの住宅（R.マイヤー） • 陸上競技場屋根（フライ・オットー）
日本建築協会の動き	• 講演会―ブルース・ガフ講演会「私と建築」／日本万国博建築講演会「ソ連展示館講演会」「お祭り広場について」「展示館の特殊工法について」 • 『設備技術者のための建築の知識』刊行 • "大阪の新しい建築写真展示窓"北浜～淀屋橋間地下通路に開設 • よろず相談住宅展覧会（阪神百貨店） • 台湾建築事情視察団派遣 • 見学会―大阪国際空港ターミナルビル／大阪マーチャンダイズ・マート／神戸商工貿易センタービル他 • 工高生コンペ〈ユース・ホステル〉	• 若い会員の集い「万博を終って」座談会 • 講習会―「やさしい建築の知識」「鉄骨構造設計」 • 見学会―船場センタービル／山陽新幹線神戸トンネル布引工区と神戸港ポートアイランド • フリッツ・ボルネマン講演会「西ドイツ館の設計とドイツ近代建築の動向」 • 第２回日本建築祭―大会（万博お祭り広場）／公開記念講演会（朝日生命）／記念出版「日本万国博建築写真集（架構・空間・人間）」出版 • 工高生コンペ〈セカンドハウス〉	• 「21世紀の日本未来像講演会」 • 若い会員の集い―「ロサンゼルス大地震の教えるもの」 • 「建築データシート・合本」出版 • 『建築基礎工法と実例』出版 • 見学会―飛鳥・藤原宮跡発掘現場／兵庫県立近代美術館 • 東畑前会長感謝の会（綿業クラブ） • よろず相談住宅展覧会 • 工高生コンペ〈住宅団地の集会所〉 • 東畑会長より塚本新会長就任

昭和47（1972）	昭和48（1973）	昭和49（1974）	
• 沖縄の施政権返還 • 「47・7豪雨」九州、中国を襲う • 日中国交正常化 • 田中内閣成立 • 高松塚古墳発見 • 元日本兵横井庄一氏帰還 • 冬季オリンピック札幌大会 • ミュンヘンオリンピック	• 関門橋開通 • 日航機ハイジャック • 大洋デパート火災 • ウォーターゲート事件発覚 • ベトナム和平協定調印 • メキシコ地震	• 航空審、開西新空港を泉州沖に答申 • 三木内閣成立―経済成長優先から、安定成長に路線転換 • 元日本兵小野田寛郎氏帰還	社会の動き
日本列島改造論 古代史ブームと開発ブーム	開発と保存 オイルショックと省エネ クリスタル 大吹抜 構造主義	国土計画 身障者配慮、福祉のまちづくり “アートとしての建築” 超高層住宅	トレンド
• 公有地拡大の推進に関する法律公布（9月施行） • 工業再配置法公布 • 自然環境保全法公布施行 • 新都市基盤整備法公布 • 都市公園等整備緊急措置法公布 • 建築基準法改正（地域制細分化等） • 建築生産課設置（建設省住宅局） • 総合技術プロジェクト発足決定（建設省） • 工業化構法による芦屋浜高層住宅プロジェクト提案競技実施（建設省） • 基町高層住宅団地（広島市）、河原町高層住宅団地（川崎市） • 山陽新幹線（新大阪～岡山）開通 • 六甲アイランド着工 • 阪急ターミナルビル完成 • 千日デパート火災 • 近畿自動車道（門真～吹田）開通 • 西名阪道路（天理～大阪）開通 • 大阪・中之島を守る会発足 • 京都市街地景観条例 • 洛西ニュータウン着工 • 京都市、産寧坂地区を特別保全修景地区に指定 • 大石寺正本堂（横山公男） • 福岡相互銀行本店（磯崎） • 中銀カプセルタワービル（黒川） • 粟津邸（原広司） • 大同生命本社ビル（竹中工務店） • IBM本社ビル（日建設計） • 粟辻邸（東孝光） • 『神殿か獄舎か』（長谷川堯） • 『ことばのない思考』（多木浩二）	• 自然環境保全審議会設置 • 都市緑地保全法公布 • 工場立地法公布 • 大店法公布 • 国土総合開発法案決定（経済企画庁） • 財形持家融資制度化 • 光明池ハウジングプロジェクト共同住宅設計コンペ実施 • 「陽あたり条例」直接請求（建築公害対策市民連合） • 第1回集落町並保存対策協議会結成（文化庁） • 「中之島まつり」（第1回） • 京都市、マイカー観光拒否宣言 • 所沢聖地霊園（池原義郎） • 奈良国立博物館（吉村） • 中野サンプラザ（日建設計） • 栃木県立美術館（川崎清） • 大阪ロイヤルホテル新館（吉田五十八） • 京都信用金庫修学院支店（菊竹） • 『空間へ』（磯崎新） • 『現代建築の不毛のなかに』（黒沢隆） • 「建築の世紀末」『建築』（鈴木博之）  スカボロー市民センター	• 国土利用計画法公布（12月施行） • 国土庁設置 • 地域振興整備公団発足 • 生産緑地法公布 • 特定住宅地区整備促進事業発表（建設省） • 環境アセスメント・マニュアル発表（環境庁） • 民営賃貸住宅制度創設（住宅公団） • KEP（総合実験住宅）研究開発（住宅公団） • 初のRC超高層（椎名町アパート） • 湖西線開通 • 大阪市、分区で26区となる • ナンバ地下街「なんなんタウン」オープン • 京都・祇園新橋、特別保全修景地区に指定 • 瀬戸内海歴史民俗資料館（山本忠司） • 迎賓館（村野） • 東京海上ビル（前川國男） • 最高裁判所（岡田新一） • アイビースクウェア（浦辺鎮太郎） • 群馬県立美術館（磯崎） • ビバリー・トム（竹山） • 住友ビル（日建設計） • 巨大建築論争 • 「保存の経済学」（『都市住宅』）  ガララテーゼの集合住宅	都市計画と建築
• ハウジング・ユニオン・ビル（ダイアモンド＋マイアース＋ウィルキン） • サン・ベルナルディノ市庁舎（シーザー・ペリ） • キムボール美術館（ルイス・カーン） • フィンランディア・ホール（アルバ・アアルト） • ORFスタジオ（グスタフ・パイヒェル） • ミネアポリス連邦準備銀行（ギュンナー・バカーツ） • 『ラスベガスに学ぶ』（R.ヴェンチューリ）	• スカボロー市民センター（レイモンド・モリヤマ） • カレッジ・ライフ保険本社ビル（ケヴィン・ローチ） • ハイアット・リージェンシー・ホテル（ジョン・ポートマン） • IDSセンター（フィリップ・ジョンソン） • セントラル・ベヒーア（ヘルマン・ヘルツベルハー） • ディクスウェル消防署（ヴェンチューリ＋ローチ） • クリスチャン・サイエンス・チャーチ・センター（I.M.ペイ）	• 公共住宅（ゴットフリート・ベーム） • ガララテーゼの集合住宅（アルド・ロッシ） • シアーズ・タワー（S.O.M.） • ルーバン大学医学部（ルシアン・クロール） • シュリン宝石店（ハンス・ホライン） • クレスギーカレッジ（チャールズ・ムーア） • フェデラル・リザーヴ銀行（グンナー・バカーツ） • カーン没	海外情報
• 講習会―「建築の風力係数」／「建築基礎工法」 • 講演会―都市災害問題シンポジウム／建築技術者のために「千日デパートビル火災に学ぶ」 • 関西・都市住宅会議「日本列島改造論と大都市の役割」（共催） • 見学会―大阪データ通信局舎／阪急ターミナルビル／泉北ニュータウンパイロットハウス／大阪国際ビルディング／大阪ロイヤルホテル／大阪大林ビル他 • 工高生コンペ〈庭にひろがりをもつ住宅〉 • 日本建築協会建築クラブ発足 • 「建築と社会」600号（2月号）	• 建築基準法政令改正と新用途地域指定並びに大阪市火災予防条例改正説明会 • ヨーロッパの都市と建築調査団派遣―北欧、中南部ヨーロッパの都市施設・建築物の調査・研究（参加者37名） • 見学会―大阪高等・地方・簡易裁判所／神戸文化ホール • 工高生コンペ〈自然公園の中に建つ休憩所〉	• 建築基準法改正案等講習会（共催） • 関西都市・住宅会議「都市のオープンスペース計画」（共催） • 若い会員の集い「ライトの山邑邸を見る会」 • 見学会―薬師寺金堂（復原工事）／中之島センタービル／大阪身体障害者スポーツセンター • 工高生コンペ〈ユニットを組み合わせた「プレハブ住宅」〉	日本建築協会の動き

	昭和50（1975）	昭和51（1976）	昭和52（1977）
社会の動き	• 沖縄海洋博開催 • 最後のＳＬ運転（室蘭～岩見沢間） • エリザベス英女王来日 • ベトナム解放統一なる • 米ソの宇宙船ドッキング成功	• ロッキード事件 • 福田内閣成立 • 神戸まつりで暴走族暴動 • ＯＰＥＣ総会、原油価格の値上げ実施	• ＥＣ・カナダ・アメリカ・ソ連200カイリ宣言、日本も200カイリ宣言 • マルチ商法摘発 • 日航機ハイジャック事件
トレンド	不況倒産 保存再利用 紅茶キノコブーム 住宅政策再編	カタログ文化時代 ジョギングブーム インフィル ハーフミラー	マンションブーム アトリウム
都市計画と建築	• 宅地開発公団法公布 • 都市再開発法の一部改正 • 大都市地域における住宅地等の供給の促進に関する特別措置法公布 • 今後の住宅政策についての基本構想発表（国土庁） • 今後の住宅政策の基本的体系について答申（建設省住宅審議会） • 初の国土利用白書発表（国土庁） • 初の土地白書発表（東京都） • 市街地再開発促進区域制度創設 • 山陽新幹線（岡山～博多）開業 • 北九州市立美術館・中央図書館（磯崎） • アクアポリス（菊竹） • 善光寺別院願王寺（山崎泰孝） • 上無田松尾神社（木島安史） • 福岡銀行本店（黒川） • トヨタ鞍ヶ池記念館（槇文彦） •「近代の呪縛に放て」（『建築文化』） •『建築の解体』（磯崎新）  ゲティ博物館	• 第３期住宅建設５ヵ年計画策定（建設省） • 建築基準法一部改正（防災の強化と日影規制の創設） • ハウス55システム提案競技実施 • 緑のマスタープランについての答申（都市計画中央審議会） • 第２次都市公園等整備５カ年計画閣議決定 • 特色あるまちづくりに関する全国調査（建設省） • ＩＦＨＰ兵庫国際会議開催 • 新神戸トンネル完成 • 大阪建築士事務所協会設立 • 大阪設計監理協会設立 • 大阪駅前第２ビル完成 • 京都市・産寧坂、祇園新橋が伝統的建造物群保存地区に • 山陰本線（京都～二条間）高架化 • 京都市、山科区・西京区新設 • 大阪ソニータワー（黒川） • 中野本町の家（伊東豊雄） • 住吉の長屋（安藤忠雄） • アメリカ大使館（シーザ・ペリ） • 日本プレスセンター（日建設計）  バイカー・ウォール	• 緑のマスタープラン策定の推進についての通達 • 国際観光文化都市の整備のための財政上の措置等に関する法律公布施行 • 第３次全国総合開発計画策定 • 住環境整備モデル事業 • 総合技術開発プロジェクト、省エネルギー住宅システムの開発 • ツーバイフォー住宅普及事業推進協議会結成 • 神戸市高速鉄道開通（名谷～新長田間約6.8km） • 六甲大橋完成 • 阪急グランドビル完成 • 大阪南港ポートタウン町びらき • 京都、双ヶ岡の公有化が決定 • 雑創の森学園（六角鬼丈） • ローズ・ガーデン（安藤） • 今帰仁村中央公民館（象設計集団）  イートン・センター
海外情報	• オローナの小学校（アルド・ロッシ） • 湖畔のアーケード・橋（リカルド・ボフィル） • 文化人類学博物館（アーサー・エリクソン） • 養老院（ヘルマン・ヘルツベルハー） • タッカー邸（ヴェンチューリ＋ローチ） • ゲティ博物館（ノーマン・ノイアバーグ） • ガスライト・スクウェア（ヘンリクィズ＋トッド） • アートセンター・デザイン大学（エルウッド）	• バイカー・ウォール（ラルフ・アースキン） • ベンヅォイル・プレイス（ジョンソン＋バージー） • ダンダス・シャーボン・ハウジング（ダイアモンド＋マイアース） • ペンシルヴァニア州立大学教員クラブ（ヴェンチューリ＋ローチ） • ベルリン工科大学流体力学実験棟（ルートヴィヒ・レオ） • アアルト没	• イートン・センター（ブレグマン＋ハーマン＋ザイドラー） • メトロポリタン・トロント図書館（Ｒ.モリヤマ） • ポンピドー・センター（ピアノ＋ロジャース） • 科学博物館（バンコク）（スメット・ジュムサイ） • ルネサンス・センター（ジョン・ポートマン） • ブラッドレー邸（ピーター・ローズ） •『ポストモダニズムの建築言語』（Ｃ.ジェンクス）
日本建築協会の動き	• 若い会員の集い―「若手建築家に聞く―東孝光・安藤忠雄・山崎泰孝氏のやり方」 •「海とレクリエーション―レクリエーション施設を考える（大阪府青少年海洋センター）」 • 竹腰健造先生米寿を祝う会 • 見学会―吉本ダイヤビル（大阪マルビル） • 工高生コンペ〈団地内に建つ「特定郵便局」〉	•「建築と音楽…形と音と空間と…ヤニス・クセナキス講演＋演奏会」（クセナキス・吉阪正隆・高橋悠治） • 特別公開文化講座「現代建築―大阪・ニューヨーク」（リチャード・マイヤー、向井正也、磯崎新、河辺聡、中島龍彦）（共催） • 関西都市・住宅会議「都市防災について」（共催） • 若い会員の集い「若手建築家に聞く―宮脇檀氏」 •『ふるさとのすまい』復刻版刊行 •『鉄筋コンクリート構造物の耐震安全性』刊行 • 見学会―大阪ソニータワー／大阪駅前第２ビル他 • 工高生コンペ〈野外スポーツ施設の「センターハウス」〉	• ＡＳＴＭ研修会―芦屋浜シーサイドタウン • 改正建築基準法・同施行令説明会（共催） • 若い会員の集い―「建築家に話を聞く―漆原美代子のインテリア・アーキテクチュア」「音環境とアコーステックデザイン」「大阪芸能センターを考える」「外空間作家・深谷光軌氏に聞く」 • 見学会―大阪府立成人病センター／京都中京郵便局と同志社大学ハリス理科学館／国立民族学博物館他 •「創立60周年記念の会」 • 工高生コンペ〈ショッピングプラザに建つ「ドーナツショップ」〉

昭和53（1978）	昭和54（1979）	昭和55（1980）	
• 第８次道路整備５ヶ年計画閣議決定 • 成田空港開港 • 宮城県沖地震 • 第２次石油ショック • 大平内閣成立 • ディスコ、カラオケ人気	• 東京サミットの開催 • コンピュータ・ゲーム大流行 • 大学共通一次試験開始 • 米スリーマイル島―原子力発電所放射能漏れ	• 鈴木内閣成立 • 静岡地下街ガス爆発事故 • 校内暴力問題化 • ＯＰＥＣ原油値上げ（原油40ドル時代）	社会の動き
地方の時代 サラ金犯罪 都市景観 コーポラティブ・ハウジング	マルチ・コンプレックス 「うさぎ小屋」論議	竹の子族	トレンド
• 構造不況対策法施行 • 住宅宅地関連公共施設整備促進事業制度発足 • 三全総モデル地区設定（国土庁） • 今後の宅地政策の在り方について建議（住宅宅地審議会） • 住宅・都市政策推進委員会設置 • 新住宅供給システム開発計画を報告（建設省） • 都市緑化のための植樹等５カ年計画について事務次官通達 • コープ住宅推進協議会設立 • 神戸市都市景観条例の制定 • 大阪市、マスタープラン改訂 • 京都市電全廃 • ヒルサイドテラス（槇） • 資生堂アートハウス（谷口吉生） • 国立民族学博物館（黒川） • 白鬚東地区防災拠点住棟（日建設計） • 京都中京郵便局改修（郵政省）  中京郵便局南側立面図	• 特定住宅市街地総合整備促進事業制度発足 • 住宅都市対策の方向と施策発表（建設省） • 世界最大級のソーラーシステム（筑波洞峰公園体育館） • 神戸・北野町山本通伝統的建造物群保存地区の指定 • 大阪駅前第３ビルオープン • 京阪電鉄（東福寺～三条）地下化工事起工 • 嵯峨鳥居本、伝統的建造物群保存地区指定 • 金沢市立図書館（谷口） • 岡山オリエント美術館（岡田） • 松川ボックス＃２（宮脇） • 54の屋根（石井和紘） • ＰＭＴビル（伊東） •『街並みの美学』（芦原義信）	• 公営住宅家賃対策補助制度発足 • 都計法、建基法の一部改正→地区計画制度発足 • 幹線道路の沿道の整備に関する法律公布 • 明日香村における歴史的風土の保全及び生活環境の整備等に関する特別措置法公布 • 自転車の安全利用の促進及び自転車駐車場の整備に関する法公布（Ｓ56・５施行） • 過疎振興法施行 • (財)住宅・省エネルギー機構設立 • 都市コミュニティ構想（自治省） • モデル定住圏計画決定 • 六甲アイランド始動 • ポートアイランド完成 • 神戸研究学園都市着工 • 上本町ハイハイタウン • 地下鉄谷町線（天王寺～八尾南間）開通 • 京都駅北口広場整備事業完成。地下街ポルタ、オープン • 倉敷市庁舎（浦辺） • 光格子の家（葉祥栄） • 三州足助屋敷（浦辺） •『見えがくれする都市』（槇文彦） •『建築に失敗する方法』（林昌二）	都市計画と建築
• オーストリア旅行代理店（ハンス・ホライン） • リオラ教会（アルバ・アアルト） • イタリア広場（チャールズ・ムーア） • ナショナル・ギャラリー東館（Ｉ.Ｍ.ペイ） •『狂乱のニューヨーク』（レム・コールハース）	• ミロ財団美術館（セルト＋ジャクソン） • 世界劇場（アルド・ロッシ） • ロブソン・スクウェア（アーサー・エリクソン）	• アセネウム（リチャード・マイヤー） • マンチェスター上級裁判所（アラン・グリーンバーグ） • ゼロックス・センター（ヘルムート・ヤーン） • アトランティス（アルキテクトニカ） • カサ・ロトンダ（マリオ・ボッタ） • パンタン門の集合住宅（ポール・シュメトフ）	海外情報
• 日影規制に関する講習会（共催） • 1978年宮城県沖地震災害についての報告会 • 建築技術選書講座シリーズ―「茶室の話」ほか • 若い会員の集い「都市住宅を考える…なぜ・いま・タウンハウスか…」（富安秀雄）「対談・建築を斬る」（渡辺豊和／植田実）「玄から彩へ…墨いろの世界」（篠田桃紅） • 見学会―万国博お祭り広場大屋根降下工事 • 60周年記念出版－「建築データシートハンドブック」「建築技術選書」シリーズ刊行開始 • 工高生コンペ〈公園に建つ「公衆便所」〉	• 実務家のための日影研修会―等時間日影図の描き方とそのチェック方法― • 建築技術選書講座―「構造計画とやさしい力学１」 • 建築計画と新耐震設計法についての研修会 • 若い会員の集い―「コーポラティブハウスの問題点と展望」（中筋修）「キャンパスを訪ねて―大阪芸術大学の建築群を見る」（高橋靖一） • 創立60周年記念出版・建築技術選書シリーズ続刊 • 見学会―高齢者世話ホーム「エデンの園」、特別養護老人ホーム「栄光園」／大阪・上六・市街地再開発 • 工高生コンペ〈児童図書館〉	• 若い会員の集い―「新春放談・80年代に向けて…建築を語る」（石井和紘／石山修武／木島安史／渡辺豊和）「明治の香りを残すまちづくりと古都のタウンハウス（北大路高野住宅）を見る」「みどりのやすらぎの里“グリーンピア三木”を訪ねる」 • 建築技術選書講座―「ソーラーハウス」「建築と設備の接点１」「医院・診療所の計画と設計」「コンクリート工事の管理」「ＰＣ建築の話」 • 見学会―東洋紡ビルディング／大阪駅前第４ビル／ナビオ阪急／大阪市庁舎（第１期） • 工高生コンペ〈幼稚園〉	日本建築協会の動き

	昭和56（1981）	昭和57（1982）	昭和58（1983）
社会の動き	• 第2次臨時行政調査会、第1次答申 • 福井謙一氏ノーベル化学賞受賞 • 京都市、空缶条例公布 • ポートピア'81開催（3/20～9/15） • 対米自動車輸出自主規制決定 • 北炭夕張炭鉱でガス事故 • 宅配便競争激化	• 東北（大宮～盛岡）上越（大宮～新潟）新幹線開通 • 参議院全国区改革 • 中曾根内閣成立 • ホテルニュージャパン火災 • 羽田沖日航機墜落事故 • 東京ディズニーランド開園 • 国連・アジア太平洋都市会議 • フォークランド紛争	• 日本海中部地震、津波 • 日本初の体外受精児誕生 • インテリア・コーディネータ試験開始 • 大韓航空機襲撃事件
トレンド	国際障害者年 OA時代幕開け	心身症クローズアップ 軽薄短小ブーム ポストモダン	規制緩和
都市計画と建築	• 第4期住宅建設5ヵ年計画閣議決定 • 第5次下水道整備5ヵ年計画閣議決定 • 第3次都市公園等整備5ヵ年計画閣議決定 • 住宅・都市整備公団発足 • 新住宅開発プロジェクト本格研究着手（通産省） • ハウス55発売開始 • 新交通ポートアイランド線営業開始 • 花と彫刻の道完成 • 税関線を都市景観形成地域に指定 • 「神戸市地区計画及びまちづくり協定等に関する条例」の制定 • 新交通ニュートラム開業 • 大阪駅前第4ビル完成 • 地下鉄（新深江～南巽）開通 • 京都市営地下鉄（烏丸線）開通 • 京都府、文化・学術・研究都市建設基本構想案発表 • 積木の家III（相田武文） • 名護市庁舎・宮代町進修館（大竹康市・象設計集団） • 松濤美術館（白井） • 小篠邸（安藤）  名護市庁舎鳥瞰図	• 土地区画整理法の一部改正 • 木賃住宅地区総合整備事業制度実施（建設省） • センチュリーハウジングシステム（CHS）構想の基本計画発表（建設省） • 地下室付き住宅に初の施工基準（建設省） • 木造建築工事業等を不況業種に指定（通産省） • 3層住宅商品化進む • 建設省総合開発プロジェクト、省エネ試作実験住宅 • 神戸市景観基本計画の策定 • ポートアイランドの地区計画・都市計画決定（真野地区は11月） • 大阪21世紀協会発足 • 京都、向島ニュータウン完成 • 京都府・市、文化財保護条例施行 • 大阪芸術大学塚本記念館（第一工房） • 新高輪プリンスホテル（村野） • 日本浮世絵博物館（篠原） • 金沢工業大学ライブラリー・センター（大谷幸夫） • 新宿NSビル（日建設計） • 東洋陶磁美術館（日建設計） • 『逃走するバベル』（八束はじめ） • コンクリートの耐久性問題化 • アルカリ骨材反応  ポートランド・パブリック・サーヴィス・ビル	• 区分所有法改正（多数決原理の導入） • 中古1戸建に融資開始 • 規制の緩和等による都市開発の促進方策（建設省） • 「いえづくり'85」のプロジェクト推進委員会開催（建設省） • HOPE計画実施 • 市街地住宅等共同整備事業制度要綱まとまる（建設省） • まちづくり月間創設（建設省） • 旧居留地を都市景観形成地域に指定 • OECD「都市レビュー」エキスパート会議 • IULA世界市長会議 • 京都市、まちづくり基本構想、市議会で議決 • 京都美観風致賞創設 • TIMES（安藤） • 赤坂プリンスホテル（丹下） • 建築会館（秋元和雄） • 人間博物館リトルワールド（日建設計） • 神慈秀明会教祖殿（ミノル・ヤマサキ） • ARK（高松伸） • つくばセンタービル（磯崎） • 土門拳記念館（谷口） • ドラード早稲田（梵寿綱）  リュッツォ・プラッツの集合住宅
海外情報	• アルゴーン国立研究所（ヘルムート・ヤーン） • ライス大学建築学部増築（ジェイムズ・スターリング）	• ポートランド・パブリック・サーヴィス・ビル（マイケル・グレイブス） • 北京香山飯店（I.M.ペイ・アンド・パートナーズ） • メンヘングラトバッハ市立美術館（ハンス・ホライン） • アブタイベルク美術館（ハンス・ホライン） • フリブール州立銀行（マリオ・ボッタ） • シカゴ商工会議所増築（ヘルムート・ヤーン）	• ゴードン・ウ・ホール（ヴェンチューリ＋ローチ＋スコット・ブラウン） • リュッツオー・プラッツの集合住宅（オズワルド・マティアス・ウンガース） • ガレリア（ヘルムース・オバタ・アンド・カサバウム） • アブラクサスの宮殿、凱旋門（R.ボフィル） • アトランタ美術館（リチャード・マイヤー）
日本建築協会の動き	• 若い会員の集い―「二川幸夫・世界の現代建築を語る」「大阪の新しいまち・南港ポートタウンを見る」「歴史的環境を残す都市、奈良・今井町を訪ねる」「絵本にみるすまいとまちづくり」 • 建築技術選書講座講習会―「建築と設備の接点2」「基礎と地盤の手ほどき」「構造計画とやさしい力学2」 • 「建築への太陽熱利用に関する研修会」 • 見学会―ポートピア'81の諸施設／本四架橋ほか • 中国建築事情視察団（北京、西安、大原、大同） • 工高生コンペ〈ファミリーレストラン〉	• 若い会員の集い―「内井昭蔵・長谷川堯―1982年、新春放談―健康な建築を語る内井昭蔵に不健康な建築について考える長谷川堯が迫る―」「大阪芸術大学芸術情報センターを訪ねて…高橋靗一氏に聞く、その素材・空間」「商業空間とデザイン―岡山伸也の世界」 • 建築技術選書講座講習会―「鉄骨構造の話」（金多潔） • 見学会―大阪御堂筋ビルディング（ホテル日航大阪）／ザ・シンフォニーホール • 工高生コンペ〈公民館〉 • 塚本会長より福田新会長就任	• 若い会員の集い―「マイクロコンピューターの建築への利用研修会―道具としてのマイクロコンピュータの可能性」 • 集合分譲住宅における品質保証に関する研修会「かし補修基準と耐久性に対する建築技術の果す役割」 • 建築技術選書34～37号まで発行 • 見学会―大阪ターミナルビル／住友生命御堂筋ビル／神慈秀明会・教祖殿／電通大阪ビル／天理教教会本部神殿／大阪城国際文化スポーツホール他 • 協会事務所、北浜から大阪駅前第3ビルへ移転 • 工高生コンペ〈四季を通じて利用できる「ビーチハウス」〉

昭和59（1984）	昭和60（1985）	昭和61（1986）	
• グリコ森永事件の発生 • 電電公社の高度情報通信システム（ＩＮＳ）モデル実験「キャプテン」サービス開始 • 新札発行 • 大阪築城400年まつり開催 • 世界帆船まつり開催 • 国際伝統工芸博、京都で開催 • ロサンゼルスオリンピック開催	• 国際科学技術博覧会「科学万博―つくば'85」開催 • 電信電話とたばこの公社事業の民営化 • 男女雇用機会均等法成立 • 日航ジャンボ機墜落、死者520人 • ユニバーシアード神戸大会開催 • 阪神タイガース日本一、タイガースフィーバー • 豊田商事事件 • メキシコ大地震、死者8000人	• ハレー彗星地球に接近 • 三原山大噴火 • 東京サミット • スペースシャトル空中爆発 • ソ連、チェルノブイリ原子力発電所火災事故	社会の動き
イベント・ブーム タウン・ウォッチング	新人類 軽さの時代 道づくり インテリア・デザイン	おじょうさま、おぼっちゃまブーム ダイアナ妃フィーバー ハイテクデザイン “仮設” インテリジェント・ビル	トレンド
• 新集合住宅開発プロジェクトの具体策固める（通産省） • 都市再開発エキスパート会議設置（建設省） • 住宅経済懇談会設置（建設省） • コミュニティ公営住宅の建設決定（建設省） • これからの住まいづくりについての提言（ハウジングアドバイザーグループ） • 中高層共同住宅の２戸１化設計指導指針作成（大阪市） • 神戸総合運動公園陸上競技場完成 • 農業公園オープン • 大阪ターミナルビル（アクティ大阪）完成 • 63年京都国体正式決定 • 京都駅南口、アバンティ、オープン • 京都地下鉄（鴨東線）起工 • 関西学研都市基本計画固まる • 大阪城国際文化スポーツホール（日建設計） • 釧路市立博物館、釧路市立湿原展望資料館（毛綱毅曠） • 伊豆長八美術館（石山修武） • 藤沢市秋葉台文化体育館（槇） • 直島町役場（石井和紘） • 国立文楽劇場（黒川） •『建築の七つの力』（鈴木博之） • 村野藤吾没す	• 都市計画法にもとづく現行線引き制度の全面的見直しを決定（建設省） • 防災フォーラムの開催を決定（国土庁） • 21世紀未来都市懇談会初会合（建設省） • ＯＥＣＤ都市レビュー会議、世界大都市サミット会議開催 • 都心国有地売却第一号（大蔵省） • 民活導入再開発第一号 • 青函トンネル本坑貫通 • 大鳴門橋開通 • 税関線シンボルロード整備事業が完成 • 六甲アイランド都市機能用地分譲開始 • インテックス大阪オープン • 古都保存協力税実施 • 平安建都1200年記念協会発足 • 関西学研都市の中核・祝園土地区画整理事業起工 • シルバー・ハット（伊東） • 盈進学園高等学校（クリストファー・アレギザンダー） • 眉山ホール（長谷川逸子） • ＤＡＮＣＥ　ＨＡＬＬ（高松伸） • スパイラル（槇） •『東京の空間人類学』（陣内秀信）  シルバーハット	• 景観建築届出制度スタート • 明石海峡大橋着工 • 新交通六甲アイランド線着工 • (財)国際花と緑の博覧会協会発足 •「関西文化学術研究都市建設基本方針」策定(国土庁) • 同志社大学田辺校舎竣工 • 京都において世界歴史都市会議推進事業スタート • ツイン21（日建設計） • 大阪市庁舎（大阪市都市整備局＋日建設計） • 六甲の教会（安藤） • ＲＩＳＥ（北川原温＋ＩＬＣＤ） • 篠原自邸（篠原） • 京都国立近代美術館（槇） • 東京都新庁舎指名設計競技発表（丹下案） • 第二国立劇場コンペ（柳沢案） •『路上観察学入門』 （赤瀬川原平ほか）  香港上海銀行	都市計画と建築
• ＡＴ＆Ｔ本社ビル（ジョンソン＋バギー） • カリフォルニア航空宇宙博物館(フランク・ゲーリー) • ブラーク開発計画（ピート・ブロム） • シュトゥットガルト国立美術館増築（ジェイムズ・スターリング） • ズーブリン社ビル（ゴットフリート・ベーム） • フレンケルーフェルの集合住宅（ハンリヒ・インケン・バーラー）	• ザ・パラディアム（磯崎新） • 工芸博物館（リチャード・マイヤー） • アヴェッツァーノ文化センター（パオロ・ポルトゲージ＋ヴィットリオ・ジリオッティ） • ベルリンの集合住宅（アルド・ロッシ） • イリノイ州センター（ヘルムート・ヤーン） • ヒューマナ・ビルディング(マイケル・グレイヴス)	• 香港上海銀行（ノーマン・フォスター） • ウィーンの公営住宅（フンデルトワッサー＋ペリカン）	海外情報
• 建築技術選書講座講習会―「すまいの語録」 •〈プロのノウハウ〉シリーズの刊行始まる • 若い会員の集い―「神戸・ポートアイランドを見る―ポートピア'81、その後」「『建築不自由の現在』…五十嵐敬喜氏にきく」「滋賀の秋…県立近代美術館・住友活機園・ＮＥＧ大津工場を見る」 • 見学会―竹中大工道具館／大阪市庁舎(第２期)／ツイン21 • 佐野新会長就任 • 故福田朝生会長追悼会 • 工高生コンペ〈街並みを考えた住宅〉	• 建築技術選書第38号 •〈プロのノウハウ〉シリーズ続刊 •〈特装本〉「火災安全学入門」（岡田光正）発刊 •“近代建築ガイドマップ”再版 • 見学会―インテックス大阪／都ホテル大阪／守口都市計画河原地区第一種市街地再開発事業／大阪市庁舎（第２期） • 日本建築協会東海支部復活25周年記念催し • 工高生コンペ〈郷土資料館〉	•〈プロのノウハウ〉シリーズ続刊 • レーザービジョンの導入・放映―「ポストモダン建築 in USA」「アントニオ・ガウディ」 • 見学会―富士通関西システムラボラトリ／大阪、阿倍野再開発事業 • 展覧会「解剖台上の私性群―建築家池上俊郎の５年間の仕事」 • 建設省へ「建築基準法の改正意見提案」を提出 • 工高生コンペ〈テニスクラブハウス〉 • 第33回青年技術者特集	日本建築協会の動き

「建築と社会」誌20年●特集一覧 ――――――昭和42年～62年

「建築と社会」誌は、昭和42年から大型化しＡ４変形判となった。特集と作品作風頁を二本柱に、シリーズものの頁を織り込み、その時々の社会を反映したテーマを選んで掲載してきた。（58年４月号以降定価950円）購読希望者は事務局（06-348-0635）へ。

＊印は欠号

巻＼号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
昭和42年（48集）	＊国立劇場	＊建設機械	＊日本建築協会50周年記念号	社会と建築	都市と流通空間	住宅と設備	生産施設	モントリオール万博	建設資金	最近の外装	第14回青年建築家	建築と生命
昭和43年（49集）	都市生活	都市のいこいの場	＊50周年記念事業記録号	＊幼児施設	＊教育施設	＊医療施設	都市交通施設	都市供給処理施設	群としての住居	都市のアクセサリー	第15回青年技術者	新都市計画法の諸問題
昭和44年（50集）	＊建築産業の構造と方向	鉄筋コンクリート構造耐震設計の再検討	計画と住民―中部からの報告	＊老人とすまい	＊建築史の方向―現代によみがえる過去―	＊建築行政に期待するもの	転換しつつある住宅生産	＊解決をせまられる公害問題	＊海洋開発	＊民家の系譜と保存計画	＊第16回青年技術者	＊九州からの報告
昭和45年（51集）	現代社会とは何か	建築と安全	日本万国博と技術開発	＊設計のシステム化	＊グッドデザイン運動	高層建築問題	欧米における契約	建築家の課題と責任	＊工事計画	ディベロッパー	第17回青年技術者	＊山陽・山陰からの報告
昭和46年（52集）	住宅―60年代の総括と70年代の展望	都市エネルギと無公害化ビル	建築基準法	都市生活とみどり	＊企画と設計のプロセス	解体工学	都市と港湾	転換期のニュータウン	軟弱地盤と震災	変貌する建築生産	第18回青年技術者	＊自然とレジャ空間
昭和47年（53集）	冬期オリンピックと札幌	600号記念号	インテリアデザイン	＊都市交通問題	＊水利用	量産住宅の設備	＊一般号（桂中学）		都市住環境へのアプローチ	＊都市防災	第19回青年技術者	北陸の新建築
昭和48年（54集）	建築教育	＊泉北ニュータウンのコミュニティ施設	＊大阪大林ビルディング	＊レジャーと施設	大阪国際ビルディング	＊老人コミュニティ	住宅―建築家のすまい	＊新用途地域制と環境	構造と施工	仕上と材料	第20回青年技術者	＊ヨーロッパのまちづくり
昭和49年（55集）	歴史的環境保全	明日の建築はどうなるか	保養所作品	既成市街地の住宅地整備の方策	北摂ニュータウン計画	建築生産と流通機構の変容	ビルの省エネルギ化	高層プレハブ住宅の構造設計	＊みどり	＊屋根防水工事の失敗例とその対策	第21回青年技術者	ビル防災に関する12章
昭和50年（56集）	図書館	東海の新建築	＊インテリア	ＰＣ板を使用した工業化住宅	社会・建築・法	＊都市の景観と施設	建築とプレストレストコンクリート	生活排水処理施設のあり方	＊人間環境としてのターミナル	騒音対策と防音材料	第22回青年技術者	＊集合住宅の設備
昭和51年（57集）	証言'76―建築デザインの動向	＊建築基礎構造の問題点	医療施設	＊床工法と材料	＊建築防災と法	＊市街地整備	工場建築と設備	鉄骨構造のジョイント	集住体のハードとソフト	＊結露防止対策と断熱材料	第23回青年技術者	設備からみた建築の問題点
昭和52年（58集）	＊デザインの動向―部分と全体	兵庫県―その風土と建築・建築界	●日本建築協会60周年記念号●ニュータウンの管理	コンクリートの品質管理と行政指導の方向	日影規制と法	＊身障者施設	照明設備	埋立地における構造問題―大阪南港と芦屋浜を例として	日本住宅公団と建築作品	ミニ乱開発から計画的ミニ開発へ	建築における省エネルギー化	第24回青年技術者
昭和53年（59集）	デザインの動向―新旧のコントラスト	＊水	医療施設―病院建築と情報システム	外壁塗装材料	＊電波障害と建築	組合方式による集合住宅計画	住宅設備	新しい耐震設計	ＣＡＤ―設計とコンピュータ	＊一般号	第25回青年技術者	ビル環境
昭和54年（60集）	＊転換期の再開発	大阪南港ポートタウン	商業空間	コンクリートのひびわれ	日影規制	ホテル建築と情報システム	＊農村施設の変貌	建物の終局強度の検討	庄内のまちづくり	80年代のインテリア	第26回青年技術者	建設業の労務事情
昭和55年（61集）	80年代の都市と建築―まちづくりの歴史と展望	＊●今後の省エネルギーの趨勢●建築金物	＊●最近の銀行建築●安井建築設計事務所作品集	住宅の耐久性	建築行政と法規	最近の防水工法	＊都市景観とアメニティ	屋内体育施設の設備	水ぎわのまちづくり	今後の外装吹付仕上材	●第27回青年技術者●転機＝たつマンション・集合住宅	設計のための新耐震設計法
昭和56年（62集）	職能論	中国の論文―北京の都市計画	＊ポートピア'81	台所まわりの計画と設備	シーリング材の知識	災害と法―安全な環境をめざして	都市住宅―住まい手からの発想	●建築物と風―デザイナーのために●日建設計作品集	住宅・都市整備公団―関西における都市整備を中心とした新公団の役割	間仕切壁の性能評価	第28回青年技術者	障害者の暮らしやすい環境と設備
昭和57年（63集）	新たな商業空間の展開	省エネルギーと開口部	医療施設―地域医療と設備計画	近畿の地盤と地質	都市景観―まちなみ美観への誘い	大阪市庁舎（第１期）	音とホール建築	大スパン構造	＊昭和設計作品集	●絵本にみるすまいとまちづくり●オー・エム・ホテル日航ビル	●第29回青年技術者●地方の庁舎建築	風土・空気と人間
昭和58年（64集）	＊関西の建築文化を考える	マイコンの建築への利用	＊多様化する運動施設	建築と品質管理	計画におけるコミュニケーションとプレゼンテーション	大阪駅とターミナルビル	維持管理と設備更新	東海の将来と文化を考える	オフィス・インテリアの変革	プレストレスト(鉄筋)コンクリート構造	●第30回青年技術者●大阪城国際文化スポーツホール	集合住宅と生活音
昭和59年（65集）	21世紀への関西―魅力あるまちづくりを問う――	関西の超高層ビル	ビルのリフレッシュー内外装補修技術の現状と発展―	建設産業とロボット開発	住環境と法制度	●まちの活性化と商業空間●京都駅南口再開発ビル（アバンティ）	消防設備のポイント	みどりとそれをとりまく人々	高齢化社会と生活空間	床の構工法	●第31回青年技術者●ディテールの思想	光応用システムと建築
昭和60年（66集）	大阪湾物語	東海の現在と近未来	●自由様式への道―建築家安井武雄●建築物の基礎を考える	情報化をめぐる建築・都市事情	ホール―それが生みだす文化―	建物の表情―最近の外壁材料	大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出●神戸研究学園都市	都市と健康スポーツ	●接合●日建設計作品	●村野藤吾の一断章●東海特集	第32回青年技術者
昭和61年（67集）	これからの住空間―都市型集合住宅にみる	屋根―そのデザインと素材	●現代デザイン―ポストモダニズム10年●これからの防水工法	インテリジェントビル・建築設備計画	自治体営繕と公共建築	●建築防災と法●大阪市庁舎	21世紀の住居と設備	●＊開発●ツイン21	ＣＡＤ―その応用と展開	オフィス空間の構成	第33回青年技術者	インテリア・イクステンションとリニューアル
昭和62年（68集）	入浴物語	腐食	創立70周年記念号	●保管・貯蔵施設●東海（予定）	室内の仕上床（予定）	駅（仮称）（予定）						

祝70周年 建築と社会 1917〜1987

「大阪モダニズムの精華」特集協賛

建築事務所

株式会社 A.R.I 建築事務所 大阪市南区谷町 7-3-4-203 TEL 06-768-1771

株式会社 アーバンライフ建築事務所 大阪市北区梅田 1-3-1-500 TEL 06-341-2451

株式会社 赤松菅野建築設計事務所 大阪市北区西天満 5-16-3 西天満ファイブビル TEL 06-364-5651

株式会社 浅野建築設計事務所 大阪市天王寺区城南寺町 5-35 TEL 06-768-0201

株式会社 一粒社ヴォーリズ建築事務所 大阪市大淀区中津 1-18-14 TEL 06-371-8036

株式会社 泉沢建築設計事務所 大阪市北区神山町 14-3 TEL 06-364-9071

株式会社 伊東建築設計事務所 大阪市浪速区幸町 2-2-20 清光ビル TEL 06-562-4343

株式会社 伊藤建築設計事務所 名古屋市中区錦 3-3-6 日経錦別館 TEL 052-951-1110

出江寛建築事務所 大阪市北区南森町 1-2-22 TEL 06-364-3875

株式会社 浦辺設計 大阪市北区梅田 1-12-39 新阪急ビル TEL 06-341-1680

株式会社 小河建築設計事務所 大阪市南区瓦屋町 3-1-9 TEL 06-763-2301

株式会社 大井建築設計事務所 大阪市西区京町堀 1-10-8 TEL 06-444-4521

大阪建築センター(坪井、柳川) 大阪市阿倍野区阪南町 4-13-1 サンライズビル TEL 06-628-8372

株式会社 大阪雑賀建築事務所 大阪市天王寺区上本町 8-3-23 TEL 06-772-4426

多井建築研究所 大阪市東区今橋 1-1 1番館ビル TEL 06-226-0008

株式会社 河井建築事務所 奈良市中山町西 3-210-25 TEL 0742-44-8100

喜多一級建築士設計事務所 枚方市伊加賀西町 10-4 TEL 0720-43-1990

株式会社 共同建築事務所 大阪市南区谷町 7-3-4-317 TEL 06-763-3277

株式会社 久米建築事務所 大阪市西区江戸堀 1-10-8 帝人殖産ビル TEL06-444-1161

株式会社 コラムデザインセンター 大阪市南区南船場 4-13-15 TEL 06-245-4631

株式会社 香陽設計 大阪市北区兎我野町 5-12 梅田グリーンビル TEL 06-363-1705

株式会社 駒建築設計事務所 大阪市東区常盤町 1-14 TEL 06-942-4419

四方設計工務 株式会社 一級建築士事務所 京都市伏見区深草関屋敷町 32-2 TEL 075-642-9516

株式会社 篠田川口建築事務所 名古屋市東区泉 1-21-21 TEL 052-962-7581

株式会社 昭和設計 大阪市西区新町 1-5-7 TEL 06-532-3421

株式会社 AAA総合設計 大阪市南区東清水町 66 TEL 06-245-7300

株式会社 鈴木隆二設計事務所 名古屋市中区松原 1-17-6 TEL 052-321-1763

株式会社 双星設計 大阪市北区茶屋町 18-21 豊崎ビル TEL 06-373-2281

株式会社 創 設計事務所 姫路市西延末 269-6 TEL 0792-96-2010

株式会社 創美設計 大阪市北区末広町 3-21 TEL 06-312-3587

株式会社 大建設計 大阪市西区江戸堀 1-12-8 TEL 06-441-9351

竹本建築研究所 大阪市南区南船場 4-9-6-704 TEL 06-251-0801

株式会社 都市問題経営研究所 大阪市北区堂山町 3-3 日本生命梅田ビル TEL 06-315-8455

株式会社 東畑建築事務所 大阪市東区伏見町 5-19 TEL 06-202-0391

徳岡昌克建築設計事務所 大阪市北区西天満 6-3-11-205 TEL 06-314-1688

株式会社 富家建築事務所 京都市中京区押小路通東洞院西入ル TEL 075-231-6357

株式会社 内藤建築設計事務所 小野市上本町 240-4 TEL 07946-2-4757

中川匠建築設計事務所 大阪市北区浪花町 1-19 新興ビル TEL 06-371-3651

株式会社 日建設計 大阪市東区高麗橋 5-21-1 TEL 06-203-2361

日積工務 株式会社 大阪市南区島之内 1-14-27 TEL 06-251-3195

株式会社 日本設計事務所大阪支社 大阪市東区淡路町 4-54 興和淡心ビル TEL 06-201-0321

株式会社 林設計事務所 大阪市大淀区長柄中 3-1-8 TEL 06-351-6831

株式会社 プラス建築都市設計研究所 大阪市南区南船場 3-10-10 TEL 06-251-6387

福山建設 株式会社 一級建築士事務所 大阪市北区天神橋 3-8-6 TEL 06-353-0055

株式会社 三谷設計事務所 大阪市西区靱本町 2-7-6 サコダビル TEL 06-443-3501

祝70周年 建築と社会 1917〜1987

「大阪モダニズムの精華」特集協賛

村野・森建築事務所　大阪市阿倍野区阿倍野筋 2-3-8　TEL 06-624-0926

株式会社 安井建築設計室　大阪市西区靱本町 1-9-18　TEL 06-448-2765

株式会社 安井建築設計事務所　大阪市東区島町 2-7　TEL 06-943-1371

株式会社 横河建築設計事務所大阪事務所　大阪市東区伏見町 5-42 TEL 06-202-4509

株式会社 吉田建築事務所　大阪市西区北堀江 2-3-3　TEL 06-538-2991

株式会社 吉田都市建築研究所　大阪市西区西本町 1-13-11　TEL 06-533-3325

建設業者

アイサワ工業 株式会社　大阪市北区浪花町 14-25　TEL 06-371-4315

株式会社 あめりか屋　大阪市北区中之島 4-3-25　TEL 06-444-1501

株式会社 青木建設　大阪市大淀区大淀南 1-4-15　TEL 06-458-5851

株式会社 淺沼組　大阪市天王寺区東高津町 12-6　TEL 06-768-5222

株式会社 新工務所　大阪市北区曽根崎新地 2-6-11　TEL 06-347-0110

安藤建設 株式会社 大阪支店　大阪市福島区福島 6-3-21　TEL 06-453-2190

株式会社 今西組　大阪市天王寺区上本町 6-6-23-309　TEL 06-779-3361

岩出建設 株式会社　岸和田市並松町 1-5　TEL 0724-39-4501

株式会社 大林組　大阪市東区京橋 3-37　TEL 06-943-1131

株式会社 大本組大阪支店　大阪市北区梅田 2-5-4 千代田ビル西館　TEL 06-345-8131

株式会社 奥村組　大阪市阿倍野区松崎町 2-2-2　TEL 06-621-1101

株式会社 長村組大阪支店　大阪市北区西天満 4-7-13 新老松ビル　TEL 06-361-5420

鹿島建設 株式会社 大阪支店　大阪市西区靱本町 1-11-7　TEL 06-448-3311

海原建設 株式会社　大阪市北区梅田 1-2-2-300　TEL 06-346-1900

株式会社 金山工務店　大阪市東区内淡路町 1-2　TEL 06-942-5461

株式会社 神崎組大阪支店　大阪市北区曽根崎新地 1-1-36　TEL 06-341-7371

岐建木村 株式会社 大阪支店　大阪市北区西天満 6-8-7　TEL 06-316-0353

共立建設 株式会社 大阪支店　大阪市東区内本町2-45大阪内本町ビル TEL 06-942-2491

株式会社 熊谷組大阪支店　大阪市都島区片町 2-10-5　TEL 06-352-1151

栗本建設工業 株式会社　大阪市西区南堀江 1-11-1　TEL 06-531-5802

コーナン建設 株式会社　大阪市淀川区十三本町 2-4-28　TEL 06-308-1551

小西建設 株式会社 大阪本店　大阪市天王寺区玉造本町 5-14-100 TEL 06-762-2481

公成建設 株式会社 大阪支店　大阪市大淀区豊崎 2-4-3　TEL 06-375-1121

株式会社 鴻池組　大阪市東区北久宝寺町 4-27　TEL 06-244-3508

鴻池建設 株式会社　貝塚市沢 1227-2　TEL 0724-31-1241

光明建設 株式会社　京都市伏見区深草関屋敷町 32　TEL 075-641-6091

株式会社 金剛組　大阪市天王寺区四天王寺 1-14-29　TEL 06-779-7731

五洋建設 株式会社 大阪支店　大阪市北区梅田 2-2-25 新阪神ビル TEL 06-345-0631

佐藤工業 株式会社 大阪支店　大阪市東区北浜 1-25　TEL 06-203-7221

才門建設 株式会社　岸和田市下野町 3-10-25　TEL 0724-38-2121

三和建設 株式会社　大阪市淀川区加島 1-55-6　TEL 06-301-6636

島藤建設工業 株式会社 大阪支店　大阪市北区野崎町 9-10 日食ビル TEL 06-315-0451

清水建設 株式会社 大阪支店　大阪市東区本町 4-15-1　TEL 06-263-2811

住友建設 株式会社 大阪支店　大阪市東区北浜 5-22 住友ビル 2 号館 TEL 06-220-8711

積水ハウス 株式会社　大阪市北区中之島 6-2-27　TEL 06-446-3111

株式会社 錢高組　大阪市西区西本町 2-2-11　TEL 06-531-6431

田中建設 株式会社　大阪市天王寺区北河堀町 4-9　TEL 06-771-2391

大成建設 株式会社 大阪支店　大阪市東区北浜 4-38　TEL 06-203-1131

第一建設工業 株式会社　大阪市東区今橋 1-2　TEL 06-203-2933

祝70周年 建築と社会 1917～1987

「大阪モダニズムの精華」特集協賛

大末建設 株式会社 大阪市南区島之内 2-4-10 TEL 06-213-0555	株式会社 西本組 大阪市西成区長橋 3-7-30 TEL 06-561-2046
大鉄工業 株式会社 大阪市淀川区宮原 4-4-44 TEL 06-394-1281	日産建設 株式会社 大阪支店 大阪市西区江戸堀 1-6-14 TEL 06-444-1621
大都工業 株式会社 大阪支店 大阪市北区茶屋町 6-23 松柏ビル TEL 06-372-3671	日東建設 株式会社 大阪支店 大阪市北区天神橋 3-8-9 新末広ビル TEL 06-351-0623
大日本土木 株式会社 大阪市北区堂島 2-2-2 TEL 06-341-5931	日本建設 株式会社 大阪市東区備後町 2-58-1 明治生命備後町ビル TEL 06-226-0630
太平工業 株式会社 大阪支店 大阪市北区末広町 3-21 星和地所扇町ビル TEL 06-312-7391	日本国土開発 株式会社 大阪支店 大阪市西区西本町 1-10-10 TEL 06-538-7351
高藤建設 株式会社 大阪支店 大阪市都島区内代町 4-3-33 TEL 06-953-2180	野村建設工業 株式会社 大阪市東区高麗橋 2-9 TEL 06-202-4791
株式会社 高松組 大阪市淀川区田川 2-1-5 TEL 06-309-8101	株式会社 間組大阪支店 大阪市東区瓦町 5-20-1 TEL 06-201-2751
株式会社 竹中工務店 大阪市東区本町 4-27 TEL 06-252-1201	阪神土木工業 株式会社 大阪市福島区福島 5-6-37 TEL 06-347-6556
株式会社 辰村組大阪支店 大阪市西区北堀江 1-1-30 四ツ橋グリーンビル TEL 06-538-0691	株式会社 樋口組 大東市大字龍間 1296 TEL 0720-69-0121
株式会社 地崎工業大阪支店 大阪市北区堂島 2-1-27 TEL 06-343-0851	フジタ工業 株式会社 大阪支店 大阪市北区堂島 2-1-16 TEL 06-348-4510
株式会社 辻本工務店 八尾市久宝園 1-82-2 TEL 0729-97-5511	不二建設 株式会社 大阪市西区西本町 3-1-9 TEL 06-541-5534
鉄建建設 株式会社 大阪支店 大阪市東区瓦町 4-56 瓦町K・Tビル TEL 06-201-1881	不動建設 株式会社 大阪市東区平野町 5-30 TEL 06-201-1121
戸田建設 株式会社 大阪支店 大阪市西区西本町 1-13-47 TEL 06-531-6095	富國建設 株式会社 大阪市北区神山町 1-3 TEL 06-313-4591
東海興業 株式会社 大阪支店 大阪市北区堂島浜 2-2-8 東洋紡ビル TEL 06-348-5602	株式会社 富士工大阪支店 吹田市江の木町 17-20-201 TEL 06-386-7401
東急建設 株式会社 大阪支社 大阪市北区堂山町 1-5 大阪合同ビル TEL 06-313-1371	福川建設 株式会社 大阪市天王寺区南河堀町 6-31 TEL 06-779-1515
東洋土建 株式会社 大阪市東住吉区東田辺 2-3-2 TEL 06-692-1331	株式会社 藤木工務店 大阪市東区両替町 1-13 TEL 06-944-1468
株式会社 東和組 大阪市北区西天満 4-5-14 TEL 06-363-4051	豊國建設 株式会社 大阪市北区天満橋 2-3-1 TEL 06-353-1001
飛島建設 株式会社 大阪支店 大阪市東区島町 2-28-1 TEL 06-942-2481	真柄建設 株式会社 大阪支店 大阪市淀川区宮原 4-4-50 TEL 06-393-1171
株式会社 中野組大阪支店 大阪市東成区中道 1-1-1 TEL 06-972-6221	株式会社 前田組 寝屋川市大成町 1-1 TEL 0720-24-1111
株式会社 中道組 大阪市都島区片町 1-3-4 TEL 06-352-4771	前田建設工業 株式会社 大阪支店 大阪市都島区東野田町 2-4-20 TEL 06-353-7891
南海建設 株式会社 大阪市浪速区恵美須西 3-14-22 TEL 06-644-1212	松井建設 株式会社 大阪支店 大阪市北区堂島 2-4-17 TEL 06-344-4135
西田工業 株式会社 大阪支店 大阪市大淀区中津 3-10-4-101 TEL 06-371-7371	株式会社 松村組 大阪市北区天満 2-1-33 TEL 06-353-1131
西松建設 株式会社 関西支店 大阪市東区釣鐘町 2-41 TEL 06-942-1131	水野建設 株式会社 大阪支店 大阪市北区茶屋町 6-2 TEL 06-372-7761

祝70周年 建築と社会 1917〜1987

「大阪モダニズムの精華」特集協賛

株式会社 水間組 大阪市都島区東野田町 1-1-4 TEL 06-352-3121

三井建設 株式会社 大阪支店 大阪市北区中之島 3-4-18 TEL 06-446-1535

三菱建設 株式会社 大阪支店 大阪市北区梅田 1-8-17 第一生命ビル TEL 06-341-7141

村角建設 株式会社 大阪市住之江区浜口西 2-12-9 TEL 06-672-3551

村本建設 株式会社 大阪本社 大阪市天王寺区四天王寺 1-5-43 TEL 06-774-2155

株式会社 明和工務店大阪支店 大阪市西区靱本町 3-2-15 TEL 06-443-2541

モリタ建設 株式会社 大阪市天王寺区石ヶ辻町 15-15 TEL 06-772-1221

望月建設 株式会社 大阪市北区中崎西 2-3-12 モチケンビル TEL 06-375-2345

株式会社 森組 大阪市東区横堀 2-14 TEL 06-201-2761

株式会社 森本組 大阪市天王寺区夕陽丘町 4-11 TEL 06-779-1451

株式会社 盛工務店 大阪市北区南森町 1-1-26 TEL 06-364-1581

矢作建設工業 株式会社 大阪支店 大阪市北区梅田 1-2-2-400 大阪駅前第2ビル TEL 06-344-8241

株式会社 薮内工務店 貝塚市鳥羽 183-1 TEL 0724-33-2001

株式会社 山田組 大阪市東区内久宝寺町 3-58 TEL 06-941-1281

株式会社 米田工務店 大阪市天王寺区逢阪 1-1-7 TEL 06-771-7771

電気・空調・衛生設備業者

アイエム換気工業 株式会社 大阪市浪速区塩草 3-9-4 TEL 06-561-3901

浅海電気 株式会社 大阪市北区西天満 3-7-4 TEL 06-362-8701

浦安工業 株式会社 大阪支店 大阪市北区天満 2-3-5 TEL 06-351-7502

株式会社 大阪城口研究所 大阪市北区角田町 2-15 TEL 06-372-7151

近畿電気工事 株式会社 大阪市大淀区本庄東 2-3-41 TEL 06-375-6000

栗原工業 株式会社 大阪市北区角田町 1-1 東阪急ビル TEL 06-313-1101

三機工業 株式会社 大阪支店 大阪市東区北浜 2-22 TEL 06-202-3071

株式会社 三晃空調 大阪市北区西天満 3-13-20 TEL 06-363-1371

三宝電機 株式会社 大阪市北区西天満 2-6-8 堂ビル TEL 06-364-1471

新日本空調 株式会社 大阪支店 大阪市北区堂島浜 1-2-6 TEL 06-344-6031

住友電設 株式会社 大阪市福島区福島 7-22-8 TEL 06-452-1151

株式会社 精研 大阪市南区瓦屋町 2-11-16 TEL 06-768-5031

ダイダン 株式会社 大阪市西区江戸堀 1-9-25 TEL 06-441-8231

株式会社 大気社大阪支社 大阪市北区中之島 3-2-18 住友中之島ビル TEL 06-448-5851

高砂熱学工業 株式会社 大阪支店 大阪市北区芝田 1-4-8 北阪急ビル TEL 06-372-2311

朝陽電気 株式会社 大阪市北区中之島 3-2-4 TEL 06-385-1361

東光電気工事 株式会社 大阪支社 大阪市東区高麗橋 5-28 TEL 06-202-0325

東陶機器 株式会社 大阪市北区曽根崎 2-3-7 TEL 06-364-1181

東洋熱工業 株式会社 大阪支店 大阪市西区靱本町 3-1-27 TEL 06-443-8071

株式会社 西原衛生工業所大阪店 大阪市大淀区中津 6-8-4 TEL 06-458-3628

日本電設工業 株式会社 大阪支店 大阪市大淀区豊崎 3-17-15 TEL 06-372-3533

株式会社 毎日映像音響システム 大阪市北区新大ビル TEL 06-343-1821

建材業者

株式会社 INAX タイル 住設機器 大阪市西区新町 1-7-1 TEL 06-532-6081

井上窯業 株式会社 タイル工事 屋根瓦工事 大阪市天王寺区生玉町 11-28 TEL 06-771-2851

株式会社 梅彦 化粧壁 建築石材 大阪市北区中崎西 2-1-3 TEL 06-313-6171

オリエンタルメタル製造 株式会社 オリエンタルメタル オリエンタルカラースーパーメタル 尼崎市昭和南通 3-26 TEL 06-412-5131

株式会社 大阪硝子店 各種硝子販売工事 大阪市東区本町 5-4 TEL 06-262-3536

大阪クロード 株式会社 ネオン 電飾 一般看板 企画 設計 施工 大阪市福島区海老江 8-11-21 TEL 06-451-1273

大阪断熱 株式会社 熱絶縁工事 大阪市北区与力町 7-1 TEL 06-351-0491

祝70周年 建築と社会 1917〜1987

「大阪モダニズムの精華」特集協賛

大塚オーミ陶業 株式会社 信楽焼大型美術陶板 大阪市東区豊後町10 TEL 06-943-6695

奥村重兵衛 株式会社 内・外装工事 大阪市北区西天満5-3-7 TEL 06-312-4131

関西ペイント 株式会社 塗料全般 大阪市東区伏見町5-27 TEL 06-203-5531

キムラ硝子建材 株式会社 ガラス工事 大阪市東区内平野町2-28 TEL 06-941-4181

近畿防水事業協同組合 防水工事 大阪市西成区橘3-18-27 工英社内 TEL 06-661-8861

久保孝ペイント 株式会社 各種塗床材 塗料全般 大阪市東淀川区西淡路3-15-27 TEL 06-322-6271

株式会社 サトーセン 装飾合せガラス 大阪市西成区津守3-6-39 TEL 06-658-1305

三友工業 株式会社 3K式鋼製 天井下地材 間仕切材 大阪市西区南堀江1-19-8 TEL 06-532-3321

昭和ロック 株式会社 錠前 電気錠 大阪市淀川区野中南2-11-50 TEL 06-303-1121

鈴木シャッター工業 株式会社 大阪支店 防煙・防火シャッター 大阪市北区茶屋町5-2 TEL 06-371-4151

株式会社 タジマ センイ床タイル ACフロア28,35,55 大阪市西区京町堀1-10-5 TEL 06-441-5951

田島ルーフィング 株式会社 不燃シングル ガムロン防水 大阪市西区京町堀1-10-5 TEL 06-443-0431

武田薬品工業 株式会社 木材保存剤 大阪市東区道修町2-27 TEL 06-204-2456

株式会社 大佛 大佛瓦 瓦工事 大仏タイル 京都市東山区今熊野池田町8-5 TEL 075-541-3344

大東ボーリング鑿泉工業所 地質調査 大阪市天王寺区堂ヶ芝2-8-12 TEL 06-771-1362

太陽工業 株式会社 大型テント 空気膜構造 大阪市淀川区木川東4-8-4 TEL 06-306-3065

東洋シヤッター 株式会社 シャッター シャッタービジョン 大阪市東区両替町1-12 日生谷町ビル TEL 06-943-6571

東洋リノリューム 株式会社 カーペット・床材 カーテン・クロス 大阪市東区京橋1-7 OMMビル TEL 06-943-1641

内外木材工業 株式会社 造作・家具工事 内装工事 大東市谷川2-7-1 TEL 0720-72-2161

日新工材 株式会社 防水工事 大阪市西区新町1-12-23 イサオビル TEL 06-541-3785

日新工業 株式会社 大阪支店 総合防水材料 大阪市西区新町1-12-22 TEL 06-533-3191

日本アスファルト防水工業協同組合関西支部 防水工事 大阪市西区新町1-12-22 日新工業㈱内 TEL 06-533-3191

花豊造園 株式会社 造園 設計・施工 京都市下京区大宮通五条下ル TEL 075-341-2246

ムツミ産業 株式会社 アルミプール アルミサッシ 大阪市西区靱本町1-17-15 TEL 06-441-0378

室谷商事 株式会社 大阪支店 内装不燃材 販売・施工 大阪市北区西天満2-6-8 堂ビル TEL 06-364-2031

KY山田タイル 株式会社 大阪支店 タイル 内・外・床タイル 大阪市西区西本町1-3-4 TEL 06-538-2941

ロンシール工業 株式会社 大阪支店 ロンリウム ロンプルーフ 大阪市淀川区西中島3-9-13 TEL 06-304-2700

株式会社 和中商店 床材 壁装 防水 大阪市大淀区豊崎5-8-11 TEL 06-371-0731

ロックペイント 株式会社 大阪営業所 建築用塗料 全般 大阪市北区梅田1-1 大阪駅前第3ビル TEL 06-344-1240

学校・団体・報道・出版・銀行・印刷・一般

学校法人 修成建設専門学校 大阪市西淀川区大和田5-19-30 TEL 06-474-1644

財団法人 日本建築総合試験所 建築全般に関する試験・研究 吹田市藤白台5-8-1 TEL 06-872-0391

社団法人 日本建築積算協会関西支部 大阪市南区鰻谷中之町62 市川ビル TEL 06-245-6645

株式会社 日刊建設新聞社 日刊建設新聞 大阪市東区高麗橋1-25 高麗橋ビル TEL 06-202-6861

株式会社 日刊建設産業新聞社 大阪支社 日刊建設産業新聞 日刊建産速報 大阪市東区淡路町1-14 八千代ビル TEL 06-231-8171

株式会社 日刊建設通信新社関西支社 日刊建設通信 月刊建設工事の動き 大阪市西区京町堀1-6-23 エハラビル TEL 06-444-4451

株式会社 新住宅社 「新住宅」出版 大阪市北区中之島4-3-25 TEL 06-443-6641

株式会社 彰国社 建築図書出版 東京都新宿区坂町25 TEL 03-359-3231

有限会社 柳々堂 建築図書専門店 大阪市東区北久宝寺町4-27 鴻池ビル TEL 06-251-8233

株式会社 大和銀行北浜支店 大阪市東区北浜2-15-1 TEL 06-222-3551

中央信託銀行 株式会社 梅田支店 大阪市北区梅田1-2-2-100 TEL 06-343-2451

ユニバーサル証券 株式会社 大阪支店 大阪市北区梅田1-12-39 新阪急ビル TEL 06-345-6671

株式会社 研文社 大阪市北区堂山町13-17 TEL 06-314-0151

日本写植印刷 株式会社 大阪市阿倍野区阪南町7-5-30 TEL 06-606-1111

大阪エスピー紙工 株式会社 封筒 ファイル 大阪市北区東天満2-2-15 第6新興ビル TEL06-353-6560

ゼネラル事務機 株式会社 事務機 印刷 大阪市西区靱本町3-2-7 TEL 06-441-1462

構造の頁

145

コンクリートの品質管理●1

X線による非破壊検査の原理と画像処理の実際

(その1)

長谷川　敦史

最近、コンクリート構造物の耐久性あるいは老朽化という言葉がマスコミによって使用される時代に入った。とくに鉄筋コンクリート構造物は多方面に用いられており、その耐久性は長く維持されなければならない。しかし、コンクリートも人間と同様に老化するのは避けられない事実である。そのため既存構造物に対する維持・改修に伴う調査、自然災害による不慮の事故等による調査が重要である。また、老朽化構造物を診断する場合、その耐震性能を再検討するため、耐震診断のための資料が必要となることも多い。

これらの調査・診断をするにあたり、現地における調査として、

①ひび割れ状況の調査
②躯体寸法調査
③配筋状況調査
④コア採取によるコンクリートの圧縮強度調査
⑤コンクリートの中性化深さ測定
⑥鉄筋の腐食状況調査
⑦常時微動、不同沈下測定

等の項目があり、項目③～⑥は多少の破壊を伴う調査である。とくに、配筋状況の調査は重要な調査項目にもかかわらず信頼性に乏しい計測器に頼ったり、部材の一部をはつって（破壊して）調べる原始的方法に頼っていた。そこで非破壊的な調査方法として、放射線（X線）透過試験を利用する方法が有効である。われわれが一般健康診断で受ける胸部レントゲン撮影と原理的には同じ方法であり、その他の分野でも広く利用されているが、コンクリートに対してはその適用方法の開発が遅れていた。

X線による内部透視、物体内部の欠陥位置測定等はすでに確立された手法であるが、鉄筋コンクリートはその部材厚さが大きいため、従来の方法をそのまま適用することは困難であった。また、撮影されたX線フィルム像からの計測にあたっては、専門技術者により直接スケール等を用いて測定するため個人差が大きく、また限界があった。しかし、新しいコンクリートのX線フィルム撮影方法（特許出願中）と最新の画像処理システムを組み合わせることにより、精度が高く、人間の限界を越える計測ができる方法を開発した。

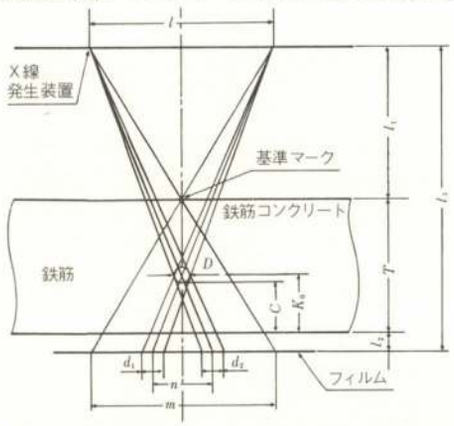
X線による配筋状況調査の特長を以下にあげる。

①非破壊的調査方法である。
②鉄筋径・鉄筋位置(かぶり厚さ等)・配筋ピッチが精度良く計測される。
③調査後の補修を必要としないため、経済的である。
④配筋状況を目で確認できる。
⑤記録・保存性が優れている。

X線による配筋状況調査方法の原理

1枚のフィルムにX線を2方向から照射することにより、そのフィルムには同じ鉄筋の像が二つ得られる。

このフィルムから、図－1中の鉄筋像の径(d_1)、(d_2)、鉄筋像の移動距離(n)、基準マーク像の移動距離mが計測でき、またX線発生装置の移動距離(ℓ)、X線発生装置とコンクリート表面までの距離(ℓ_1)、フィルムとコンクリート裏面までの距離(ℓ_2)は実測できるため、鉄筋のかぶり厚さ(C)、鉄筋径(D)、コンクリートの厚さ(T)が次式で求められる。



図－1　鉄筋位置、径、コンクリート厚さを求めるための計算図

①コンクリートの厚さ(T)

$$T=(\ell_1\cdot m)/\ell-\ell_2$$

②鉄筋中心からコンクリート表面までの距離(K_0)

$$K_0=\{n\cdot(\ell_1+T)-\ell\cdot\ell_2\}/(\ell+n)$$

③鉄筋径(D)

$$D=\{(d_1+d_2)/2\}\cdot[\{\ell_1+(T-K_0)\}/\ell_3]$$

④かぶり厚さ(C)

$$C=K_0-(D/2)$$

X線フィルムの撮影方法

X線発生装置をコンクリート表面から距離(ℓ_1)を離し、フィルム位置を動かさずにX線発生装置をコンクリート表面に対して平行移動（ℓ距離）させ、2方向からX線を照射する方法である。

使用する装置

使用するX線発生装置は、その出力が300kvp・5mAで、本体とコントロールボックスで構成されており、重量はそれぞれ38kg、21kgである。

したがって、運搬・取り扱いが比較的容易であるため、任意の部材（壁・床・柱・梁・バルコニ・日差し・基礎等）の計測が可能である。

現在のX線発生装置では、コンクリートの厚さが500mm以下であれば調査可能であるが、それ以上の厚さを持つ部材の調査は、これからの課題であり、また他の方法による研究・開発を待たねばならない。(図－2参照)

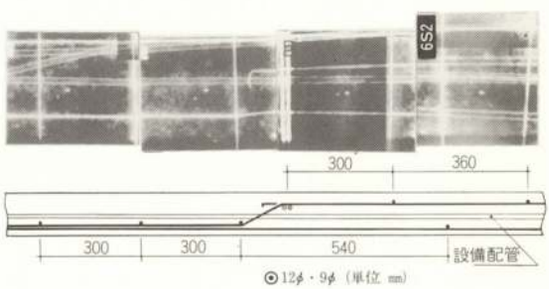


図－2　梁の配筋調査状況

実際の適用例

床スラブの強度算定のために調査した例が、図－3である。鉄筋の配筋状況・かぶり厚さ・鉄筋径等のほかに設備配管（配管中の電線の数もわかる）、釘も認められる。図－3中の6S2がX線を2方向から照射した写真であり、その他のフィルムは、一方向から照射したフィルムである。この6S2のフィルムから計測した値により床スラブの配筋状況が推定されている。

(次号につづく)



図－3　スラブ配筋

(はせがわ　あつし　株式会社構造総合技術研究所技術部技術課長)

●構造設計●構造診断
KK キンキ構造設計
〒542 大阪市南区谷町9－5－28－206
TEL 06(763)5460㈹・FAX 06(763)5468

●建物の総合調査・診断
(株) 構造総合技術研究所
〒583 大阪府羽曳野市蔵之内626番地
TEL 0729(57)0988㈹・FAX 0729(57)0169

施工材料の頁

147
アブレイシブジェットによる鉄筋コンクリートの切断

石橋　穣治

サンドブラスト法のように流体に研磨材を混合噴射すると硬い材料を研磨できる一方、高速水噴流を用いると硬岩やコンクリートを切断できることは周知のとおりである。この二つの方法の長所を生かして新しく開発されたものが、アブレイシブジェットと呼ばれる技術であり、以下のような特長を有している。

1）コンクリートはもちろんのこと、鉄筋コンクリート、鉄骨鉄筋コンクリートの切断が可能である。

2）直線や曲線等、任意の形状の切断が可能であるうえ、作業方向や作業環境（たとえば水中）を選ばない。

3）ノズルの移動速度等を調整することにより、切断深さを任意に変えることができる。

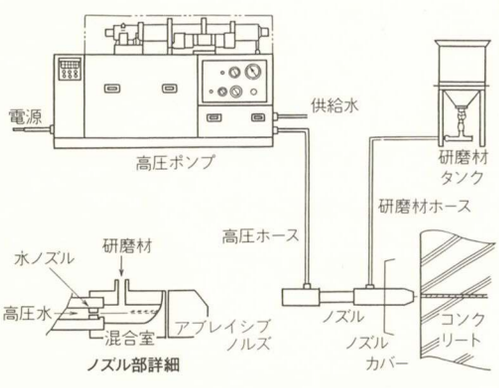
4）切断面以外の部分を傷めない。

5）切断時に粉じんが発生せず、かつ無振動である。火花の発生がないので火災の恐れもない。

6）ノズルは小型、小反力であり、自動化、遠隔操作化が容易である。

アブレイシブジェットの基本的構成を図－1に示す。技術的には図－1のノズル部詳細に示す混合室内で、高圧研磨材をいかに効率よく添加・混入し集中噴射するかということがポイントであり、この添加・混入技術に各社のノウハウがあり、切断能力に差がでてくる。当社は水噴流に関し20数年の研究実績を有しており、この技術的蓄積に基づいて独自のアブレイシブジェット工法（刃式アブレイシブジェット）を自社開発した。

以下にその主な適用例を紹介する。

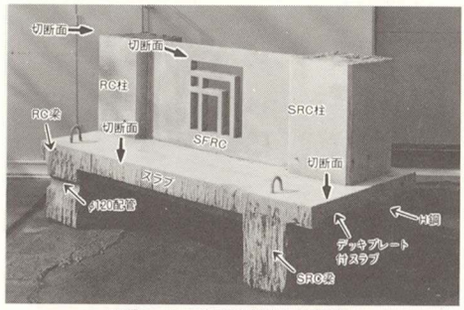


図－1　アブレイシブジェットの構成

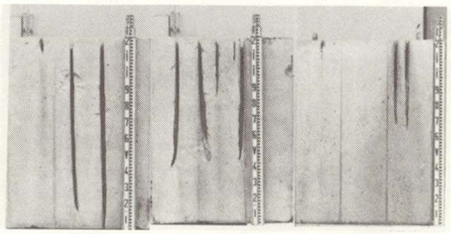
各種材料の切断例

写真－1は実寸法のＲＣ梁、ＳＲＣ梁、ＲＣ柱、ＳＲＣ柱、ＲＣスラブ、デッキプレート付スラブ、ＳＦＲＣ壁、Ｈ鋼、配管を刃式アブレイシブジェットで切断した例である。この試験体は長さ2.5m、幅1.4m、高さ1.4mであり、鉄筋はφ22mm、Ｈ鋼はＨ－300×150×6.5×９である。

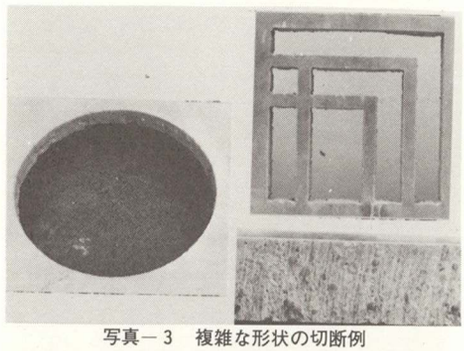
切断深さは最大1.5mまで可能であり、**写真－2**に示すごとく任意の深さにコントロールすることができる。また**写真－3**のような複雑な形状の切断も可能であり、**写真－4**のごとく鉄筋を残してコンクリートだけを切断することもできる。



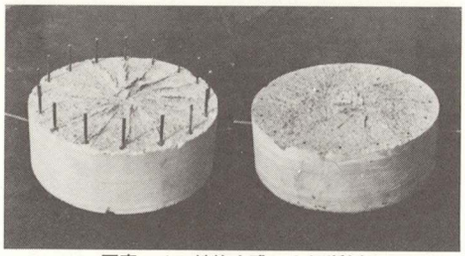
写真－1　各種材料の切断例



写真－2　マスコンクリートの切断例



写真－3　複雑な形状の切断例



写真－4　鉄筋を残した切断例

青函トンネル工事への適用例

本例は青函トンネル工事において、本坑と誘導路坑を結ぶ連絡誘導路坑取付部の覆工コンクリートの開口あけ（21箇所）に適用したものである。

本例では**写真－5**に示すごとく、切断ノズルをマニュピュレーターに搭載し、遠隔操作化を図った。(**写真－6**参照)



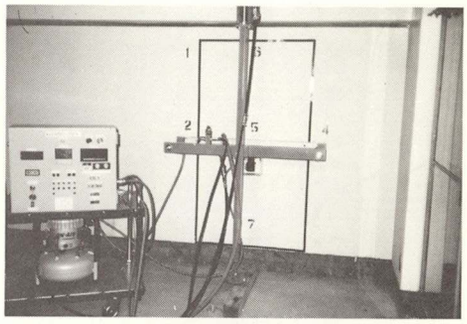
写真－5　青函トンネルへの適用例



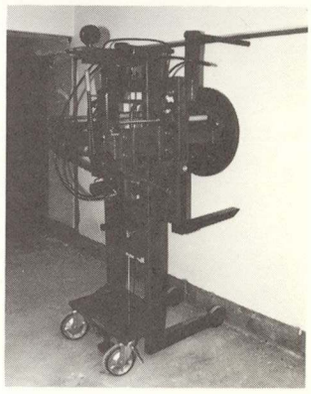
写真－6　同上完了後の切断状況

集合住宅のリフォーム解体工事への適用例

本例は手狭になった社宅の2戸を併せて1戸に改造し、1戸当たりの面積を広げるリフォーム工事において、戸境のＲＣ壁に開口をあける工事に適用されたものである（**写真－7、8**）。



写真－7 ▲
リフォーム解体工事への適用例



写真－8 ▶
同上切断片の搬出機

近年マンションや病院、ホテル、銀行等、営業しながらリフォーム工事を行うケースが増えつつあるが、こうした場合、在来の工法では騒音、振動、粉じん等の問題がある。本システムはリフォーム用に開発されたもので、装置の軽量小型化（人力で持ち運べる）、スラリーの完全回収（一滴も床にこぼさない）、低騒音化（クーラーの音なみの静かさ）、集中制御化（ワンマンコントロール）に重点を置いて開発した。

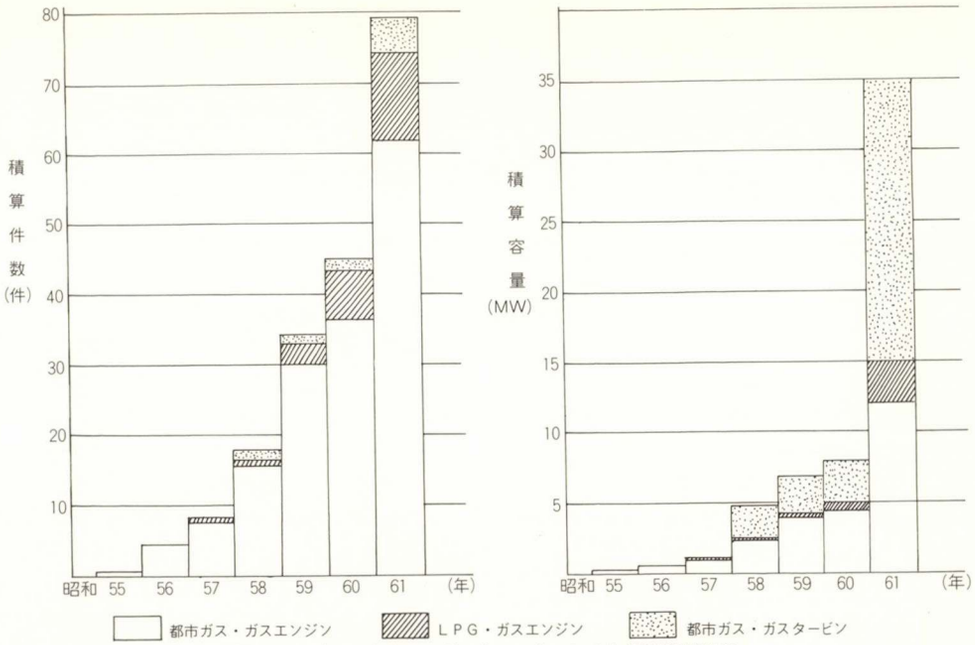
（いしばし　じょうじ　鹿島建設株式会社技術研究所
第２部第２研究室主任研究員）

設備の頁

148

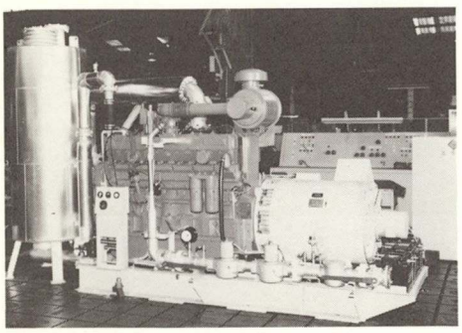
ガスによるコージェネの現状と発電機システムのパック化

藤野　耕一



図－1　ガスによるコージェネレーションの年次別積算推移

ガスによるコージェネレーションの現状



コージェネパック(200kw)外観

コージェネレーション（以下、コージェネと略記）がわが国に本格的に導入されたのは、２度の石油危機を経験した後の昭和55年頃からである。それ以降、昭和61年12月末までに設置されたガスによるコージェネの件数および発電容量の推移を図－１に示す。

設置件数、設置台数はガスエンジン発電機が多いが、発電機容量はガスタービン発電機が多くなっている。これを年次別積算推移で見ると昭和55年より年々着実に増加しており、とくに昭和61年は設置件数、発電機容量とも急激な増加を示し、ガスエンジンコージェネで、件数が対前年比170%、74件、発電機容量が対前年比300%、14,455kwになっている。またガスタービンコージェネも産業用や地域冷暖房用で使用され、発電容量が対前年比826%、20,480kwになっている。件数当たりの平均発電容量も年々大きくなり、導入当初はテスト的、デモンストレーション的要素が強く、小規模容量（50kw未満）のものが多かったが、最近では100kw～500kwの中容量システムが増加する傾向にある。とくにガスエンジンコージェネについては、上記の傾向が強く、各建物の熱需要に合わせて多種多様に排熱を利用し、とくに排熱から温水や蒸気を取り出し、吸収式冷凍機による冷房も行う高度なシステムが増加している。この例として、去年大阪ガス㈱のエリア内で稼動した松下興産㈱ツイン21ビル（726kw×３基)や、当社のＩＣＣビル（コンピューターセンター 1,100kw×３基）などがあげられる。

また昭和61年の５月29日には、通産省より“系統連系技術要件ガイドライン”や、それに伴う業務用予備電力制度が示され、コージェネ設備と商用電源とのパララン運転が可能になった。このことにより発電需要と熱需要を効率的にバランスさせる、より一層の省エネルギーシステムが可能になった。

ガスによる発電システムのパック化

コージェネを計画する場合、経済性を検討する必要がある。コージェネ導入によってランニングコストを年間どの程度低減することができるかを検討し、同時にコージェネ設備が従来方式に比べてどの程度イニシャルコストが増加するかを算出する必要がある。この相関によりコージェネ導入の是非が決定される。

そこでこのイニシャルコストを低減することがコージェネ普及の大きな鍵となっている。

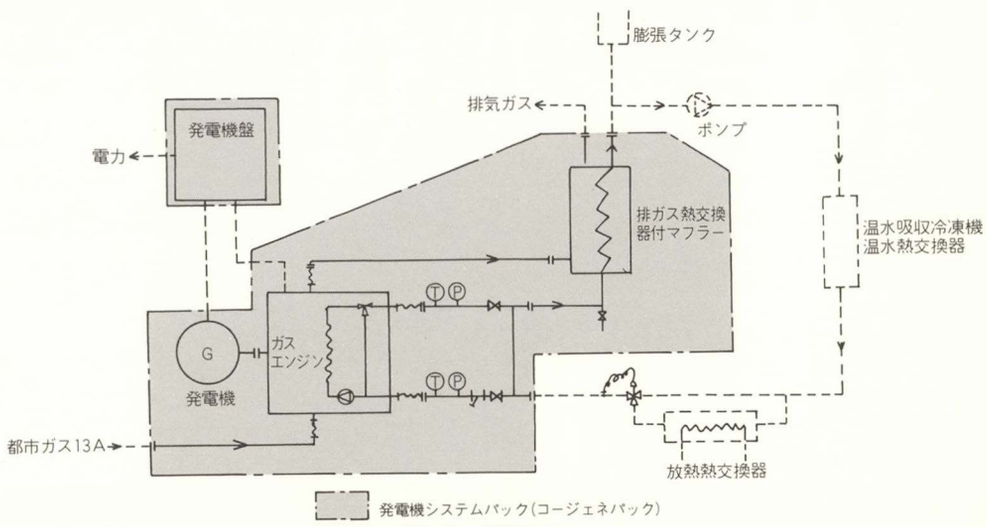
現在コージェネのイニシャルコストは、市販の冷凍機や発電機に比べて著しく生産台数が少ないために割高になっていると思われる。量産効果が出ないのは、導入初期の商品について言えることであるが、この試練を乗り越えてイニシャルコストの低減を図ることが急務である。コスト低減のためには、パッケージ化による設備コストの合理化や標準化などにより、機種を限定して量産効果を出し、コストダウンを図ることが考えられる。

コージェネが広く普及している西ドイツにおいては、ガスエンジン発電機システムの86kwと230kwの二つの出力に集中してシステムを製作し、その効果をあげ、コージェネが広く普及した一因にあげられている。

そこで、大阪ガス㈱と西芝電機㈱と共同開発した200kwのガスエンジン発電機システムパック（コージェネパック）について、簡単に紹介する。

コージェネパック開発の目的は、つぎの３点である。

①イニシャルコストの低減化



図－２　標準フロー

とくにコストウェイトの高いガスエンジンについて、量産性が高く、kw当たりのコストが安い機種を選定し、パックとしてのロッドメリットにより、コストを低減。

②エンジニアリングコストの省力化

複雑なコージェネシステムをパック化することにより、省力化とエンジニアリングコストを低減。

③納期の短縮と安定性の向上

標準化することにより納期を短縮し、量産化により汎用性を増し、システムの安定性を図る。

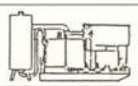
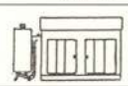
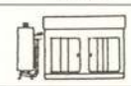
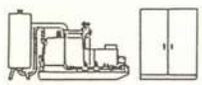
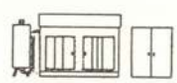
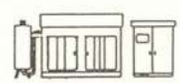
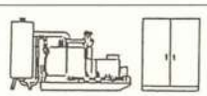
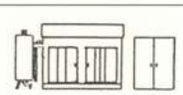
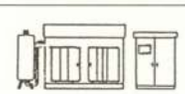
このコージェネパックの概要は、**図－2**の標準フローに示すように、ガスエンジン、発電機、マフラー付き排ガス熱交換器、発電機盤およびバッテリーより構成され、機種も**表－1**に示すように、屋内オープンタイプと屋内防音キュービクルタイプ、屋外防音キュービクルタイプの3機種になっている。また発電機も同期、誘導の2種が適用でき、低圧用、高圧用もあり、商用電源との並列運転も可能である。

排熱は、87.5℃、42㎥/hの温水で取り出され、熱交換器や温水吸収式冷凍機により給湯、暖房、冷房等に使用される。

このコージェネパックのヒートバランスは、**表－2、図－3**に示すように、効率が発電機出力で31.3%、ジャケット水熱量で31.4%、ガス/水熱交換器回収熱量で19.5%となり、総合熱効率は、82.2%になる。

以上、ガスによるコージェネの現状と発電機システムパック（コージェネパック：200kw）について紹介したが、コージェネパックについては、今後異なった機種を逐次開発する予定である。コージェネ普及促進のためには、パック化した低価格商品のシリーズ化がぜひ必要と考えている。

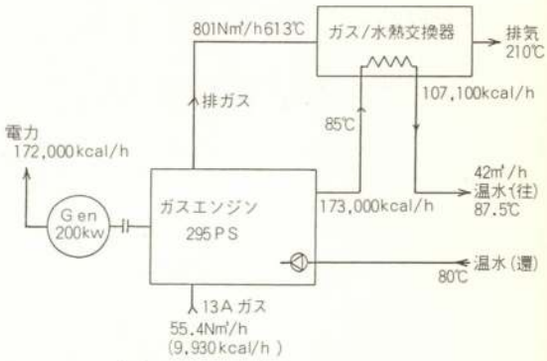
表－1　機器構成表

		屋内オープンタイプ	屋内防音キュービクルタイプ (85dB)	屋外防音キュービクルタイプ (75dB)
同期発電機	低圧 220V(440V) 単独給電			
	低圧 220V(440V) 商用並列給電			
	高圧 6,600V(3,300V) 商用並列給電			
誘導発電機	低圧 220V(440V) 商用並列給電			
	高圧 6,600V(3,300V) 商用並列給電	L：4,230 W：1,500 H：2,640 5,300kg	L：5,300 W：1,800 H：3,000 7,000kg	L：5,850 W：1,800 H：3,000 7,300kg

※　L：長さ、W：幅、H：高さ　単位 mm

表－2　ヒートバランス表

No.	内容	熱量	%
1	入熱量	550,000kcal/h	100 %
2	回収熱量	452,100kcal/h	82.2%
	発電機出力	172,000kcal/h	31.3%
	ジャケット水熱量	173,000kcal/h	31.4%
	ガス/水熱交換器回収熱量	107,100kcal/h	19.5%



図－3　ヒートバランスフロー

（ふじの　こういち　大阪ガス株式会社特需営業部TES推進チーム課長）

企画：日本建築協会



プロのノウハウ

……建築に携わる人へのヒント

知りたくても知るすべがなかったこと，書きたくても公には書けなかったさまざまなトラブルの事例・原因・対策から，その解説・ヒントまで——

最新の設備や技術ゆえに起こるトラブルから，いつも失敗をしながら明確な解決策が出されなかったトラブルまで，現場サイドの技術や知識に裏付けられた，実際に起こった事例とその対策の数々．トップレベルの技術者たちの知識と勇気を結集してまとめた．空調設備や衛生設備で失敗しないための方法や技術をすべて盛り込んだ，画期的なトラブル解消のトラの巻である．

空調設備のトラブル50

四六・224頁・定価1800円　**建築設備トラブル研究会著**

●内容概略
1　熱特性にまつわるトラブル
2　梁と天井裏スペースにまつわるトラブル
3　シャフトまわりのトラブル
4　ガラリまわりのトラブル
5　屋上・屋外設置機器まわりのトラブル
6　空調機械室まわりのトラブル
7　居室内のトラブル



衛生設備のトラブル50

四六・224頁・定価1800円　**建築設備トラブル研究会著**



●内容概略
1　地中・床にまつわるトラブル
2　シャフト・壁・便所にまつわるトラブル
3　浴室・外壁にまつわるトラブル
4　地下・屋上にまつわるトラブル
5　腐食にまつわるトラブル
6　給水・給湯にまつわるトラブル
7　排水にまつわるトラブル

〈目録進呈〉

学芸出版社

〒600 京都市下京区木津屋橋通西洞院東入
TEL 075(343)0811

日本建築協会

月間の動き

昭和62年１月分

理　事　会

常任理事会
28日　４時～５時　　於　本会会議室
出席者　佐野会長ほか16名
議事　(1)　大阪府知事表彰候補者推せんの件
(2)　建築士のための定期講習会後援の件
(3)　創立70周年記念事業の件
(4)　昭和62年度収支予算原案の検討
(5)　入退会者承認の件
(6)　報告事項

編　集　委　員　会

「創立70周年記念号」年表作成分科会
12日　６時～９時半　　於　本会会議室
出席者　安田孝氏、石田潤一郎氏、田中幹事ほか4名
議事　昭和62年３月号「創立70周年記念号」“最近20年間の年表”作成

第10回作品作風小委員会
14日　４時～６時　　於　本会会議室
出席者　寺本副委員長ほか５名
議事　(1)　最近の掲載状況報告
(2)　新建築調査表の選定
(3)　作品頁レイアウトについて
(4)　「Gallery」内容報告と今後の検討
(5)　作品作風探訪

第10回編集委員会
16日　４時～５時半　　於　本会会議室
出席者　井上委員長ほか２名
議事　(1)　２月号「腐食」特集報告
(2)　３月号「創立70周年記念号」経過報告
同構造特集「保管・貯蔵施設」の報告
(3)　「東海支部」特集報告
(4)　４月号施工材料特集「室内の仕上床」の報告
(5)　５月号以降の特集企画
(6)　来年度編集委員会の構成の件
(7)　収支状況報告
(8)　そのほか
委員会終了後乾杯

「官公庁営繕と行政建築家」特集第５回幹事会
19日　５時～８時　　於　本会会議室
出席者　増渕幹事ほか７名
議事　「官公庁営繕と行政建築家」特集編集企画

第５回書評委員会
21日　６時半～９時　　於　本会会議室
出席者　伊藤委員ほか３名
議事　(1)　「書評」「私が読んだ本」「新刊寸評」企画
(2)　来年度委員会・紙面内容のあり方

第９回投稿欄小委員会
22日　４時～６時　　於　本会会議室
出席者　北村委員ほか１名
議事　(1)　読者の頁について
(2)　アンケートについて
(3)　「大先輩に聞く」「この人」の企画
(4)　書評頁「新刊寸評」について

第10回広告企画小委員会
27日　４時～５時半　　於　本会会議室
出席者　井上委員長ほか５名
議事　(1)　２月号「腐食」特集広告経過報告
(2)　３月号「日本建築協会創立70周年記念号」・「東海支部」特集・「保管・貯蔵施設」特集広告経過報告
(3)　４月号「室内の仕上床」特集広告企画
(4)　別冊「関西の昭和生まれの建築家ー設計者のプロフィール」誌収支計画報告
(5)　収支状況報告

第13回「設計者のプロフィール」幹事会
29日　６時～８時半　　於　本会会議室
出席者　加藤幹事ほか10名
議事　(1)　「設計者のプロフィール」臨時増刊号企画
(2)　表紙、マップ、年表、ポスター(販売)のレイアウト
(3)　同号発行記念イベント企画

事　業　委　員　会

若い会員の集い小委員会
13日　６時半～９時半　　於　本会会議室
出席者　石川副委員長ほか７名
議事　(1)　前回の事業委員会の報告
(2)　「みどり学習会」実施報告
(3)　「個展の企画」実施報告
(4)　第４回以降の企画
(5)　本会創立70周年記念事業の企画
(6)　次年度委員の編成

第７回広報小委員会
14日　６時～９時　　於　本会会議室
出席者　原見副委員長ほか７名
議事　(1)　前回事業委員会の報告
(2)　「L.V.ディスク利用の企画(第1回、第2回)」実施報告
(3)　第４回以降の企画
(4)　次年度委員の編成

第６回見学会小委員会
16日　６時～７時　　於　本会会議室
出席者　伊東副委員長ほか９名
議事　(1)　前回事業委員会の報告
(2)　茶室見学会「奈良・八窓庵」実施報告
(3)　「大阪府立体育会館」見学会
(4)　「ベル・パークシティ」見学会
(5)　３月以降の見学企画
(6)　次年度委員の編成

見学会共催打合会
21日　１時半～２時半　　於　本会会議室
出席者　本会ほか事務局４名
議事　「ベル・パークシティ」見学会参加申込者の調整

第６回事業委員会
22日　12時半～２時　　於　本会会議室
出席者　鶴田副委員長ほか５名
議事　(1)　各小委員会の事業報告並びに事業企画
(2)　本会創立70周年記念事業
(3)　次年度事業委員の編成

若い会員の集い分科会
27日　６時半～９時15分　　於　本会会議室
出席者　松隈主査ほか２名
議事　「東孝光氏の講演会」の企画

若い会員の集い分科会
29日　６時半～９時　　於　本会会議室
出席者　松本主査ほか２名
議事　「出江寛氏の個展」企画

教　育　委　員　会

講習会小委員会幹事会・建築工事実務講習会講師、小委員会幹事打合せ会
19日　６時～８時　　於　本会会議室
出席者　佐々木副委員長ほか４名
議事　次年度の建築工事実務講習会ならびにテキストの内容

出　版　委　員　会

20日　５時～６時　　於　本会会議室
出席者　須賀委員長ほか６名、学芸出版社
議事　(1)　選書とプロのノウハウの経過報告
(2)　今後のテーマと執筆者選定

建　材　委　員　会

22日　３時半～５時半　　於　本会会議室
出席者　牧田委員長ほか10名
材料説明　「フィールドＧＲＣ」担当・長橋委員
議事　今後の検討建材

創立70周年記念事業

第２回日本建築協会賞協議会
13日　４時～５時半　　於　大阪グランドホテル
出席者　東畑選考委員長ほか７名
議事　(1)　推せん及び自せん状況の報告
(2)　日本建築協会賞の方向づけ

総務委員会、式典・表彰小委員会
20日　４時～５時半　　於　本会会議室
出席者　三品小委員長ほか４名
議事　(1)　被表彰者の確認並びに記念品の選定その他
(2)　式典などの広報について

講演・祝賀会小委員会
22日　２時～３時　　於　本会会議室
出席者　酒井委員ほか１名
議事　講演・祝賀会の準備について

第１回事業・編集合同企画幹事会
23日　６時～８時半　　於　本会会議室
出席者　石川主査ほか５名
議事　「建築と社会」臨時増刊号「関西の昭和生まれの建築家ー設計者のプロフィール」出版記念事業の企画

「建築と社会」昭和62年３月号「創立70周年記念号」用座談会
28日　１時半～３時半　　於　本会会議室
出席者　東畑謙三氏、白石登喜男氏
司会：足立孝氏
テーマ　「大正・昭和初期の世相と建築」

総務委員会
28日　３時～４時　　於　本会会議室
出席者　市川委員長ほか６名
議事　(1)　式典・表彰小委員会の報告
(2)　講演・祝賀会小委員会の報告

新　年　交　礼　会

5日　２時～３時　　於　コクサイホテル
出席者　662名

建築クラブ新年会

13日　６時～７時　　於　大阪グランドホテル
出席者　66名

１月の入会者（敬称略）

〔団体会員１社〕
㈱構造総合技術研究所
〔個人会員４名〕
瀬藤良雄（安井建築設計事務所）
高野考二郎（コーナン建設）
武田則明（武田建築設計事務所）
八木　勝（川崎製鉄）

編集後記メモ

■本号は、わが日本建築協会創立70周年の記念号として企画しました。建築協会の歴史等については、昭和42年3月号の「50周年記念号」に詳述されていますので、今回は、その後の20年間の動きを中心に、アンケート記事や年表を編集し、合わせて大阪の近代建築のモダニズム変容の70年についての記念論文を収録しました。座談会についても、協会の歴史よりもむしろ、建築についての自分史を中心に、白石、東畑両先生に大正・昭和初期のあり様を語っていただきました。なお、大阪の名建築といわれる大正6年以降の近代建築を20数点選んでそのディテールをカラーグラビアに収めました。これは、当初冒頭に入れる予定でしたが、写真の合わせ目の関係上、別冊（附録）として添付しました。

■創立70周年ということで、本年はいろいろと記念行事が挙行されますが、そのひとつの大きな柱として、巻頭の会長のことばにもありますように、「日本建築協会賞」(第1回）が決まりました。今後、この70周年を契機にして、協会の発展や誌面の充実を期したいものであります。

■それにしても、日本建築協会の創立当初の大正6年（関西建築協会と称していた。大正8年より日本建築協会と改称）の会誌をひもといてみますと、その結成の機運が壮大なものだったことがうかがわれます。このことは50周年記念号にものせましたが、その後の読者の参考に供するため、少し長くなりますが、設立の動向を創刊号より引用してみます。

*

吾建築界の趨勢亦一層の努力を要す。一言以て之れを掩へば「混沌たり焉明治聖代の建築界は所謂過渡期として活動したるもの汲々乎として泰西建築術の輸入咀嚼に努力したるの時機也、今や舞臺は一轉しつゝある也回轉しつゝある也否急轉しつゝある也さはれ大勢の歸向に着眼しつゝあるの識者を除いては多くは無我無中也只管過去の「スケール」を以て現在を測らんとす唯是明治後期の順潮に舟を放てる也而して舟中の棹夫多くは夢を畫いて太平を説く。

關西の建築家は多くは駄眠同舟の水夫と異なるなかりしやも知れず、世に「打てば響く」の語に眞理ありとせば關西の建築家は實に太平の春夢を驚かされて醒めたる也東の岸を洗ふ波は西の岸をも打つ一波起りて萬波伴ふとかや、汎んや舟中の水夫をや。

醒めたるものは覺らざるべからず、大正の建築界の前途之を如何にすべき乎、知らず建築家は自己のために建築を建てつゝ滿足すべきか否乎、建築家はあまりに目前の事務に吸々として自我的小天地に跼蹐しつゝあるにあらざるなき乎、今須らく眼界を大にして對社會的に活路を求むる要なきや否や進んでは國民を指導して國家的建築の建設に努力すべきに非ざるか、斯くして建築家は自個を離れて社會と接觸し國民と同化して以て大正の建築を建設するの急務を認めずや、果して然らば同志の糾合を謀り意思を疏通して各自の小我を捨て一致團結據って以て社會を指導すべき團体の組織は豈徒事ならんや。

機運は自から來る。蓋し天意なるなからんや關西の建築家は東風吹く丁己の二月以來響に應ずる琴線の如く今更らに過去を顧みて前途の發展を期するに一致せり、斯界是より多事ならざるを得ず、斯くして吾關西建築協會は櫻花笑まんとする三月下旬呱々の聲を擧ぐるに至る。

*

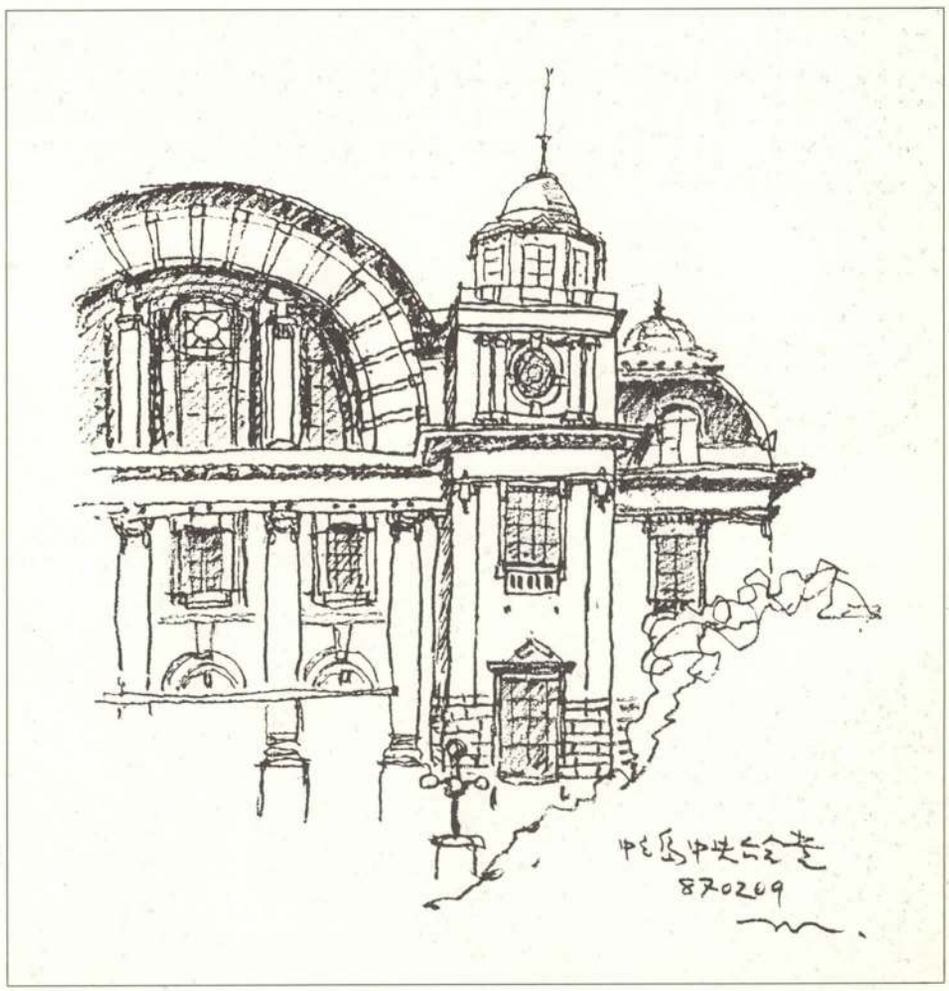
■大正6年3月30日、創立委員（片岡安、武田五一、波江悌夫、池田実、設楽貞雄の5人）の檄文により、創立総会を当時の大阪ホテルで開いている。そのときの出席者39名の氏名を列記するとつぎのとおりです。いずれも、そうそうたる人士です。

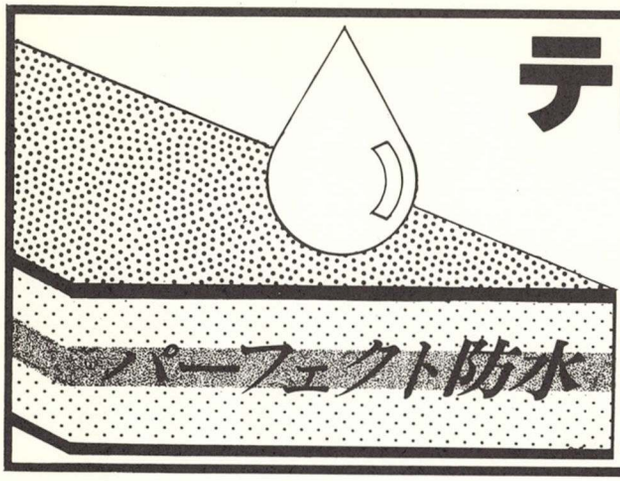
井尻良雄	池田實	石田信夫
今林彦太郎	伊部貞吉	原田俊雄
濱野三郎	長谷部鋭吉	德永庸
大林賢四郎	小笠原鈅	置壜章
片岡安	葛野壯一郎	金剌森太郎
田中勤	田中大作	田中豊輔
武田五一	宗兵藏	波江悌夫
永瀬狂三	村井三吾	牛村喜勇
山本鑑之進	吉木久吉	松本禹象
藤田旭之助	舟橋喜一	藤井厚二
小林悉	佐藤彰美	佐藤四郎
木子七郎	光安梶之助	設樂貞雄
本野精吾	瀬戸文吾	日高胖

■創刊号（関西建築協会雑誌と称していた)の「発刊の辞」にも、「此の進展期に際し、社會を指導する大抱負の下に、我が國建築界の堅実なる發展を期し、科学的に組織ある文明的都市の建設を計るべき急要の時期たるを覺悟し、以て將に鳴らんとする晩鐘第一の金鋼杵たらんと欲す、蓋し、其の事や大にして其の責や亦重しと云はざるべからず。……從來我が國一般に措いて間はざりし都市建築の拘束改良、家屋政策、其の他文明的施設の刻下急要の問題にして苟くも建築に關連せるものは、凡て之が研究調査をなし、之を社會に發表して啓蒙の位置に立たんと期す。」とその精神をのべられています。

会誌名も大正8年には「日本建築協会雑誌」となりましたが、すぐ翌年の大正9年1月号より文字通り、社会との接触を深めるために「建築と社会」と改題され、今日に至っているものです。創刊以来、この3月号で780号に達しました。まさに関西の建築界の歴史を知る上での貴重な財産といえると思います。

（松井記）





テトカッパー防水層

防水専業の研究・経験から生れたすくない資源のパーフェクトな防水層です。
この防水層は（一層防水）施工するだけで、防水は完璧です。
温度変化に伸びがなく、柔軟性に富み、耐酸、耐薬品性に優れ、腐蝕しません。

カッパー防水帯　コーパータイト　新工法
オクロン防水帯　プレノテクト吹付工法

●お申込次第カタログ進呈

奥山化工業株式會社

本　社	東京都中央区銀座8—4—9	電話03（571）2703
大阪事務所	大阪市淀川区東三国6—1—41	電話06（391）1081-2
埼玉営業所	埼玉県桶川市東1—3—30	電話0487(74)2845-6
厚木出張所	神奈川県厚木市金田259	電話0462（21）1761
名古屋出張所	名古屋市南区若草町33	電話052（811）3660
九州出張所	佐賀県佐賀郡諸富町大字諸富津450	電話0952（47）2945

■防火・防煙シャッター　■軽量シャッター
■ステンレスシャッター　■クリスタルシャッター
■アルミニュームシャッター　その他特殊シャッターの製造

アフターサービスの24時間態勢完備

鈴木シャッター工業株式会社

大阪市北区茶屋町5番2号	電話大阪	06 市外局番 371代表 4151～6
北陸営業所　金沢市長田町119番地	電話金沢	0762 市外局番 65—5135～6
神戸営業所　神戸市長田区大橋8-4-7	電話神戸	078 市外局番 611—7971 631—2021

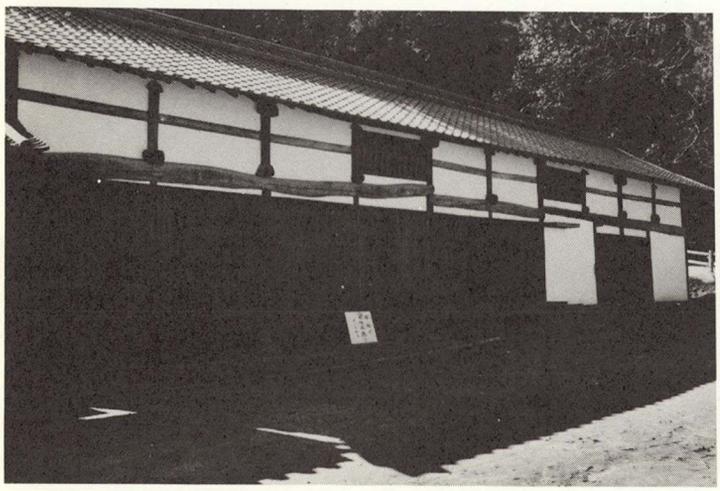
防火・防煙から避難装置まで
建築防災の総合メーカー

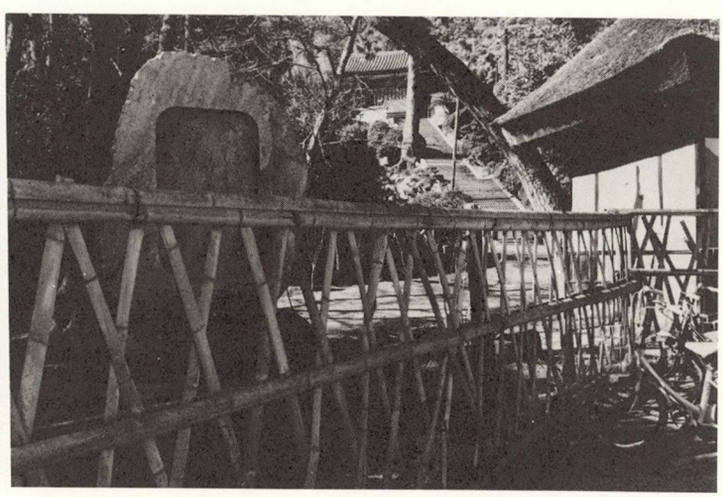
豊かな経験
最新の技術

東洋シヤッター

東洋シヤッター株式会社

本社：大阪市東区両替町1—12 日生ビル　☎（943）6571代表
東京・横浜・盛岡・仙台・水戸・静岡・岡崎・名古屋・富山・大津・京都・神戸・広島・高松・福岡他全国主要都市





空気調和・給排水・衛生・防災設備　設計・施工

株式会社 朝日工業社

本　社　東京都港区浜松町1-25-7　電話（434）6171(大代)
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話（302）2271(代)
支　店　北海道・東北・名古屋・中国・九州
営業所　釧路・函館・盛岡・横浜・静岡・京都・神戸

空気調和設備
衛生設備 設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町3番5号　電話（352）1131（代）
本　社　東京都中央区日本橋蠣殻町2－22　電話（667）3431（大代）
支　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

空調・衛生
防災・汚水処理 設計施工

株式会社 大阪城口研究所

取締役社長　城口庸平

大阪市北区角田町2番15号 電話 大阪372局7151(代)
京都市東山区大和大路正面上ル 電話 京都561局4944(代)
神戸市中央区下山手通6－2－8 電話 神戸341局5892

空気調和・衛生設備 設計施工

株式会社 三晃空調

本　社　大阪市東区城見ツイン21MIDタワー　電話 06－949－1371
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話 03－344－1911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話 06－363－1371
支　店　仙台市大町2丁目2番10号　電話0222－61－3002
名古屋市中村区名駅南2丁目14番19号　電話052－581－8571
広島市中区紙屋町1丁目2番22号　電話082－247－4535
福岡市中央区大名2丁目4番22号　電話092－761－3795
出張所　札幌・青森・秋田・盛岡・宇都宮・千葉・川崎・横浜・富山・福井・京都・神戸・松江・高松・下関・熊本・鹿児島・沖縄

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)441-8231
東京本社　〒104 東京都中央区銀座2丁目2番17号　電話(03)535-5251
支　社　名古屋・福岡
支　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・京都・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・松江・徳島・長崎・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン・スリランカ
技術研究所　〒354 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　社　大阪市南区瓦屋町2丁目11番16号（オートセンタービル1.2階）
郵便番号542　電話 大阪(06) 768－5031代表
メンテナンス部　電話 大阪（06）768－1651代表
東京支店　東京都千代田区九段南2丁目2番5号（九段ビル2～4階）
郵便番号102　電話 東京(03) 262－3241代表

■給排水衛生　■冷暖房
■空気調和設備　■その他管工事一切の設計・施工

斎久工業株式会社

本　社　東京都千代田区大手町2-6-2（日本ビル）
電話　03-(270)-7411(代)
大阪支社　大阪市北区中之島4-2-38　電話 06-(443)5041(代)
支　店　札幌・岡山
営業所　仙台・千葉・横浜・名古屋・金沢・四国・広島・福岡
出張所　福井・倉敷・松山・宇都宮・静岡・苫小牧

新日本空調株式会社

大阪支店　大阪市北区堂島浜1丁目2番6号（新大ビル）
電話　(06) 344－6031　(代)
本　社　東京都中央区日本橋本石町4-2(三井第二別館)
電話　(03)　279－5671（大代）
名古屋・九州・広島・札幌・東海村・北陸・大分

空気調和設備
給排水・衛生水道
電気設備
厨房

環境衛生施設
荷役運搬機械
化学鉱山機械

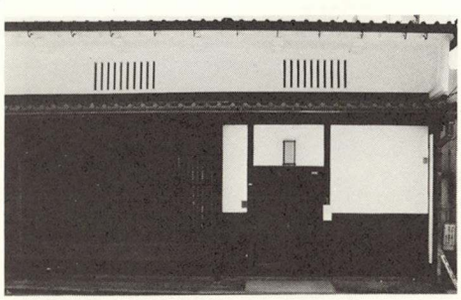
三機工業株式会社

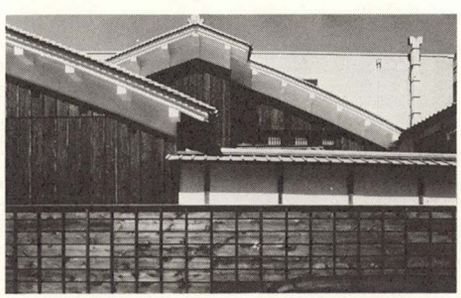
取締役社長　白谷清二
取締役大阪支店長　堀亀久治

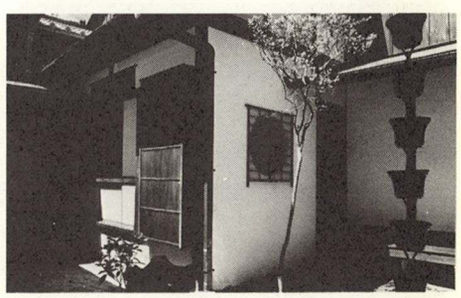
大阪市東区北浜2丁目22番地　電話　大阪(202) 代表3071
本　店　東京・日比谷・三信ビル
支　店　名古屋・九州・北海道・中国・東北・北陸・四国・シンガポール
営業所　横浜・静岡・豊田・岡山・金沢・新潟・香港

cleanair
一年中 秋のすがすがしさ！

創業1901
須賀工業株式会社
大阪市西区土佐堀1丁目2番30号TEL.06－441－5171(大代表)〒550







電気・計装工事 設計施工

栗原工業株式会社

取締役社長 栗 原 信 英

大阪市北区角田町1-1 東阪急ビル TEL06-313-1101
支 店 東京・名古屋・舞鶴・京都・天理
大阪南・神戸・広島・四国・九州

電気設備 設計施工

朝陽電気株式会社

代表取締役 山 本 貴 士

本 社 大阪市北区中之島3－2－4 朝日ビル TEL 大阪06 (385)1361(代)
大阪営業所 TEL 大阪06(385)1361(代) 京都営業所 TEL 京都075(311)1185(代)
東京営業所 TEL 東京03(574)0665 福岡出張所 TEL 福岡092(771)6168

電気工事設計施工

株式会社 三 興 社

代表取締役 土 井 敏 裕

本 社 大阪市北区西天満2丁目6－8(堂ビル7階)
電 話 (361) 3 6 7 1 (代)
支 店 東京都中央区日本橋箱崎町20番5号
電 話 (671) 1 4 7 8 (代)
出張所 川崎・相模原・堺・滋賀

電気設備工事設計施工

東光電気工事株式会社

大阪支社

大阪支社長 横 田 幸 一

大阪市東区高麗橋五丁目二八番地 電話大阪 (202)0325～9番
本 社 東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支 社 札幌・仙台・丸ノ内・名古屋・福岡
営業所・出張所 全国主要都市2ヶ所

――誠実と技術でお応えする――

住友電設

取締役会長 小 林 四 郎
取締役社長 代 谷 正 元

住友電設株式会社
本社／〒553 大阪市福島区福島7丁目22-8 ☎(06)452-1151(大代)
東京／〒105 東京都港区芝2丁目2－17 ☎(03)454-7311(大代)

営業種目 設計・施工・監理

●電力工事
発変電設備工事
架空送配電線工事
地中送配電線工事

●設備工事
ビル電気設備工事
工場電気設備工事
防爆電気設備工事
計装工事
空調工事
給排水衛生工事
特殊配管工事
消防施設設備工事

●プラント工事
●情報システム工事
光伝送システム工事
CATVシステム工事
各種アンテナ装置工事

限りなきクリーンに挑戦する!!
電気設備・クリーンルーム・冷暖房設備
給排水衛生設備・計装制御設備・立体自動倉庫
エネルギー集中監視システム・回転式自転車置場
設 計 施 工

三宝電機株式会社

取締役社長 嘉 納 伝 三

本 社 〒530 大阪市北区西天満2－6－8(堂ビル) TEL 06(364)1471
TELEX 523－3287
東京支店 〒105 東京都港区新橋2-16(ニュー新橋ビル) TEL 03(504)0231
TELEX 222－6724
名古屋支店 〒462 名古屋市北区金城三丁目12－14 TEL 052(991)5131
神戸支店 〒657 神戸市灘区岩屋中町1-2-9(エビスビル) TEL 078(881)5571

奉仕感謝の店
タイル工事施工

株式会社 川岸窯業商店

本 社 〒550 大阪市西区西本町1－13－33
電話 大阪 06(532)代0461 〒550
天理営業所 天理市丹波市新町50

電気・計装・空調工事 設計施工

ヤマト電気エンジニアリング株式会社

取締役社長 山 本 永 造

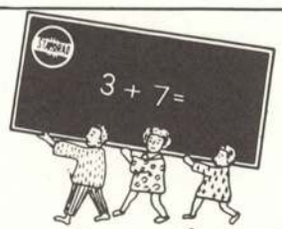
本 社 大阪市北区西天満5丁目1番3号
TEL 06－364－3056 (代)
支 店 東京・神戸・広島・岡山
事業所 名古屋・岡山・札幌・苫小牧・浜松・滋賀
京都・高砂・三原・徳山・松山・新居浜・福岡・沖縄



〒556 大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
☎ 五六一～七五四五
ファックス 五六一～七四一六

ナニワ瓦株式会社

あらゆる屋根工事の相談は、



Standard Board&Slate

フタバ工業

〒547 大阪市平野区加美北3－4－5 TEL 大阪06(792)5858(代)

模型製作

石膏模型・アクリル模型製作

宮岡建築模型製作所

〒103 東京都中央区日本橋浜町3 14 11
電話 (03)669 7565 FAX (03)669 7565

造園設計施工

富士造園土木株式会社

〒665 宝塚市山本東2－6－17
電話 0797－88－0501(代)

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03－344－1851(大代)　大阪本社 ☎06－448－3603(代)
大阪支社 ☎06－448－5851(代)　名古屋支店 ☎052－211－1535(代)　中国支店 ☎082－247－5541
九州支店 ☎092－431－2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

給・排水・衛生・消火・暖冷房設備

㈱西原衛生工業所大阪店

大阪市大淀区中津6丁目8番4号　電話大阪(458)3628番
支店・営業所　福岡・京都・天理・川西

空気調和　搬送機設備
給排水衛生　設計施工

第一工業株式会社
大阪支店

大阪支店　〒530　大阪市北区西天満3丁目6番14号
電話　06－364－6661(代表)
本　社　〒100　東京都千代田区丸の内3丁目3番1号
電話　03－211－8511(代表)

空調・衛生・防災設備　設計並施工

日本管工業株式会社

本社及京都支店　京都市南区西九条豊田町20番地の1
電話(681)5101～5・夜間専用(691)1045
大阪支店　大阪市北区天満1-5-20　電話(06)352－3501㈹
三重支店　津市栄町2－111　電話(0592)26－3610㈹
四日市営業所　四日市市西末広町　電話(0593)53－7431㈹
滋賀営業所　大津市中央2丁目4-28　電話(0775)22－9738㈹

暖・冷房・空気温湿度調整装置
設計施工

高砂熱学

大阪支店　大阪市北区芝田1丁目4-8(北阪急ビル9階)
電話　大阪(372)2511(代表)
本　社　東京都千代田区神田駿河台4丁目2番地

Carrier
冷暖房はキャリア
CARRIER

東洋キヤリア工業(株)デストビューター関西地区
日本冷熱工産株式会社
本社及大阪営業所　吹田市豊津町40番38号
電話大阪(384)1201～7

MODAIR
空気調和設備
換気・除塵設備　設計施工

東洋熱工業株式会社大阪支店

大阪市西区靱本町3－1－27　TEL(443)8071
本社　東京都中央区京橋2丁目9　TEL(562)1351
支店　名古屋・福岡

活字のない印刷

日本写植印刷株式会社

代表取締役　神田都義

本社　〒545 大阪市阿倍野区阪南町7-5-30　☎06(606)1111代
日本写植センター　〒892 鹿児島市名山町4-7 三宝ビル　☎0992(26)4371
津山写植センター　〒708 津山市大手町8番5号 模範店会館　☎08682(4)1771
沖縄写植センター　〒900 南風原村兼城　沖縄印刷団地　☎0988(55)6100

ガス設備の設計・施工のご相談は
大阪ガス指定工事会社・大阪ガス住設機器特約店

大晃設備株式会社

本社：設備部
大阪営業所　大阪市北区西天満5-11-12　電 06－313－1846
枚方営業所　枚方市甲斐田東町9－3　電0720－49－2128

空気調和設備・給排水衛生設備・上下水道施設
環境衛生施設・公害防止施設／設計・施工・監理

山田工業株式会社

本社　大阪市西区京町堀1－6－8　電話 06(443)8161(大代表)
(環境装置事業部専用)　電話 06(447)0831　(代表)
分析センター　大阪市淀川区三津屋南1-1-35　電話 06(308)1491
支店　東京・名古屋・福岡
営業所　京都・神戸・姫路・広島・高松・松山

飛鳥野瓦(意匠登録549771号)
渡辺式緩勾配安定瓦(実用新案登録出願中110750/110751)　製造販売
各和洋瓦全般・カラーベスト・モニエル瓦・セキスイカワラU

創業67年　綜合施工卸
久保田鉄工・松下電工㈱・日本モニエル㈱・積水化学工業㈱・富士スレート㈱・特約代理店

瓦寅工業株式会社

本社　大阪市生野区林寺1丁目5番14号　㊡544
電話 06(715)0201代表～5番
営業所　大阪市平野区　工場　兵庫県三原郡(淡路島)

文化庁・宮内庁・各府県庁
国宝・重要文化財　社寺・天理教教会本部　御用達

株式会社瓦宇工業所

代表取締役　小林麻造
〒630 奈良市西新在家町17番地
電話 奈良(0742)26－2901番(代表)

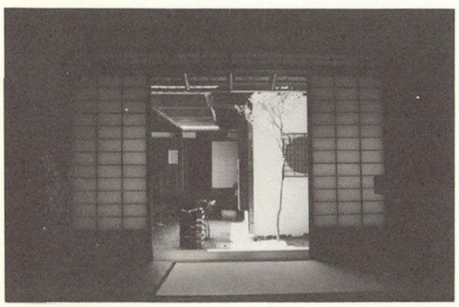
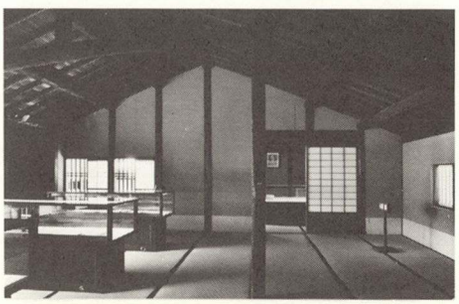
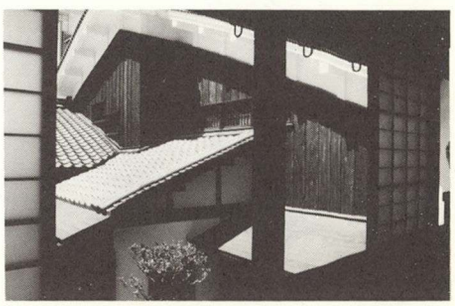
特殊壁装材製造販売　和室に最適
●聚楽壁紙●ホクシノン(無機質壁紙)
(株)ホクシンクロス
〒583 大阪府羽曳野市島泉８－173－1
TEL(0729)39－3610
工場　〒580　大阪府松原市三宅中8丁目1番9号
第一　〒639-11奈良県大和郡山市小泉町2744
第二　〒597　大阪府貝塚市王子５０１

建設業界をアシストする
ポゾリス
■コンクリート用混和剤　■無収縮グラウト材
■鉄筋コンクリート用防せい剤　■工業用特殊床材
製造元 日曹マスターピルダーズ株式会社
販売元 ポゾリス物産株式会社
本　社/東京都港区六本木3－16－26 ☎ 03-582-8811
大阪営業所/大阪市東区北浜３－７ ☎ 06-202-3294

営業種目
●防水工事　塗布防水・シート防水・モルタル防水
●樹脂注入接着工法　各種樹脂注入接着補修工事
●亀裂補修工事　各種樹脂注入・充填・コーキング
●シーリング工事　シリコン・チオコール・ウレタン・アクリル
●吹付工事　アクリル・リシン・弾性タイル・その他
◇建設業許可　大阪府知事許可（般－53）第51225号
◇日本シーリング工事業協会々員
大阪市北区末広町３－２１
星和地所扇町ビル201 S
TEL 06(315)0701
(株)特殊技研

省エネルギー時代の断熱用シート防水材
日立バイナリーシートP
日立バイナリーシートPは，日立防水シートに発泡ポリエチレンを独自の貼り合わせ技術で積層した，二重構造の断熱兼用二重防水シートです。
日立電線株式會社 本社 東京都千代田区丸の内2丁目1番2号（千代田ビル）

デンカCSAファミリー製品
●デンカCSA……コンクリートのひびわれ防止に
（膨張性混和材）
●デンカタスコン……鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
（グラウト用無収縮材）
●デンカキューデックス……コンクリート躯体の漏水補修に
（止水・補修用急硬セメント）
●デンカES……地盤補強用薬液注入
（土質安定用急硬材）
●デンカΣ1000……コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に
（製品用超高度混和材）
電気化学工業株式会社
近畿地区販売店
浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・網野（07727）2－2220
舞鶴（0773）76－0133
金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）332－6861
TEL 東京（03）272－8501
小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）443－6181
光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）252－6000
株式会社 トーゴー/本社
TEL 滋賀・守山（0775）83－2381

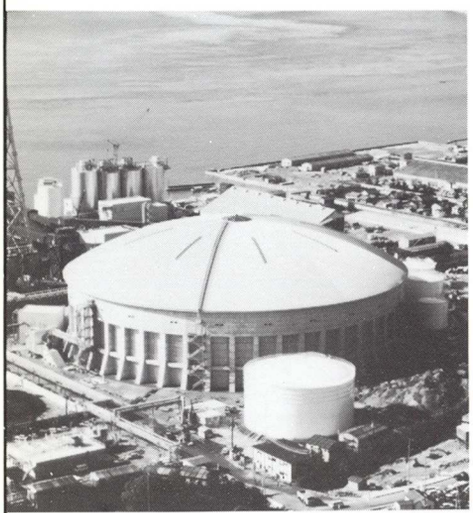
特　許・耐酸被覆鋼板
耐久建築屋根・外壁材料

オリエンタルメタル

半世紀の実績が誇る技術とアフターケアー！

長尺物・色彩豊富・責任施工

品　種・オリエンタルカラースーパーメタル(CSPM)
・オリエンタルスチールライト(ＳＴＬ)
・オリエンタルメタル(ＯＰＭ)



電発竹原火力石炭庫屋根に採用

波板規格　S小波・S大波・V波・ボックス波・Wジャンボ波・Vデッキ
SVジャンボ波・ボルトレスルーフBL・其の他

用　途　平板・波板・棟包・雨押類・谷樋・竪樋・軒樋
各種換気装置〔モニター・ベンチレーター・ムーバー・エキゾスター(強制)〕
ボーロイド(断熱材)D.G.K.　※カタログを御請求下さい

オリエンタルメタル製造株式会社

大阪本社　〒660　尼崎市昭和南通り３－26 松本ビル　電話大阪(06)412－5131(代)
支店及工場　大阪・九州・名古屋・広島・東条・刈谷・姫路

東京本社及工場　〒335　蕨市塚越５丁目６番32号　電話 蕨(0484)42－3115(代)
支店及工場　東北・東京・関東・熊谷

建築技術出版案内

お待たせしました。建築構造計算資料集②
増補 鉄筋コンクリート構造 (2)

建築の構造計算は非常に煩わしい手間のかかる仕事ですが、本書の図表を活用することによってこのような煩雑さから解放され、能率の向上をはかることができます。しかも一貫した方針のもとにシリーズとしてまとめた意欲的な実用便覧で、構造計算書作成に強力な武器となります。
中川　淳　編著　　B５判・234頁・定価3800円

インテリジェントビル Q&A　新刊
ことばがわかる！ 仕組がわかる！
これからのオフィスビルの設計

監修：沖塩荘一郎　B５判・144頁・定価2300円

近年の情報化の進展や社会環境の変化から、オフィスの内容は急激に変わりつつある。オフィス空間に電子機器が大量に入りこんできている。オフィス空間に対する要求も大幅に変化してきている。配線処理、セキュリティ対策、ＶＤＴに対応した照明・採光、機器発熱への対応、休憩室などの整備、面積など、在来のオフィス計画とは多くの面で違いがでてきている。この本は、オフィスビルの変化と対応策を判りやすく解説している。
(監修者のことばから)

月刊 建築技術 3

No.427　全国書店で好評発売中！　特別定価 1100円

最近の床構法とその性能　中山 康志
下半分をＰＣ化し、上部を現場打ちコンクリートで床スラブを完成するハーフスラブの種類、事例のほか、振動と遮音性についても紹介する。

現代建築技術の忘れもの (1)……村松貞次郎
収縮帯によるＲＣ建物のひび割れ防止……萩原 久ほか
外壁タイルの剝離診断と作図作業……佐藤紀男ほか
雪国に建つ集成材ドームの施工……畑中公樹ほか
世界の大規模木造建築を訪ねて……今川 憲英
立体トラス上屋の横移動施工……岡田貞夫ほか
安全を軸として高齢者と建築……古瀬 敏
改正された生コンＪＩＳの要点とその適用……加賀 秀治
強震観測速報 岩手県中部の地震……建築研究所
台湾・花蓮沖地震速報……世良耕作ほか

●補修・改修
材料と工法（特別連載企画）
コンクリート外壁の耐久性と塗替システム
たえず厳しい温度変化や伸縮挙動にさらされるコンクリート建物の外壁仕上げとして、近年弾性と防水性のある材料が注目をあつめているが、その動向を探る。

●建築ソフト
CAD PART② CAD AGE あなたが主役です
バースを軸として建築における企画設計計画のシステム化を検討した２月号に続き、今回はＣＡＤ全般について概観し、省力化効果などを探る。木造住宅設計や家具レイアウトなどのケーススタディや、マウス・デジタザなどの入力方法、ハードウエアについても言及する。

〒160 東京都新宿区北新宿1-8-1中島ビル　株式会社 建築技術　TEL03(363)4211　FAX03(366)3876

建築と社会　第68輯第3号
昭和62年3月25日発行（毎月1回25日発行）
昭和24年3月19日第3種郵便物認可



■ご好評をいただきました屋内用につづいて屋外用も発売に踏切りました。

無表情なシャッタースペースが、ダイナミックなコミュニケーション空間に変わる。

- 鮮やかに、お店のイメージをアップ。
- 取り付けカンタン。
- 交換も自由。

シャッターの前面にもう一枚、表情豊かなスクリーン〈シャッタービジョン〉が、街行く人々に心暖まるコミュニケーションを始めます。〈シャッタービジョン〉は、お好みの写真や文字、絵を美しく再現でき、その鮮明な出来栄えは人の目を引きつけて離しません。今まで生かされていなかったシャッタースペースを〈シャッタービジョン〉は、ファスナー1本でスクリーンを交換でき、イベントや季節に合わせて、お店のアピールを主張しだします。すでに銀行、証券、商業ビル、百貨店などで幅広く使用されています。また既設のシャッターにも取り付けられますので、最寄りの弊社営業所へお気軽にご相談下さい。

ビル開口部の防災総合メーカー
東洋シャッター株式会社
本　社　〒540 大阪市東区両替町1－12 日本生命谷町ビル
☎06(943)6571(代)
東京本社　〒106 東京都港区六本木6-3-18 第一地所麻布ビル
☎03(479)2911(代)

定価九五〇円(送料共)
表紙スケッチ・吉田隆一（説明目次頁）